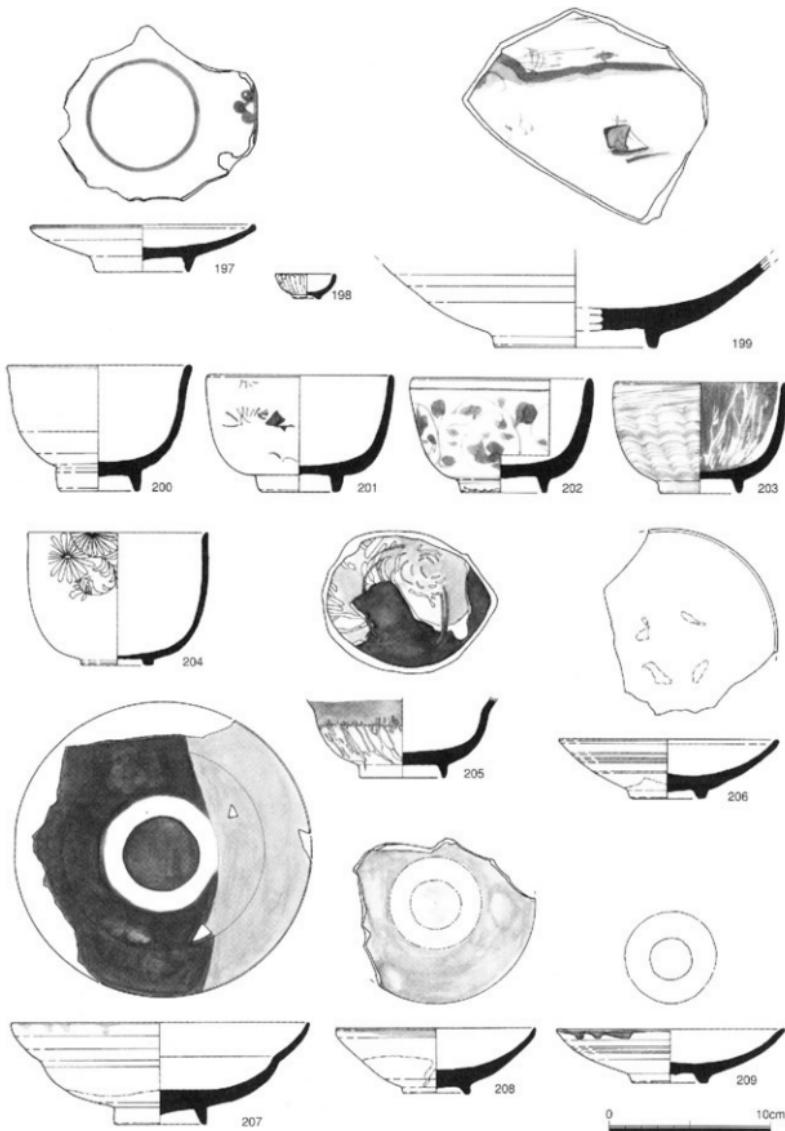
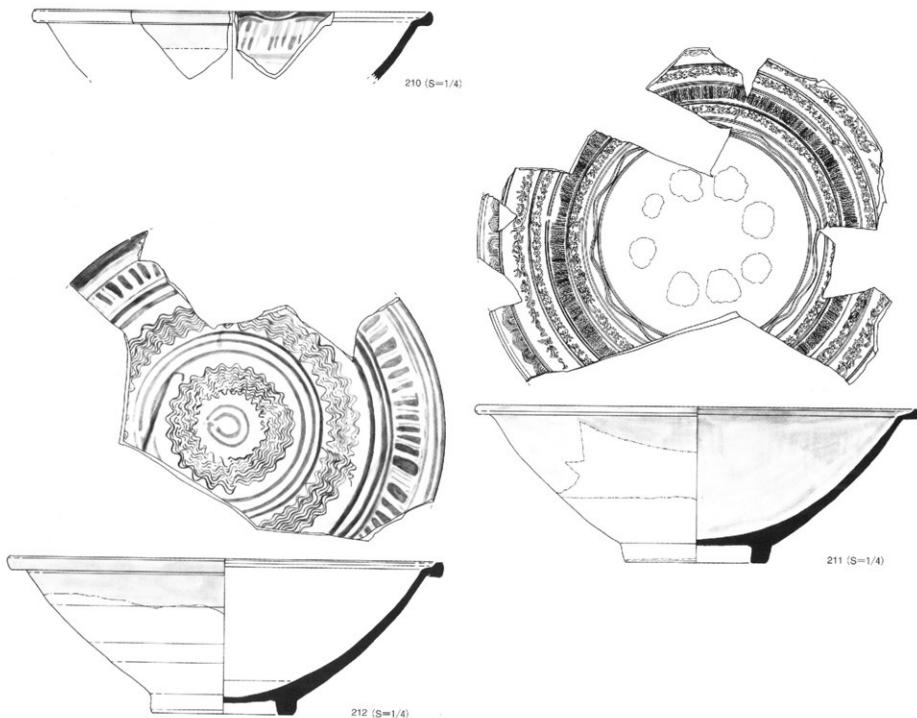


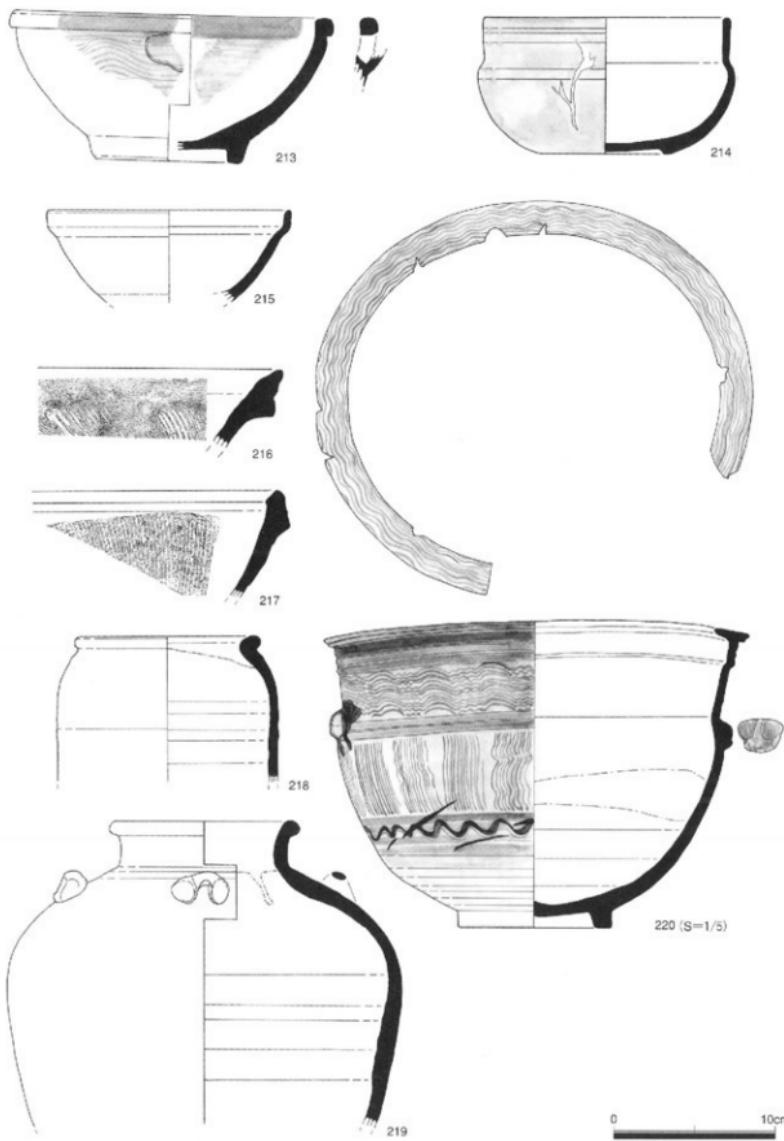
第85図 SD3003出土遺物実測図(2)



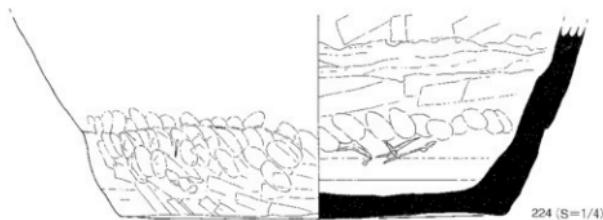
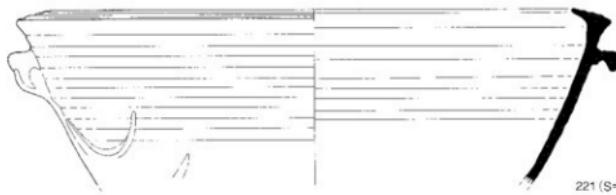
第86図 SD3005出土遺物実測図(1)



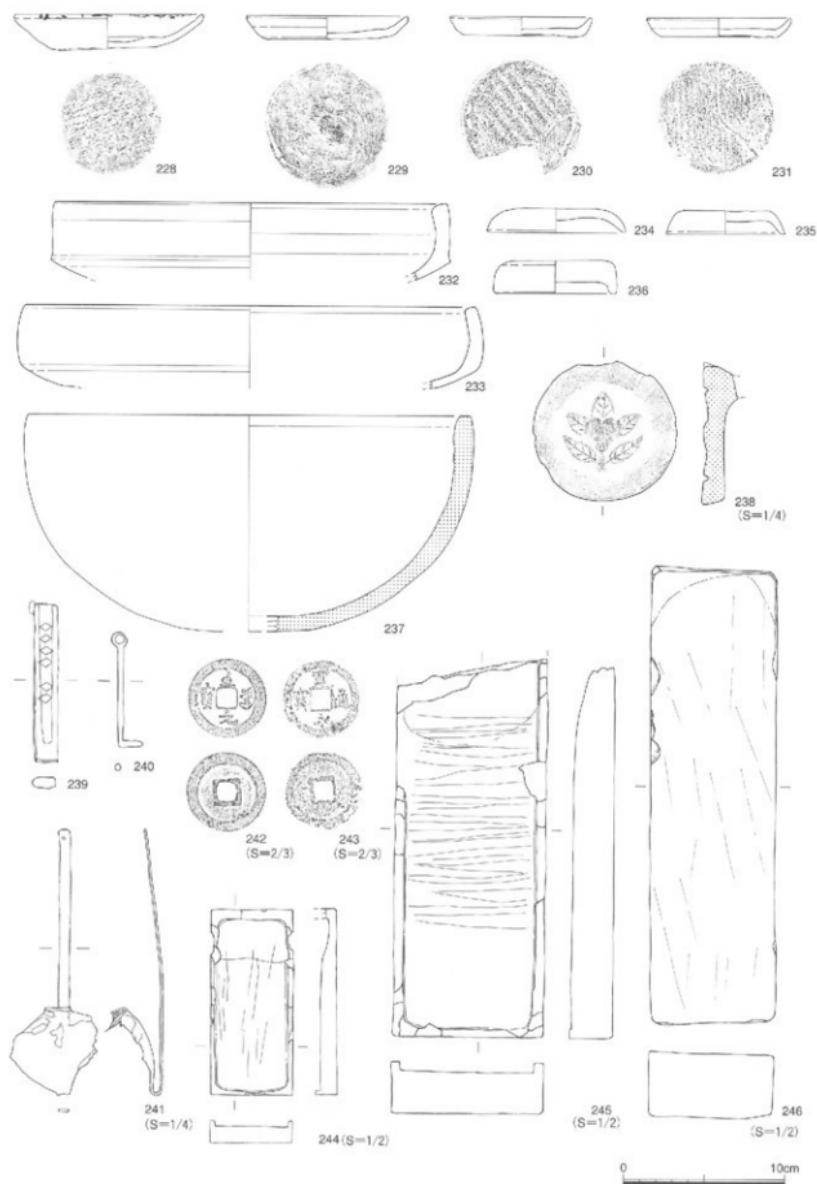
第87図 SD3005出土遺物実測図(2)



第88図 SD3005出土遺物実測図(3)



第69図 SD3005出土遺物実測図(4)



第90図 SD3005出土遺物実測図 (5)

部外面以外、濃い暗緑色の灰釉がかけられ、内面見込部と疊付には胎土目痕がみられる。182は肥前系の陶器皿である。露胎のまま残された高台部分以外は、内外面とも灰釉がかけられているが、内面見込部分には蛇ノ目釉剥ぎが行われている。183は肥前系の陶器皿である。底部外面以外、全面に釉がかけられ、内面見込部には砂目がみられる。184は灰釉がかけられた肥前系の陶器皿である。外面底部は露胎のまま残され、内面見込部には砂目がみられる。185は瀬戸美濃系の陶器製水注の蓋である。上面には灰釉がかけられ、底部の切り離しには回転糸切り技法が使用されている。186は口縁付近に火櫻痕がみられる備前の陶器製鉢である。全体に堅く焼き締められ、内面には9条1単位の播目がつけられている。187は口径100mmを測る土師質の灯明皿である。外面には煤が付着している。188は土師質の皿である。189は口径88mmを測る土師質の灯明皿である。口縁部には煤が付着している。190・191は土師質の皿である。192は口径120mmを測る土師質の皿である。193は石製の加工円盤である。楕円形で長径は58mmを測る。194は木製品漆器碗で、内面には赤漆が、外面には黒漆に赤漆が重ね塗りされている。195は木製品の箸で口径337mmを測る。196は木製品の箸で長径271mmを測る。

溝 5 (SD3005) (第82図)

部分的に大きく削平されているが、1区の西側を北から南に向かって40m余りにわたって延びる溝である。北側は直線的で溝の幅が0.5m前後と細くSD3003にはほぼ並行しているが、南に向かうにつれて徐々に幅を広げながらその方向を南東に転じ、最後はSX3001の西端付近で終わっている。途中2ヶ所で東に向かって枝分かれしているが、いずれも分岐点から7~8m東で途切れている。枝分かれした溝の内部や、最初の分岐点から南側の溝の中には、投棄されたと思われる不規則な砾の集石が残されていた。D・E-4・5グリッドの区间からは長さ約3m、幅1.5mの規模の方形の石組み遺構が検出されている。石の積み方は不規則で、一部で2段に積まれた部分もあるが大部分は内側が直線的になるように面を揃えた石が1段積かれているだけである。

出土遺物 (第86~90図)

197は肥前系の染付磁器皿である。体部内面には梅が描かれ、見込部には団線が引かれている。全体が鼓のデザインになっている。初期伊万里で1630年から40年のものである。198は肥前系の磁器製紅皿である。壓押しで製作され白磁の釉がかけられている。外面は菊花文様がかたどられている。199は肥前系の磁器製染付大皿である。内面には遠景が描かれ、高台疊付部分には砂が付着している。200は肥前系の陶器碗である。内面は全面に鉄釉がかけられているが、外面は薺灰釉が下半近くまでかけられている。201は肥前系の陶胎染付の碗である。外面は植物文が描かれ、内面には白釉の流しがけが施されている。202は体部外面に唐草文が描かれた肥前系の陶胎染付の碗である。内面は無釉である。203は内外面ともに白泥と鉄釉による刷毛口装飾が施された肥前系の陶器碗である。204は京信楽系の陶器碗である。外面には菊花が色絵で描かれているが色は剥離している。205は内外面に刷毛目文様が施された肥前系の陶器碗である。17C末から18C前葉のものである。206は肥前系の陶器皿である。高台部分を除き内外面全体に灰釉がかけられ、見込部には重ね焼きの目痕が4カ所認められる。207は肥前系の陶器皿である。胴部が扁曲し口縁部に至るもので、口縁部が内抱え状になっている。外面は高台部分以外透明釉がかけられている。内面は見込部に蛇ノ目釉剥ぎが施され鉄釉と銅綠釉がかけ分けられている。208は肥前系の陶器皿である。体部外面には透明釉、内面に灰釉がそれぞれかけられ、内面見込部には蛇ノ目釉剥ぎが施されている。209は肥前系の陶器皿である。体部外面には灰釉、内面には綠釉がそれぞれかけられ、内面見込部には蛇ノ目釉剥ぎが施されている。高台疊付部分は露胎のまま残されている。210は口径416mmを測る肥前系の陶器鉢である。内面には白泥と鉄釉で刷毛目文様が描かれている。211

は肥前三島の象嵌唐津の大鉢である。口径460mmを測り、内面見込部には砂・胎土目痕が8カ所残されている。212は肥前唐津の陶器鉢である。外側は露胎のまま残されているが、内側には鉄釉、緑釉、白泥による二彩手の刷毛目装飾が施されている。17C後半から18C前半のものである。213は肥前唐津の陶器鉢である。内外面ともに鉄釉と白泥による刷毛目装飾が施されている。214は京信楽系の陶器鉢である。全体に灰釉がかけられるが、クリ底の底部のみは露胎のまま残されている。体部外面は樹木が鉄絵で描かれている。215は上方に聞く体部と、直立する口縁部を持つ肥前系の陶器碗である。体部外面は下半部を除き、全体に鉛色の鉄釉がかけられているが、さらに口縁周辺を除き黒い鉄釉が内外面に上かけされている。216は備前の陶器製擂鉢である。堅く焼き締められており、内面に10条1単位の擂目がつけられている。217は備前系の陶器製擂鉢である。内面には11条1単位の擂目がつけられている。218は堅く焼き締められた備前の陶器壺である。219は京信楽系の陶器製四耳壺である。外面全体に鉄釉がかけられた茶壺で、17C中葉のものである。220は口径431mmを測る肥前唐津の陶器壺である。体部外面には獅子頭の把手が2カ所貼り付けられ、白泥による刷毛目装飾を施し銅緑釉が流し掛けられている。見込部には砂・胎土目痕がみられる。17Cから18C初頭のものである。221は外面に鉄釉がかけられた口径424mmを測る陶器壺である。222は口径205mmを測る信楽系の陶器壺である。223は口径570mmを測る丹波系と思われる陶器壺である。外面には鉄釉がかけられている。224は備前座の陶器壺である。225は体部外面に唐草文が描かれた肥前系の陶胎染付の線香立である。226は京信楽系の陶器製香炉(?)である。内外面とも灰釉がかけられ、外側には鉄絵により留文が描かれている。227は口径192mmを測る陶器の壺である。高台墨付部分を除き全面に釉がかけられているが、内面見込部には6カ所に目痕が残されている。228は土師質の灯明皿である。全面に塗土の痕跡があり、灯心油痕が口縁全体に残されている。229は土師質の皿である。230は口径86mmを測る土師質の皿である。底部の切り離しには回転糸切り技法が使用され、板目痕が残されている。231は土師質の皿である。232・233は土師質焰燈である。234は土師質の焼き塙壺の蓋である。直径84mmを測る皿形で、17C中葉のものである。235は16C中葉からの泉州産の土師質の焼塙壺の蓋である。236は四型をした16C中葉からの泉州産の土師質の焼塙壺の蓋である。237は口径270mmを測る瓦質の鉢である。238は瓦当部に丸ノ中橋の紋が配された軒丸瓦である。239は銅製の小刀の鞘であると思われる。X線では表面に菱形模様が見られ、鞘の内部と思われるラインも見える。240は銅製の鍵である。断面形状は円形をしている。241は銅製の杓子である。242は銅錢の平道元宝である。243は銅錢の寛永通宝(新)である。244・245は粘板岩製の硯である。246は粘板岩製の砥石である。

溝 6 (SD3006) (第82図)

調査区の北西側で検出された南北方向の溝である。両端が他の遺構に切られているため正確な大きさは不明だが、残された部分は長さ約5m、最大幅約1.2mを測る。断面が皿状に掘り込まれた遺構は、わずか0.2m前後の深さしかない。

出土遺物 (第91図)

247は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。248は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。口縁部には煤が付着している。

溝 8 (SD3008) (第82図)

遺跡中央の未調査区域を挟んで2区から3区にまたがって検出された、石積の側壁を持つ南北方向の溝である。幅約0.3~0.5mの溝の側壁に使用された石材は長さ約30cmから80cm前後までと不揃いだが、

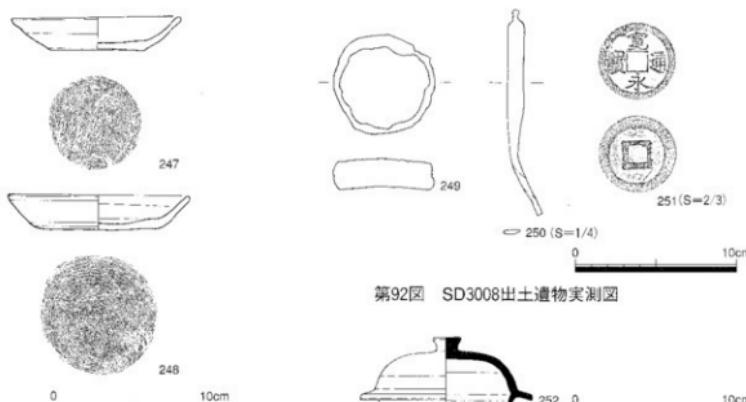
溝の内面が直線になるように積まれている。未調査区の南の2区ではところどころで石が途切れているものの調査区内を横断するように約13mにわたって石積が確認され、最終的には調査区外にのびている可能性がある。この2区の3008の東側には溝と接するようにしてSD3009・3010の東西方向の2本の溝が検出されている。3008との交点付近の石が残されていないため確実ではないが、3008から分岐した可能性がある。一方、未調査区の北の3区では石積みが比較的よく残されているが、未調査区との境から北に約8mの地点で不自然な形で終わっている。SD3008の周辺でこの溝に関係するような遺構は見あたらないが、第2遺構面からは、3008の北端付近で不自然に途切れる東西方向の溝SD2019が検出されている。この2019は、別の東西方向の溝SD2016によって区画された屋敷地内から検出され、2つの溝の距離は最も広いところでも6mほどしか離れていないことから、SD2016によって区画される屋敷地が出現する以前の1段階古い時期に築かれた溝と考えられるが、検出された位置からSD3008とつながっていた可能性が高い。第3遺構面ではSD3008のような石積みを作り遺構は少数で、3008以外では先述したSD3009・3010の2つの溝と、不明遺構SX3015、それにSD3005しか見あたらず、石積が遺構に多用されるのは基本的には第2遺構面の時期にはいってからである。SD3008と2019の関係から考えると、第3遺構面で検出されたこれらの石積みを作り遺構は、第3遺構面でも新しい時期か第2遺構面まで下る可能性がある。

出土遺物（第92図）

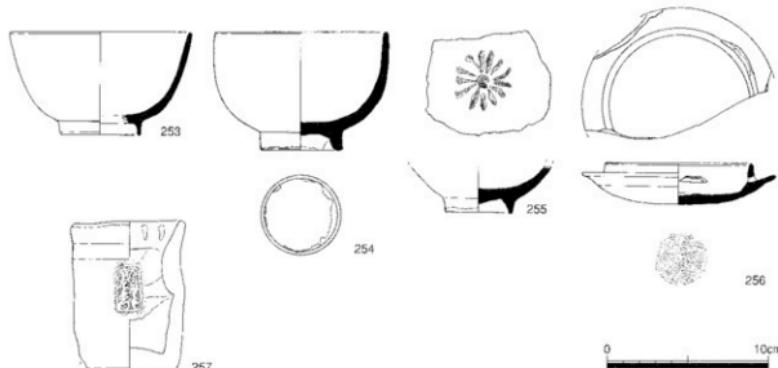
249は瓦質の加工円盤である。250は銅製の笄である。251は寛永通宝（古）である。

溝 9（SD3009）（第82図）

2区のSD3008の東側で、3008に直交するように検出された石積みの側壁を持つ幅約0.4~0.5mの東西方向の溝である。2面に築かれた石垣との境から東に向かって約8.5m直進した後、方向を90°南に転じ最後は調査区外に延びている。遺構に使用された石材はSD3008同様、大きさが不揃いな角礫を使用し、内壁が直線を描くように積み上げられている。SD3008との交点付近が上面に築かれた石垣を作る際に攪乱を受けているため、SD3008から分岐した溝かどうかは不明だが、側壁が石積によって築かれた溝は3面ではこのSD3009と3008・3010に限定されることから同じ遺構である可能性が高い。



第91図 SD3006出土遺物実測図



第94図 SD3010出土遺物実測図

出土遺物（第93図）

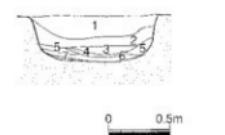
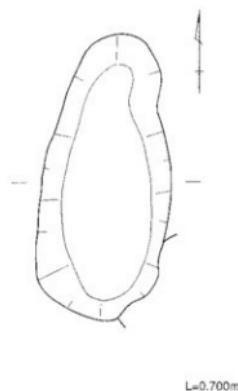
252は肥前系の白磁蓋の蓋である。頂部に丸半摘みが貼付けられ、全面施釉されているが口受付と口受部は露胎のまま残されている。

溝10（SD3010）（第82図）

SD3009同様、2区でSD3008に直交するように検出された石積みの側壁を持つ幅約0.4~0.5mの東西方向の溝である。現存する溝は両端が他の造構に切られ約4mほどが残されているにすぎない。ただ、擾乱を逃れた北壁の東端部分には溝と直交するように置かれた大形の石が検出されていることから、SD3009と同じように、90°方向を南に転じていた可能性がある。造構に使用された石材はSD3008同様、大きさが不揃いな角礫を使用して内壁が直線を描くように積み上げられている。

出土遺物（第94図）

253は肥前系の丸形の白磁碗である。高台脛付部分は釉が剥ぎ取られ砂が若干付着している。254は肥前系の陶器碗である。異器形の京焼風をしており、底部を除き全体に透明釉がかけられている。高台脣付部分の釉は剥きとられ、高台内面は砂が多量に付着している。255は陶器碗である。内面見込部には緑釉で菊花が描かれている。高台外底面は無釉である。256は備前系の陶器製灯明皿である。底部は回転糸切り後ヘラナデされ、内面には塗土が施されている。257は土師質の焼塙壺である。輪積み成形で製作された体部には「天下一堺みなと藤左衛門」の刻印がある。



1	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/2
2	灰色	砂質土	10Y4/1
3	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/2
4	暗オリーブ灰色	砂質土	2.5GY4/1
5	オリーブ黒色	砂質土	7.5Y3/1
6	灰色	砂質土	7.5Y4/1
7	灰色	砂質土	10Y4/1

第95図 SK3001実測図

土坑

土坑 1 (SK3001) (第95図)

1区のB・C-2・3グリッドにまたがって検出された、長軸を南北方向にとる長さ約2.4m、幅1.1mの大きさの不整楕円形の土坑である。断面がU字状に掘り込まれた深さ約0.4mの遺構の埋土中には少量の炭化物や焼土粒とともに土器や瓦片が含まれている。

出土遺物 (第96図)

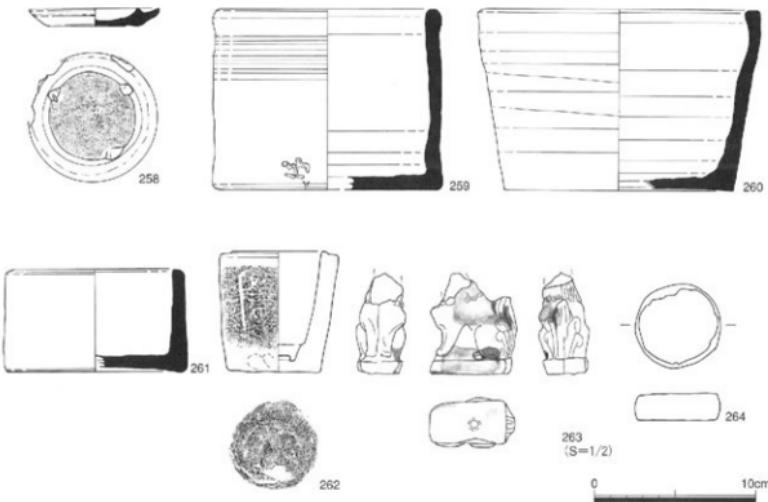
258は全面に朱泥が施され堅く焼き締められた備前の陶器製灯明受皿である。259は備前の陶器製匣鉢である。底部外側に刻印がある。260は口径166mmを測る陶器の匣鉢である。底部はヘラ切りされている。261は備前の陶器製匣鉢である。262は土師質の焼塙壺である。板造り成形で製作され、体部には刻印が認められるが、詳細は不明である。263は型作り貼合せ成形で製作された陶器製の人形(狛犬)である。縁釉と灰釉がかけられ底部は穿孔されている。264は瓦質の加工円盤である。長径は52mmを測る。

土坑 3 (SK3003) (第97図)

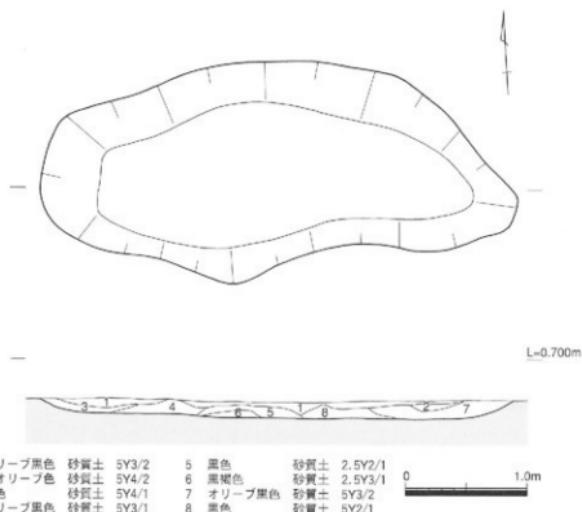
1区のB-3・4グリッドから検出された、長軸を東西方向に持つ長さ約3.9m、幅1.8mの大きさの不整楕円形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構の埋土中からは炭化物や焼土粒に混じって、多量の灰が検出されている。

出土遺物 (第98図)

265は肥前系の磁器盃である。内面には染付により東屋が描かれ 高台外底面には「太明年製」の銘が書き込まれている。266は瀬戸美濃系の陶器壺である。267は肥前系の陶器瓶である。鉄釉がかけられ



第96図 SK3001出土遺物実測図



第97図 SK3003実測図

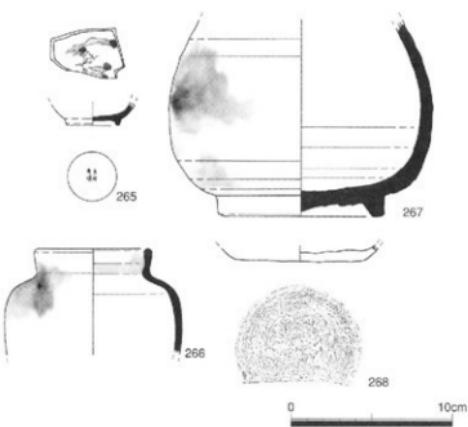
ているが、高台部分は露胎のままである。268は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。外面には煤が付着している。

土坑 6 (SK3006) (第99図)

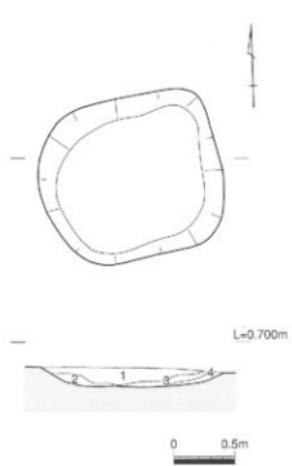
1区のC-6グリッドから検出された直径約1.5m前後の大きさの不整円形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構の埋土中には炭化物と焼土粒、陶磁器片とともに瓦片が多く含まれている。

出土遺物 (第102図)

269は伊万里の染付磁器碗である。体部外面には竜と蝶が描かれ、高台には帯線が引かれている。高台外底面には「□貴□春」の書き込みがある。270は直径48mmを測る瓦質の加工円盤である。

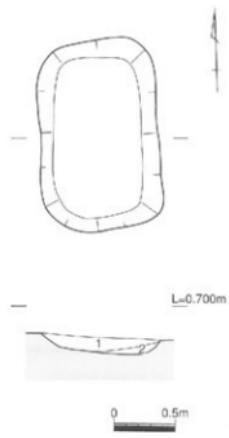
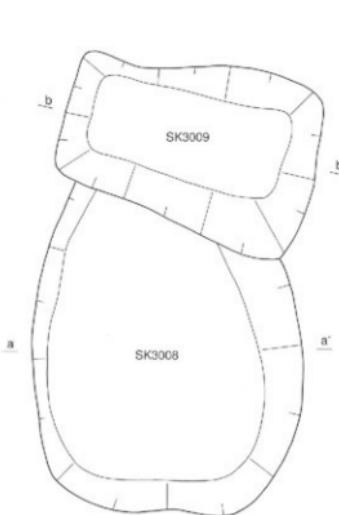


第98図 SK3003出土遺物実測図



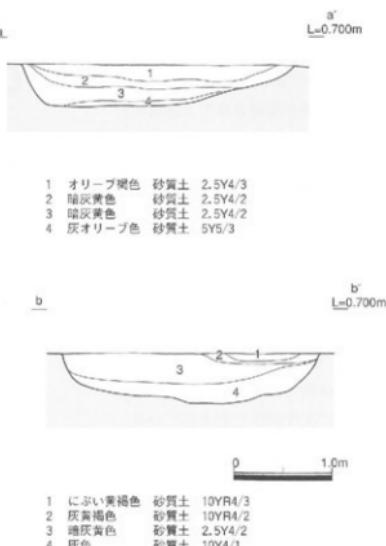
- | | | | |
|---|--------|-----|---------|
| 1 | 灰黄褐色 | 砂質土 | 10YR4/2 |
| 2 | オリーブ褐色 | 砂質土 | 2.5Y4/3 |
| 3 | 暗灰黄色 | 砂質土 | 2.5Y4/2 |
| 4 | オリーブ褐色 | 砂質土 | 2.5Y4/3 |

第99図 SK3006実測図

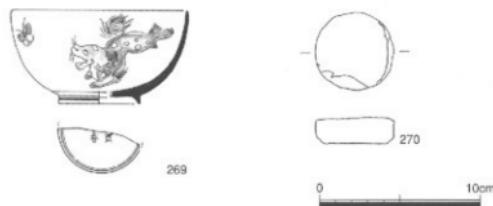


- | | | | |
|---|--------|-----|---------|
| 1 | 暗灰黄色 | 砂質土 | 2.5Y4/2 |
| 2 | 暗オリーブ色 | 砂質土 | 5Y4/3 |

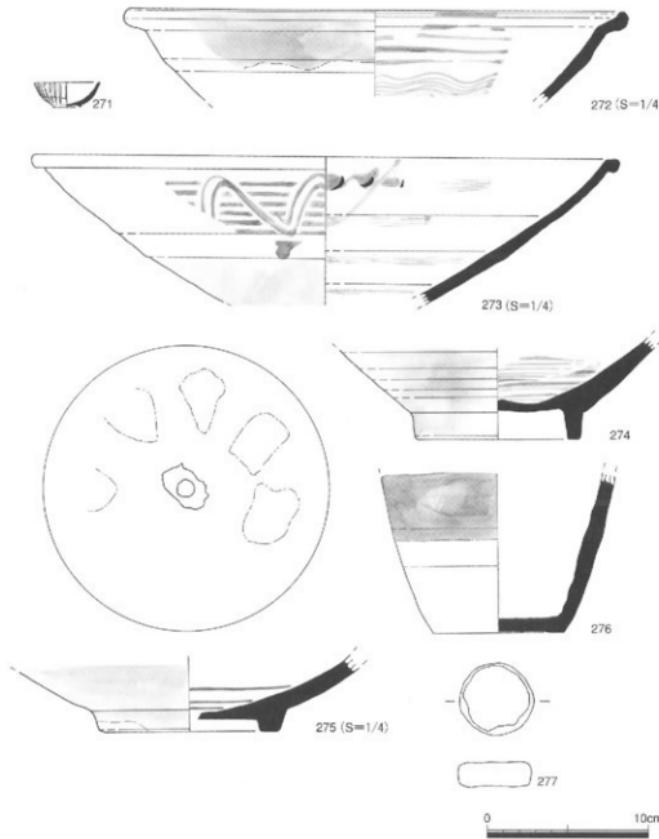
第100図 SK3007実測図



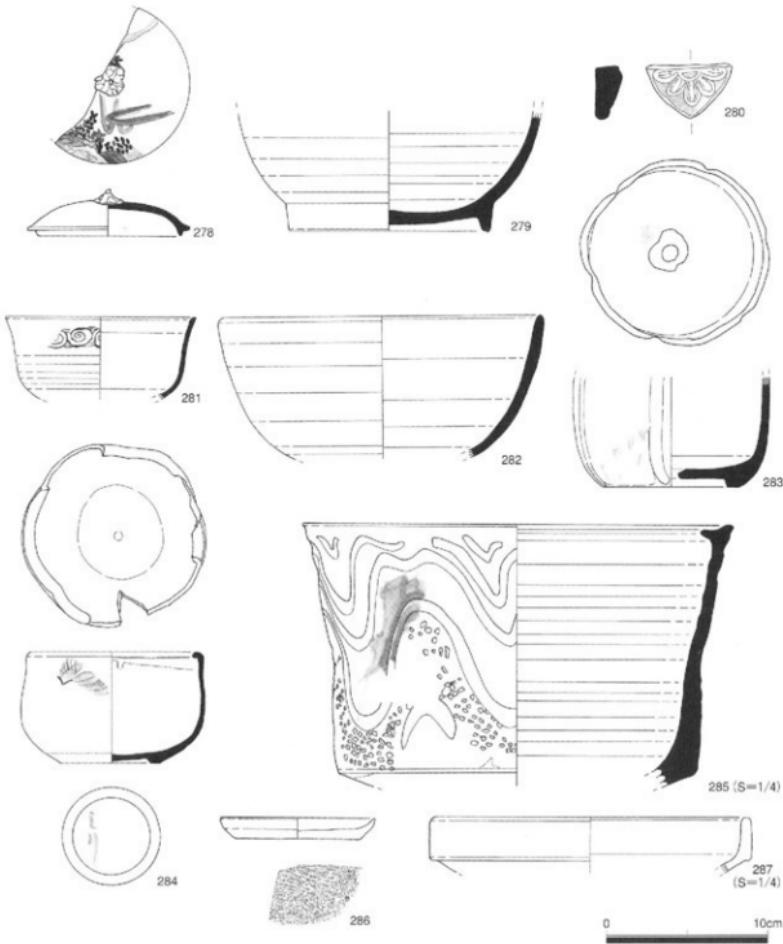
第101図 SK3008・SK3009実測図



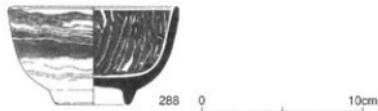
第102図 SK3006出土遺物実測図



第103図 SK3007出土遺物実測図



第104図 SK3008出土遺物実測図



第105図 SK3009出土遺物実測図

土坑 7 (SK3007) (第100図)

1区のC-6グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.6m、幅1mの大きさの長楕円形の土坑である。深さ約0.2mの遺構は浅い皿状に掘り込まれている。

出土遺物 (第103図)

271は貝目の型押成形によって製作された肥前系の白磁の紅皿である。272は肥前唐津の鉢である。体部内面には白泥により刷毛目文様が描かれている。外面は上半部に鉄釉がかけられているが下半部は露胎のまま残されている。273は肥前唐津の陶器鉢である。体部内面は全面に刷毛目文様が描かれているが、外面は上半部が白泥による刷毛目文様、下半部が鉄釉というようにかけ分けされている。274は肥前唐津の陶器鉢である。体部内面には白泥により刷毛目文様が描かれている。外面は高台付近まで鉄釉がかけられているが下半部は露胎のまま残されている。275は肥前唐津の陶器鉢である。体部外面には鉄釉がかけられ、内面には白泥により刷毛目文様が描かれている。内面見込み部が穿孔されていること

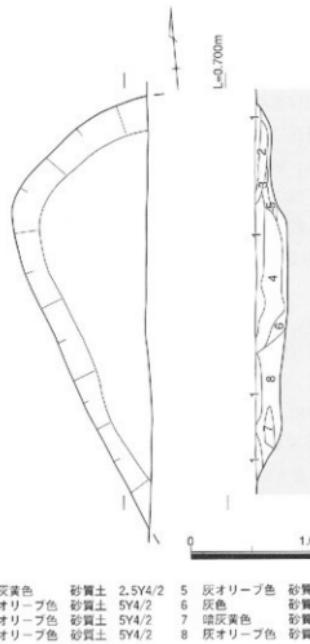
から植木鉢に転用されたものと思われる。276は瀬戸美濃系の陶器壺である。体部外面の上半部には鉄釉、下半部には長石釉がかけ分けられているが、内面は露胎のまま残されている。277は直径45.5mmを測る瓦質の加工円盤である。

土坑 8 (SK3008) (第101図)

1区のC-D-8グリッドにまたがって検出された土坑である。遺構の北側の一部を削平されているため正確な大きさや形を明らかにできないが、残された部分から南北約2.5m、東西2.2mの大きさの不整楕円形の土坑と考えられる。深さ約0.4mの遺構の掘り込みはなだらかで緩やかに底面に移行している。遺構内の埋土中には炭化物や焼土をブロック状に含むほか、上部からは陶磁器片や瓦片が多く出土している。

出土遺物 (第104図)

278は肥前系の磁器蓋である。外面には染付により山水文と雲が描かれ、頂部には摘みが貼付けられている。279は肥前系の白磁の瓶類である。高台内にはハリ痕が1カ所見える。280は肥前系の磁器製香炉の足である。上絵付けされ菊花が描かれている。281は京信楽系の陶器製端反碗である。外面には染付により渦が描かれている。282は備前の陶器鉢である。内外面は共に塗土され堅く焼き締められている。



第106図 SK3011実測図

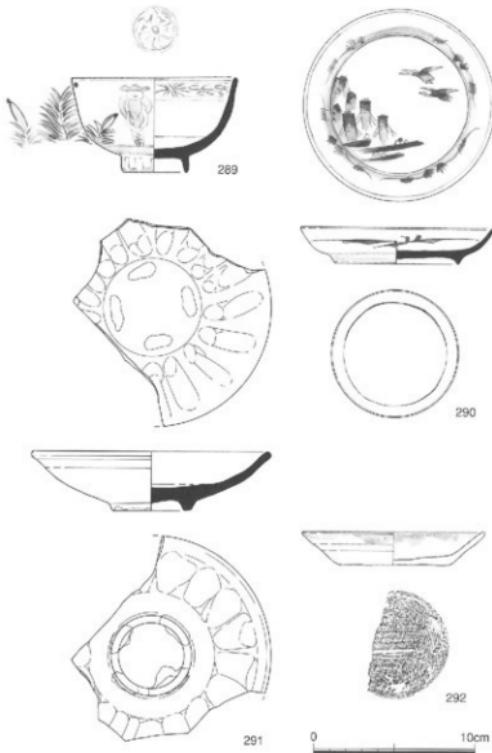
る。283は瀬戸美濃系の陶器鉢である。284は高台内に墨書きがある陶器製香炉である。285は口径348mmを測る瀬戸美濃系の流水文水鉢である。外面には陰刻により流水文が描かれ、灰釉と錆釉がかけられている。286は底部の切り離しにヘラ切り技法が使用された土師質の皿である。287は土師質の焙烙である。

土坑 9 (SK3009) (第101図)

1区のC・D-8グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約2.0m、幅1.0mの大きさの不整形の土坑である。深さ0.3mの遺構の埋土中には多量の炭化物や焼土粒に混じって瓦片が多く含まれていることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第105図)

288は肥前唐津の丸碗である。全面に釉がかけられ、内外面には白化粧土で刷毛目文様が描かれている。



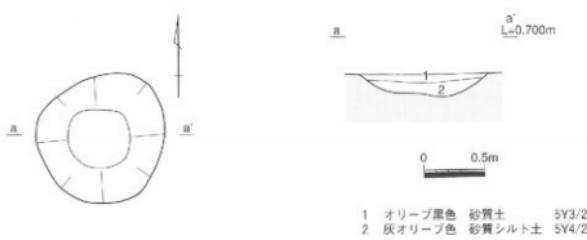
第107図 SK3011出土遺物実測図

土坑 11 (SK3011) (第106図)

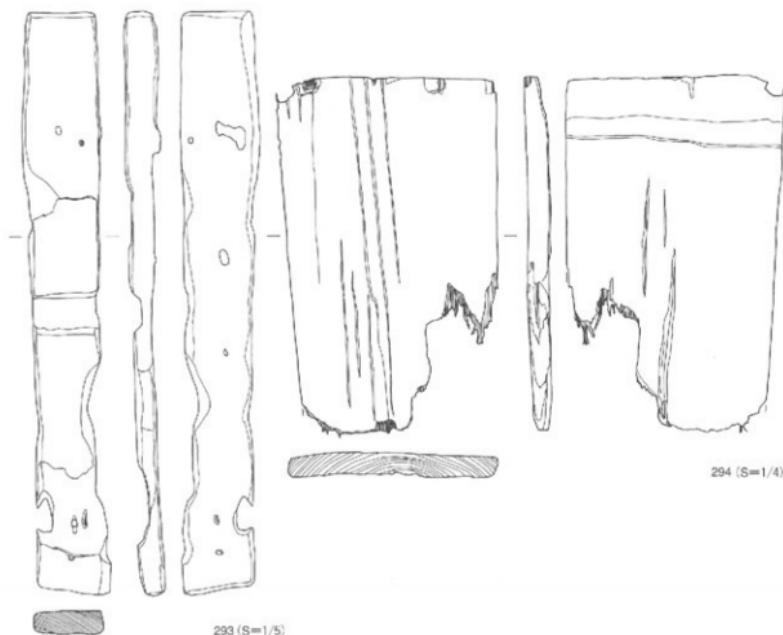
1区のE-4グリッドから検出された土坑である。遺構の東側を大きく削平されているために正確な形や大きさは不明だが、残存する部分だけでも東西約1.1m、南北3.6mを測ることから、本来はかなり規模の大きい遺構であったと考えられる。深さ約0.3mの遺構の埋土中からは少量の炭化物や焼土粒に混じって比較的大型の礫が検出されている。

出土遺物 (第107図)

289は肥前系の磁器碗である。体部外面は人物と植物、内面は二重圓線内に丸と花が染付で描かれ、高台と内面見込部にもそれぞれ歯文様と丸の中に花が描き込まれている。290は肥前系の磁器皿である。外面に草、内面に風景がそれぞれ染付で描かれ、高台部分には圓線が引かれている。291は肥前系の陶器皿である。輪轂成形後、内外面にヘラ彫り装飾により鍋が施されている。また、内面見込部と高台には砂目痕が4カ所ずつ見える。292は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が残され、口縁部内外面には煤が付着している。



第108図 SK3012実測図



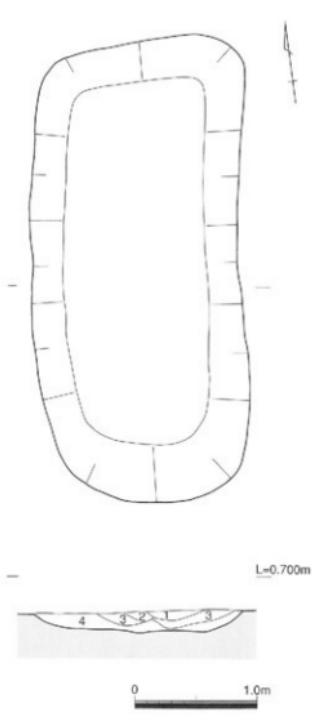
第109図 SK3012出土遺物実測図

土坑 12 (SK3012) (第108図)

1区のE-2グリッドから検出された直径約1.1mの大きさの円形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内には、焼土粒と炭化物を含む縮まりの強いシルト質が堆積している。

出土遺物 (第109図)

293は木製品の井戸枠である。金属が付着している。294は木製品の井戸枠の上段である。



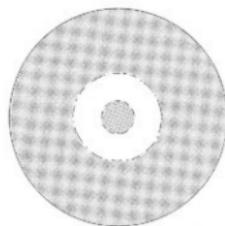
第110図 SK3014実測図

土坑 14 (SK3014) (第110図)

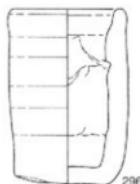
1区のE・F-2, F-3グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約3.9m、幅1.7mの大きさの楕円形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.3m足らずの遺構内には少量の炭化物と焼土粒を含んだオリーブ色を基調とする砂質土が堆積している。

出土遺物 (第111図)

295は口径134mmを測る肥前系の磁器皿である。高台内面を除き全面に青磁釉が施されているが、内面見込部は蛇ノ目釉剥ぎが施されている。296は泉州系の土師質の焼塩壺である。輪積成形で製作され内面には布目痕が見られる。297は口径102mmを測る土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が残され、外面には煤が付着している。



295



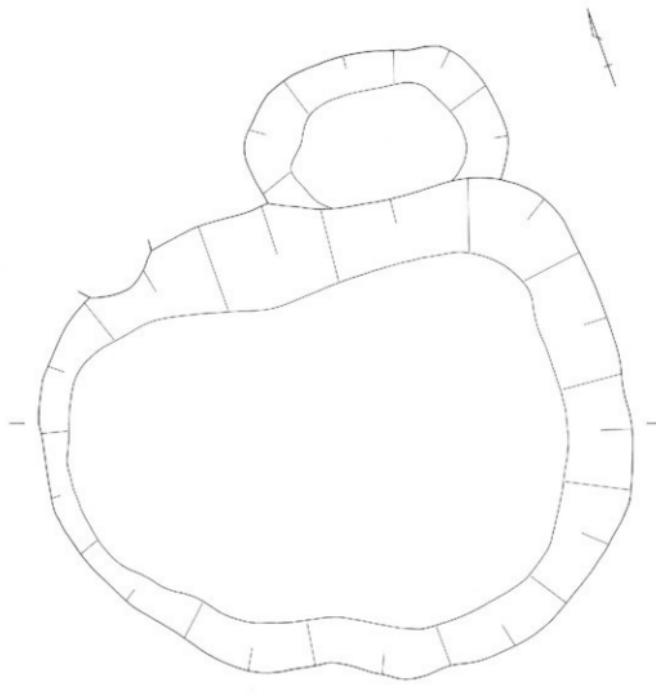
296



297

0 10cm

第111図 SK3014出土遺物実測図



L=0.700m



0 1.0m

1 オリーブ褐色	砂質土	2.5Y4/3	9 灰オリーブ色	砂質土	SY4/2	17 黄褐色	砂質土	2.5Y5/3
2 オリーブ褐色	砂質土	2.5Y4/3	10 砂灰青色	砂質土	2.5Y4/2	18 反オリーブ色	砂質土	5Y4/2
3 オリーブ褐色	砂質土	2.5Y4/3	11 反オリーブ色	砂質土	SY4/2	19 灰色	砂質土	5Y4/1
4 砂灰黄色	砂質土	2.5Y4/2	12 黄褐色	砂質土	2.5Y5/3	20 反オリーブ色	砂質土	7.5Y4/2
5 オリーブ褐色	砂質土	2.5Y4/3	13 反オリーブ色	砂質土	SY4/2	21 砂灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
6 硫オリーブ褐色	砂質土	2.5Y3/3	14 反オリーブ色	砂質土	SY4/2	22 灰色	砂質土	5Y4/1
7 反オリーブ色	砂質土	5Y4/2	15 砂灰青色	砂質土	2.5Y4/2	23 反オリーブ色	砂質土	7.5Y4/2
8 硫灰黄色	砂質土	2.5Y4/2	16 砂灰青色	砂質土	2.5Y4/2	24 反オリーブ色	砂質土	5Y5/2
						25 オリーブ灰色	砂質土	10Y4/2
						26 反オリーブ色	砂質土	5Y4/2
						27 オリーブ黑色	砂質土	5Y3/2
						28 黑褐色	砂質土	2.5Y3/2

第112図 SK3015実測図

土坑 15 (SK3015) (第112図)

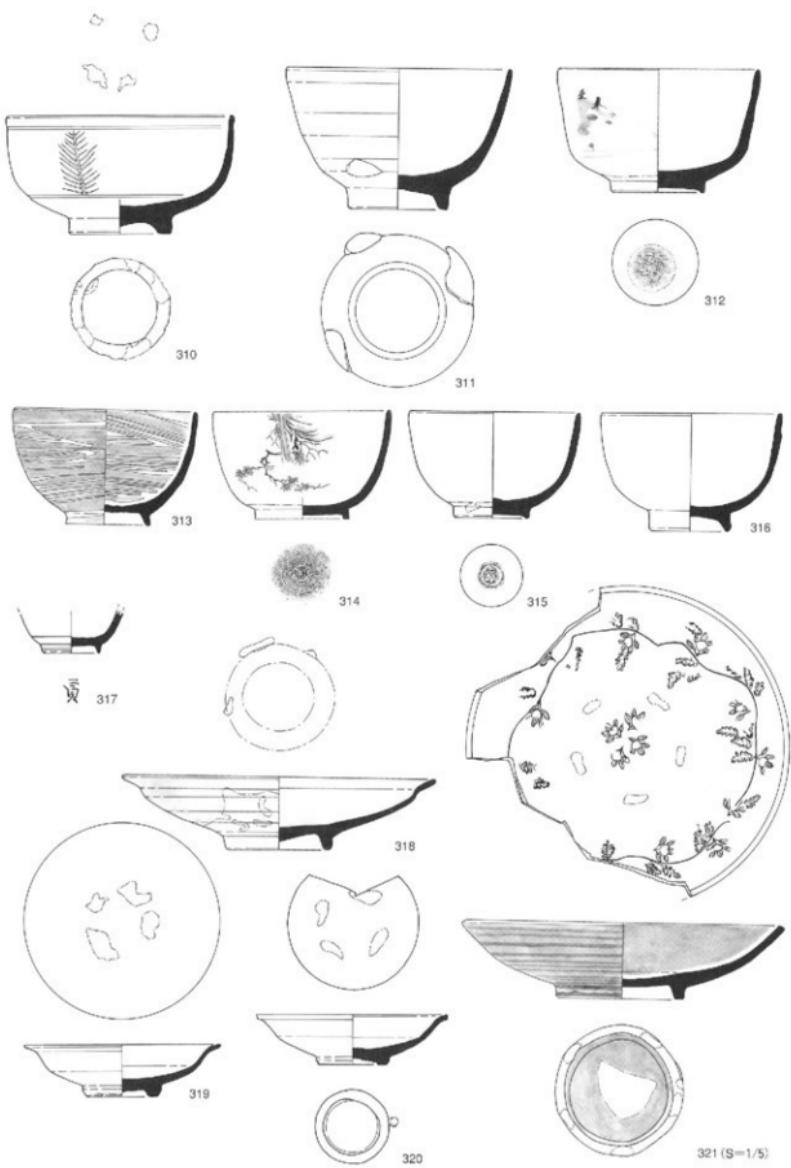
1区のE・F…3・4グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約4.9m、幅3.8mの大きさの不整箱円の大型上坑である。皿状に掘り込まれた約0.6mの深さの遺構の埋土からは、陶磁器片のほか、土師器・木製品が多量に出土していることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第113~118図)

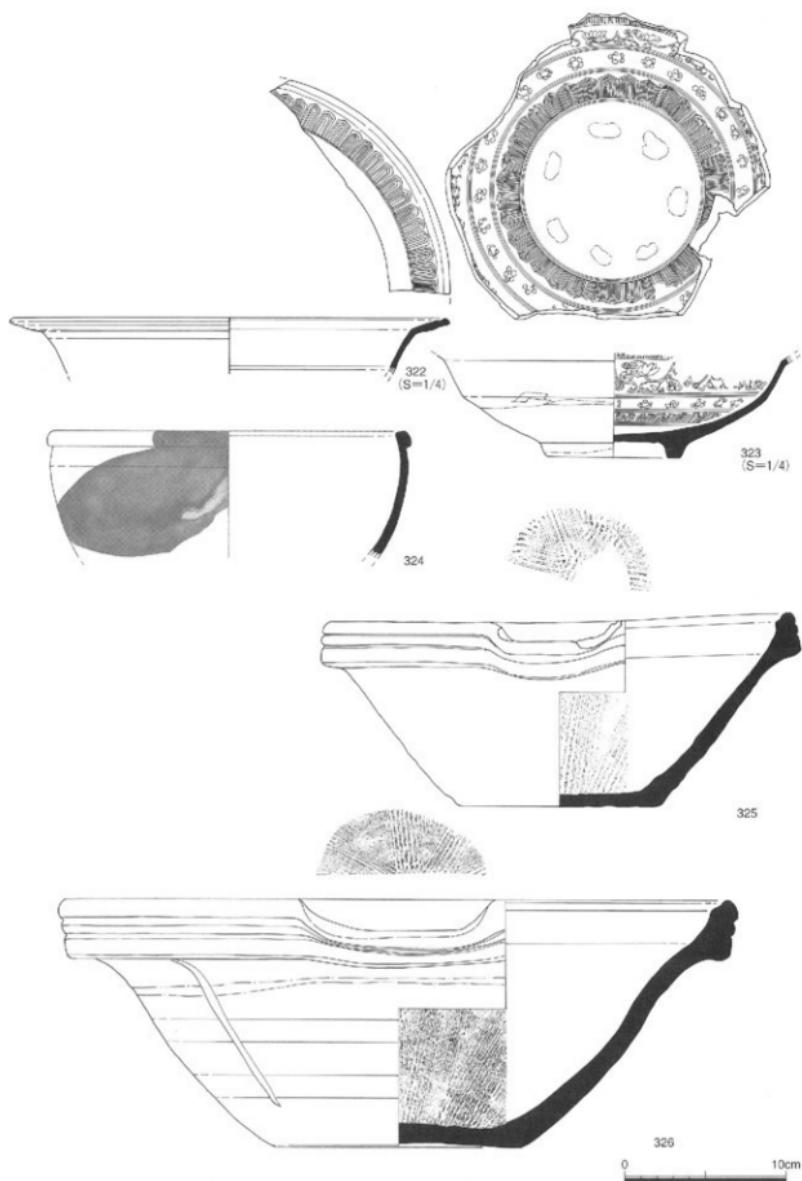
298は肥前系の磁器鉢である。体部外面と内面見込部には染付により草花が描かれ、高台外底面には「宣□年製」の銘が書き込まれている。焼継痕がある。299は肥前系の染付磁器碗である。体部外面には山水に鳥が描かれ、高台外底面には「青徳年製」の銘が書き込まれている。300は肥前系の染付磁器碗である。体部外面には花文が描かれ、高台外底面には「大明成化年製」の銘が書き込まれている。301は肥前系の染付磁器碗である。体部外面は鶴丸文、内面見込部は二重圓線内に花の文様がそれぞれ描かれている。また、高台外底面には「大明」の銘が書き込まれている。302は外面に染付による蝶が描かれた肥前系の磁器碗である。303は肥前系の磁器小杯である。304は内面に草花が描かれた肥前系の染付磁器皿である。305は初期伊万里の染付磁器皿である。体部内面には連續如意頭、内面見込部には鳩一羽がそれぞれ描かれている。306は瀬戸美濃系の磁器皿である。輪轉型打ち併用成形で製作され、内面には染付により花が描かれている。307は肥前系の磁器鉢である。体部内面には草花、外面には蔓草が染付で描かれ、高台の中央にはハリ支えの痕が残されている。308は初期伊万里の磁器皿である。鐘反形で、体部内面には連続の渦文、内面見込部には芥子が染付で描かれている。309は肥前系の磁器製香炉である。外面は高台部を除き青磁釉がかけられている。底部には脚折の痕が2カ所見える。310は肥前系の陶器碗である。体部外面には全面に透明釉がかけられ上下二本の沈線と白泥による植物が描かれている。高台墨付部分には胎上日痕が5カ所残されている。311は肥前系の陶器碗である。内外面とも薺灰釉が全面に施釉されている。外面部には3カ所、重ね焼の痕跡が残されている。312は肥前系の京焼風陶器碗である。体部外面は染付により山水が描かれ、露胎のまま残された高台外底面の円刻内には「清水」の刻印がある。313は内外面に白泥と灰釉による刷毛目装飾が施された肥前系の陶器製刷毛目碗である。314は肥前系の京焼風陶器碗である。体部外面には染付により樹木文様が描かれ、露胎のまま残された高台外底面の円刻内には「小松吉」の刻印が捺されている。315は肥前系の京焼風陶器碗である。高台部分は露胎で、高台外底面には円刻内に「清水」の刻印がある。17C後半から18C前半のものである。316は高台墨付部分を除き全面に灰釉が施された肥前系の京焼風陶器碗である。317は肥前系の陶器製小杯である。陶胎染付で外面には圓線が引かれ、高台外底部内には銘が記入されている。318は肥前系の陶器皿である。内面には銅綠釉と鉄釉がかけ分けられ、見込部は蛇ノ目釉剥ぎが施されている。砂目痕も3カ所に残されている。319は肥前系の陶器皿である。高台部分を除き石灰釉がかけられ、内面見込み部には砂目痕が4カ所見える。320は肥前系の陶器製濃緑皿である。体部外面の下半部を除き、石灰釉が施釉され、内面見込み部に4カ所、外向高台脇に2カ所の砂目痕が残されている。321は口径330mmを測る肥前系の陶器製大皿である。内面には印花により蔓草と橋が陰刻され、全面に鉄釉がかけられている。内面見込部と高台墨付部分には重ね焼の痕がそれぞれ5カ所ずつ残されている。322は口径360mmを測る肥前系の三島唐津の鉢である。323は肥前三島手の唐津鉢である。体部外面は上部に鉄釉、下部に透明釉がかけ分けられ、内面には鉄釉と白泥を使用して文様が描かれている。324は鉄釉が施釉された陶器壺である。325は9条1単位の擂目が残された備前系の擂鉢である。326は備前系の陶器製擂鉢である。内面には12条1単位の擂目が残され、火擣の痕跡も見られる。内面見込部の擂目は



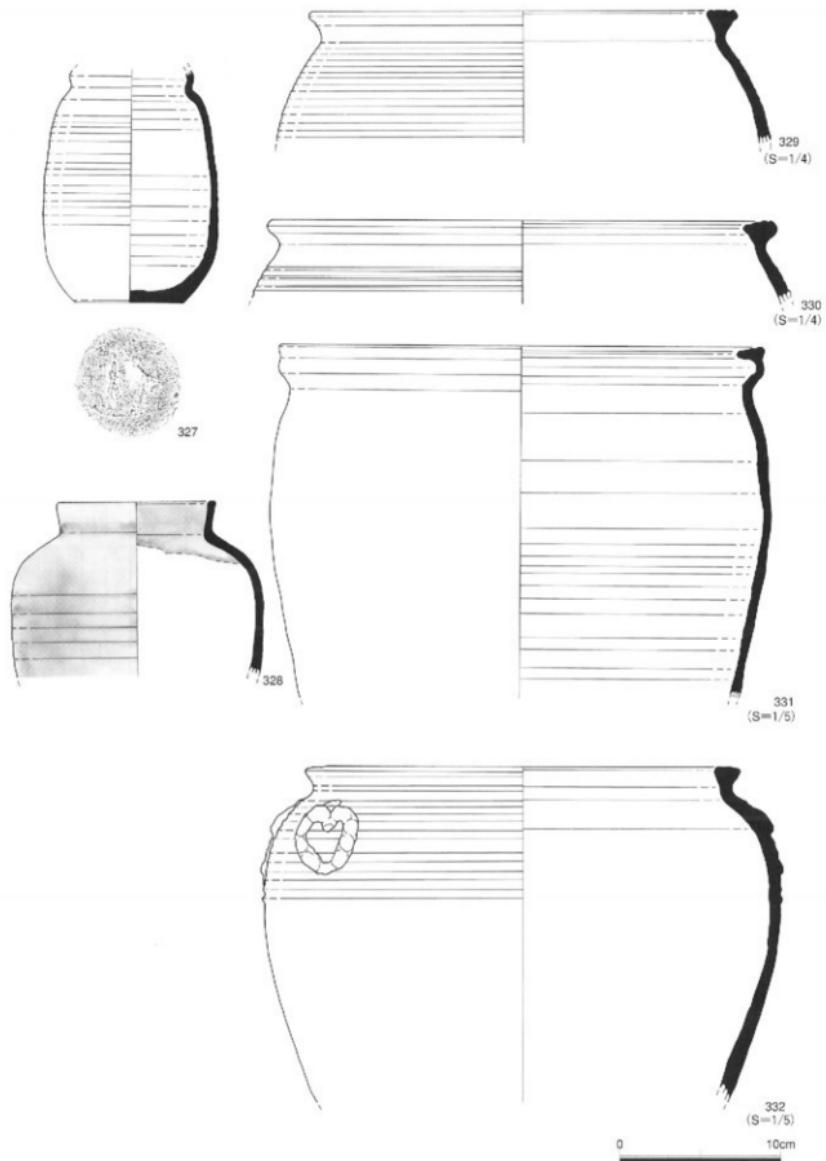
第113図 SK3015出土遺物実測図(1)



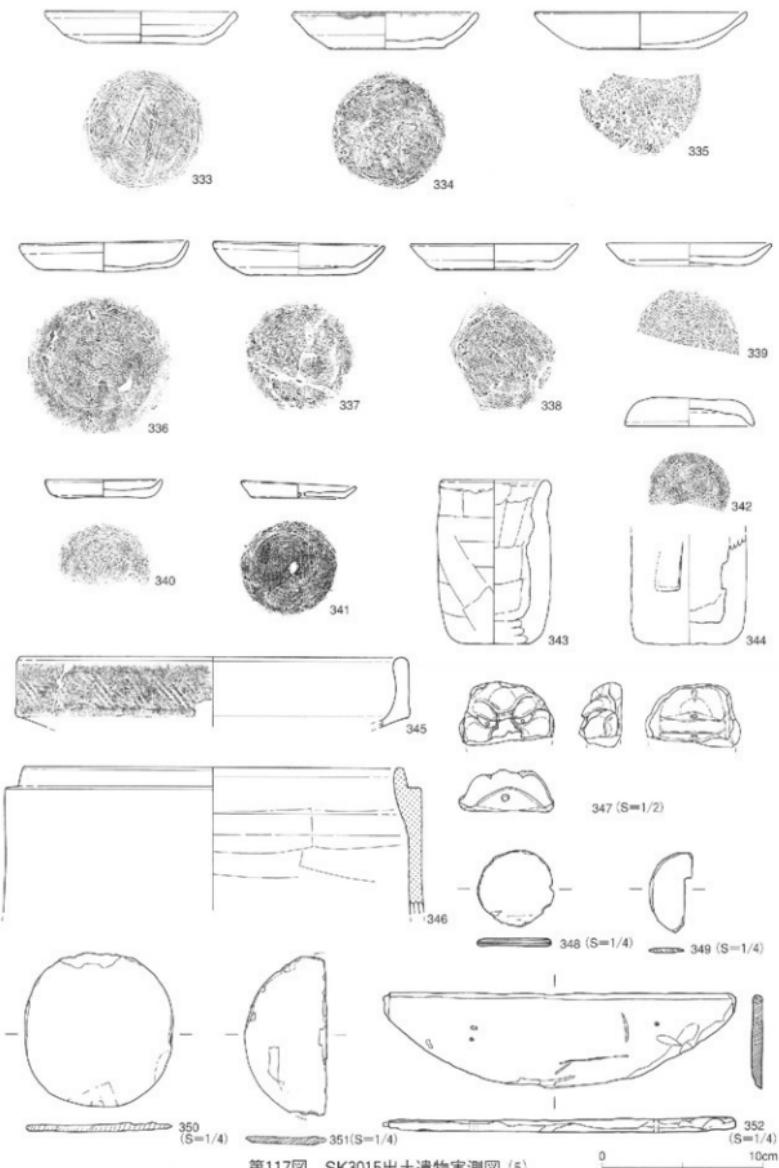
第114図 SK3015出土遺物実測図(2)



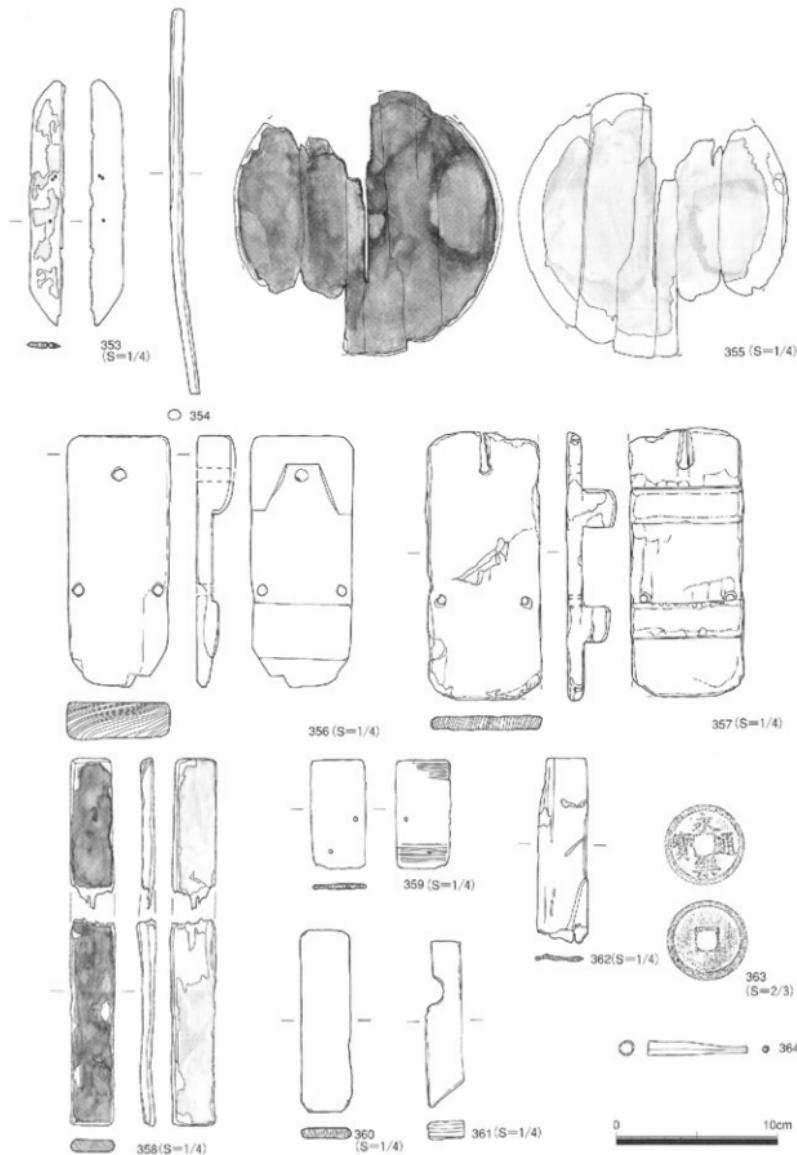
第115図 SK3015出土遺物実測図(3)



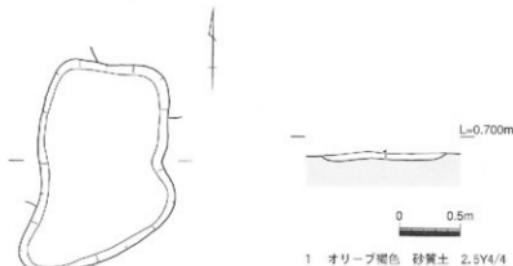
第116図 SK3015出土遺物実測図(4)



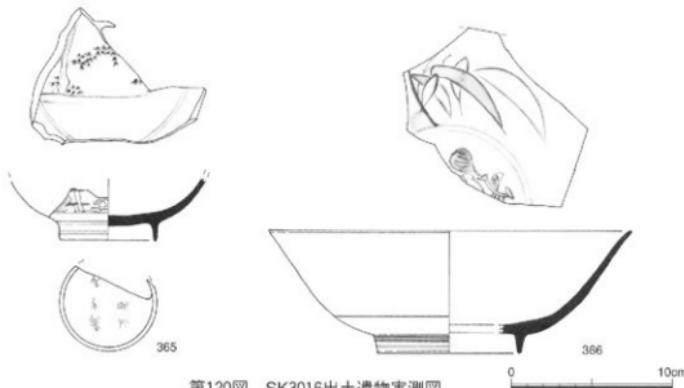
第117図 SK3015出土遺物実測図(5)



第118図 SK3015出土遺物実測図(6)



第119図 SK3016実測図



第120図 SK3016出土遺物実測図

米状に付けられている。口縁部周辺には重ね焼の痕跡が見られる。327は備前の陶器製花生である。外面には塗土が施され、底部には窯印がある。328は外面に鉄袖がかけられた口径97mmを測る京信楽系の腰広茶壺である。329は鉄袖がかけられた口径344mmを測る京信楽系の陶器壺である。330は口径415mmを測る備前の陶器壺である。331は鉄袖がかけられた京信楽系の陶器壺である。332は京信楽系の陶器壺である。体部外面には双耳が貼り付けられ塗土が施されている。333・334は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が残され、口縁部には煤が付着している。335は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。336は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が残され、口縁部には煤が付着している。337～341は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。341は見込部中央が穿孔されている。342は土師質の焼塙壺の蓋である。内面には有目痕が残されている。343は輪積み成形で製作された土師質の焼塙壺である。344は上師質の焼塙壺である。輪積み成形で製作された体部には刻印が見える。345は土師質の焼壺である。外面には叩き目痕が見える。346は瓦質の焜炉である。347は人物の顔をかたどった陶器人形である。348は木製の容器蓋又は底板である。349は木製の容器蓋又は底板である。350・351は木製の容器である。352は木製の蓋である。穿孔が2カ所に見える。353は木製の曲物の蓋である。穿孔が数カ所に見られ、黒漆が塗られている。354は木製の

箸である。355は木製の盆である。表と裏で黒漆と赤漆が塗り分けられている。356は木製の刷り下駄である。357は木製の連歯下駄である。358は木製の箱物である。表と裏は黒漆と赤漆が塗り分けられている。359は木製の箱物である。釘穴が2カ所に見える。360、361は用途不明の板状加工木片である。362は加工木片である。363は銅錢の永樂通宝である。364は銅製の煙管の吸口である。

土坑 16 (SK3016) (第119図)

1区のF-6グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.6m、幅1mの大きさの不整形な形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ0.1m足らずの遺構の埋土には粒子の大きい炭化物と焼土が多く含まれている。

出土遺物 (第120図)

365は肥前系の磁器鉢である。内面見込部には竹が描かれ、高台外底面には「□明成化年製」の銘が書き込まれている。366は肥前系の磁器鉢である。体部外面は圓線、内面は竹が染付によって描かれ、内面見込部にも草が描かれている。

土坑 31 (SK3031) (第121図)

1区のF・G-3・4グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.2m、幅0.8mの大きさの不整楕円形の土坑である。断面がU字形に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構内には、少量の炭化物と焼土粒を含んだ縁まりの強い砂質土が堆積している。

出土遺物 (第122図)

367は京信楽系の陶器皿である。輪轂成形後口縁部外面を數カ所押圧している。内外面ともに灰釉がかけられ、露胎のまま残された高台部分は内面に砂目痕が残されている。368は内外面に灰釉と綠釉がかけられた京信楽系の陶器皿である。高台部分は露胎で内面には砂目痕が見える。369は肥前系の陶器鉢である。二彩唐津で外面は上半部のみに鉄釉がかけられている。内面は綠釉の流しきけと刷毛目文様が描かれ見込部には砂目痕が見える。370は土師質の皿である。底部の切り離しには回転糸切り技法が使用され板目痕も残されている。

土坑 33 (SK3033) (第123図)

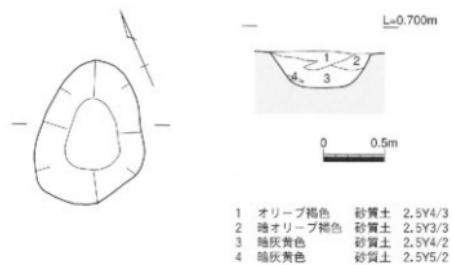
1区のH-2グリッドから検出された土坑である。遺構の西側が削平されているため正確な大きさや形は不明だが、残された部分から直径約2.3m前後の円形に近い形をした遺構と考えられる。深さ約0.8mの遺構内には焼土粒や炭化物の他に製品を含んだ木片が多く出土していることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第124図)

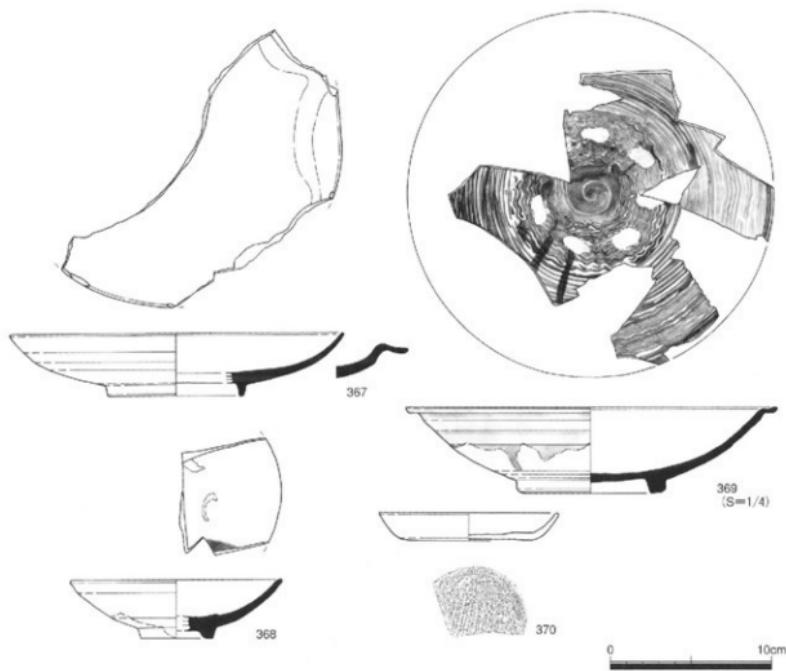
371は瀬戸美濃系の陶器製天日茶碗である。削り出しの高台部分を除き全面に鉄釉がかけられている。372は表面が墨と赤の漆により装飾された木製の曲物である。373は木製の蓋である。側面には縦ぎ合わせの埋釘穴が2カ所に見える。374・375は木製の箸である。376は木製の折敷折れ板である。側面には接ぎ合せの埋め釘穴が2カ所見える。

土坑 40 (SK3040) (第125図)

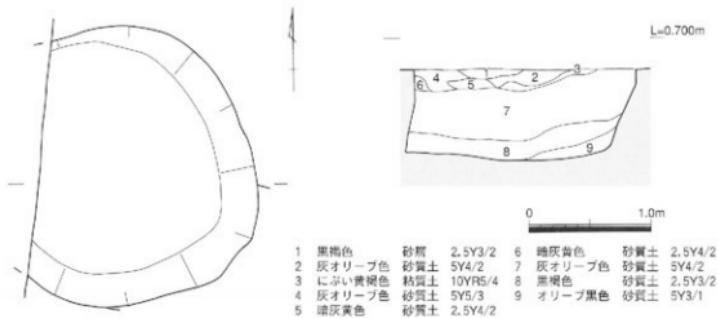
1区のH-3・4グリッドにまたがって検出された直径約1.2m前後の大きさの不整円形の遺構であ



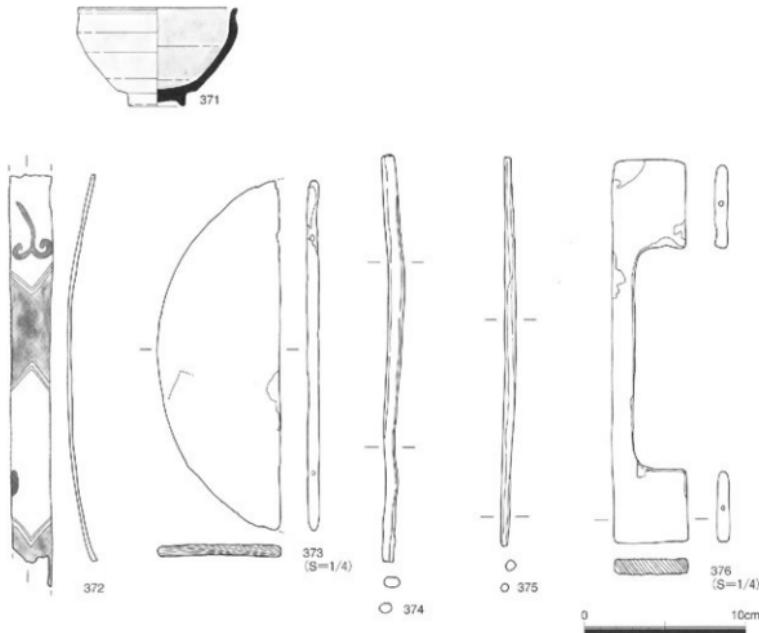
第121図 SK3031実測図



第122図 SK3031出土遺物実測図



第123図 SK3033実測図



第124図 SK3033出土遺物実測図

る。皿状に掘り込まれた深さ約20cmの造構内には少量の炭化物と焼土粒を含んだ締まりの強い砂質土が堆積している。

出土遺物（第126図）

377は初期伊万里の磁器皿である。輪花形の型作併用成形で製作され。内面には染付により鶴が描かれている。朝鮮風の釜ノ辻窯のもので、1630年から40年のものである。378は瀬戸美濃系の陶器製天目茶碗である。内外面には鉄釉がかけられているが、高台脇より下は露胎のままである。

土坑 41 (SK3041) (第127図)

1区のG-3・4グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ2.0m、幅1.2mの大きさの不整円形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.7mの造構の埋土中には、炭化物や焼土粒とともに礫や瓦、木片などが含まれている。

出土遺物（第128図）

379は肥前系の芙蓉手の染付磁器皿である。380は肥前系の磁器皿である。内面には染付による人物が描かれている。381は肥前系の磁器皿である。内面は梅と椿、外面は宝が染付で描かれ、高台外底部に設けられた方形枠内には銘が書き込まれている。382は肥前系の白磁皿である。型打成形で製作され、体部には縱方向の縞がある。高台外底部内に設けられた方形枠内に裏銘がある。383は肥前系の磁器壺である。内面には染付により草文が描かれている。384は灰釉がかけられた肥前系の京焼風陶器碗である。385は内面に11条1単位の横目が付けられた肥前系の陶器製鉢である。386は土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕とともに板口痕が残され、口縁部には煤が付着している。387は土師質の皿である。底部には回転糸切り痕とともに、板口痕が残されている。388は土師質の皿である。底部には回転糸切り痕が残されている。389は元符通宝である。重量は3.43gを測る。390は寛永通宝(新)で背面上部には「文」と描かれている。重量は4.00gを測る。391は寛永通宝(古)である。重量は2.74gを測る。392は寛永通宝(古)である。重量は2.78gを測る。

土坑 42 (SK3042) (第129図)

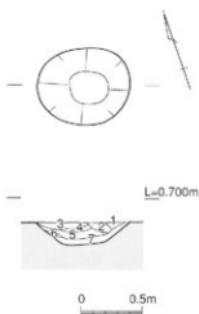
1区のII-4グリッドから検出された土坑である。北西側の一部を他の造構に切られているため正確な大きさは不明だが、残された部分から直径約1.8m 前後の不整円形の形をしていたと考えられる。皿状に掘り込まれた約0.4mの深さの造構内には、少量の炭化物と焼土粒を含んだ締まりの強い砂質土が堆積している。

出土遺物（第130図）

393は肥前系の青磁碗である。高台部分を除きほぼ全面に釉がかけられ、内面見込部は蛇ノ目釉剥ぎが施されている。394は肥前系の陶器皿である。にぶい赤褐色の胎土で、外面下半以外には灰釉がかけられている。内面見込部には胎土目痕が4カ所見える。395は瀬戸美濃系陶器で志野織部の向付である。内面には柘榴が鉄釉で描かれ、底部には半環足が貼付けられている。

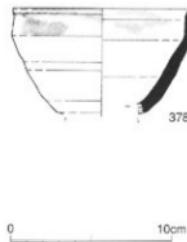
土坑 43 (SK3043) (第131図)

1区のII-3・4グリッドにまたがって検出された直径約1.6mの大きさの円形の土坑である。深さ0.2mの造構は断面が逆台形状に掘り込まれている。

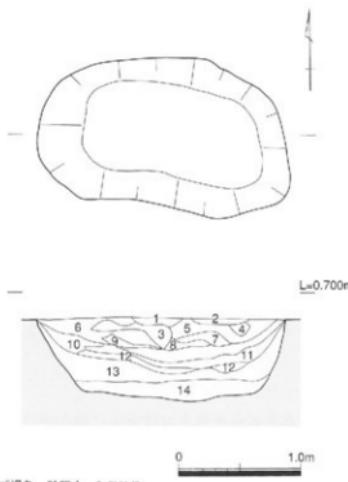


- 1 灰オリーブ色 砂質土 SY4/2
- 2 晴灰黄色 砂質土 2SY4/2
- 3 灰色 砂質土 SY4/1
- 4 灰オリーブ色 砂質土 SY4/2
- 5 黄灰色 砂質土 2SY4/1
- 6 灰オリーブ色 砂質土 SY4/2
- 7 灰オリーブ色 砂質土 SY5/2

第125図 SK3040実測図

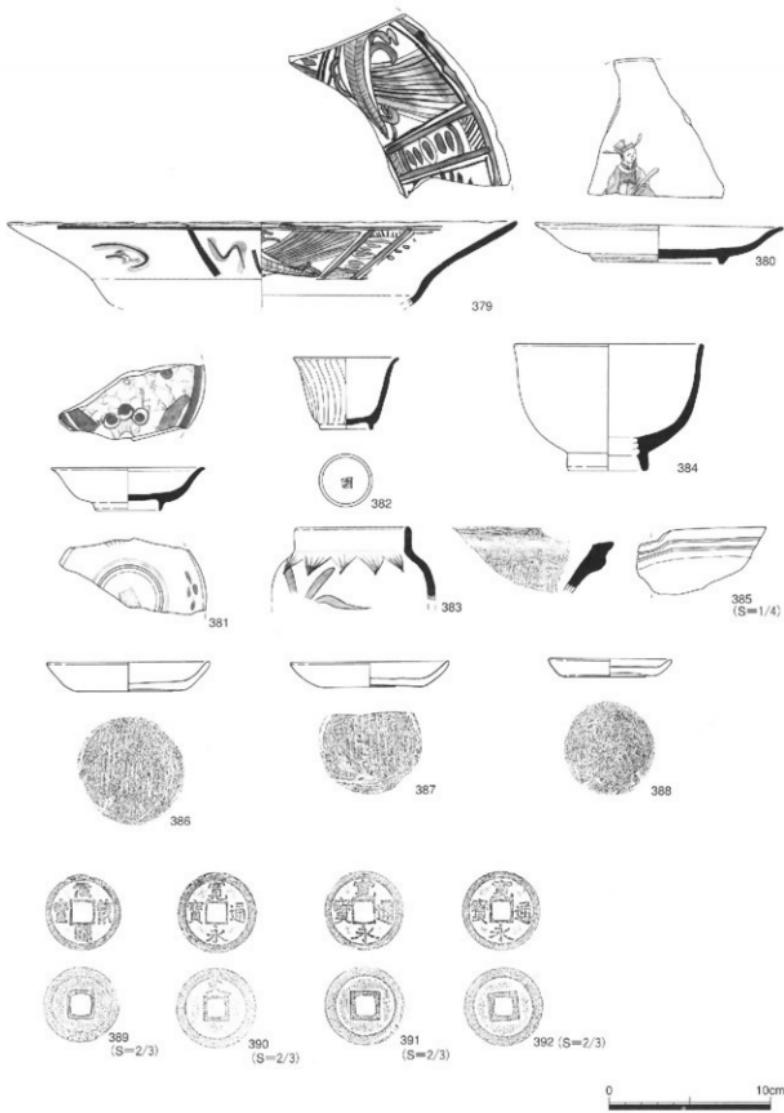


第126図 SK3040出土遺物実測図

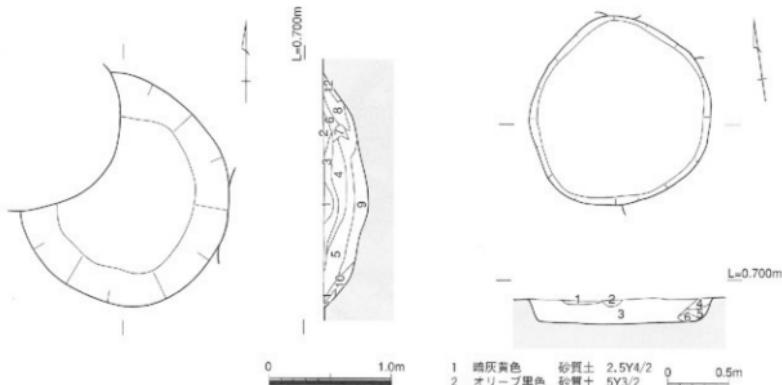


- | | | | | | |
|----------|-----|---------|-----------|-----|---------|
| 1 オリーブ褐色 | 砂質土 | 2,5Y4/3 | 10 灰オリーブ色 | 砂質土 | 5Y4/2 |
| 2 黄褐色 | 砂質土 | 2,5Y5/3 | | | |
| 3 雜灰黄色 | 砂質土 | 2,5Y4/2 | 11 黒褐色 | 砂質土 | 2,5Y3/2 |
| 4 灰オリーブ色 | 砂質土 | SY4/2 | 12 灰色 | 砂質土 | 7,5Y4/1 |
| 5 灰色 | 砂質土 | SY4/1 | 13 黒褐色 | 砂質土 | 2,5Y3/2 |
| 6 雜灰黄色 | 砂質土 | 2,5Y4/2 | 14 オリーブ黒色 | 砂質土 | 7,5Y3/1 |
| 7 灰オリーブ色 | 砂質土 | SY4/2 | | | |
| 8 灰色 | 砂質土 | SY4/1 | | | |
| 9 黑褐色 | 砂質土 | 10YR3/2 | | | |

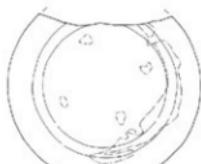
第127図 SK3041実測図



第128図 SK3041出土遺物実測図

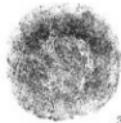
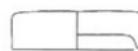
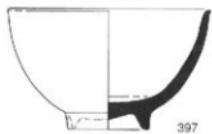


第129図 SK3042実測図



第130図 SK3042出土遺物実測図

第131図 SK3043実測図



第132図 SK3043出土遺物実測図

出土遺物（第132図）

396は内面に染付による草花が描かれた肥前系の磁器皿である。397は肥前系の陶器碗である。外面は高台部分を除き灰釉が施されている。398は土師質の焼塩壺の蓋である。内面には布目痕が残されている。

土坑 46 (SK3046) (第133図)

1区のG-5グリッドから検出された長軸を東西方向にとる梢円形の土坑である。遺構の西側の一部に擾乱を受けているが、現存する遺構は長さ約1m、幅0.6mの大きさを持ち、浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構の埋土中には炭化物と焼土粒を少量含む砂質土が堆積している。

出土遺物（第134図）

399は肥前伊万里の染付磁器碗である。体部外面は矢筈文、内面は四方櫛文がそれぞれ描かれている。400は肥前唐津の陶器製香炉である。体部外面は染付により圓線4条が引かれている。内面は口縁部のみ施釉されている。401は土師質の焰壺である。

土坑 48 (SK3048) (第135図)

1区のF・G-8・9グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約2m、幅0.8mの大きさの長梢円形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構の埋土中には、少量の炭化物や焼土粒とともに瓦の破片が多く含まれている。

出土遺物（第136図）

402は肥前系の陶器鉢である。体部外面には千鳥、内面には草がそれぞれ鉄絵により描かれている。

土坑 51 (SK3051) (SK3053) (第137図)

1区のG・H-9グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.5m、幅1.1mの大きさの不整梢円形の土坑である。断面がU字状に掘り込まれた深さ約0.6mの遺構の埋土からは少量の炭化物や焼土粒に混じって、礫や瓦、木などの破片が検出されている。

出土遺物（第138図）

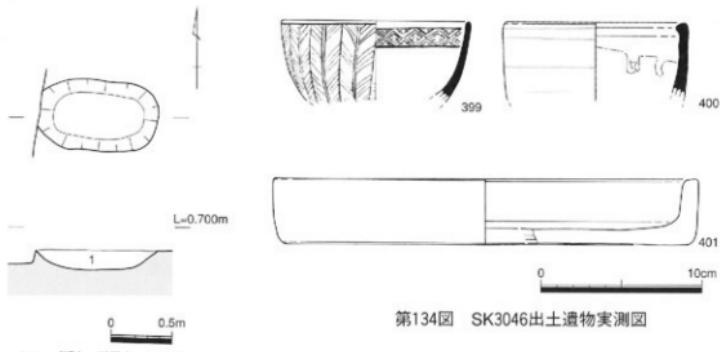
403は体部内外面に灰釉が施された唐津の陶器碗である。404は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。口縁部内外面には煤が付着している。405は輪積み成形で製作された土師質の焼塩壺である。

土坑 52 (SK3052) (第139図)

1区のG-9、H-9グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.4m、幅1.2mの長方形の土坑である。断面逆台形状に掘り込まれた深さ約1.1mの遺構内には少量の炭化物や焼土粒を含むオリーブ色系統の砂質またはシルト質土が堆積している。

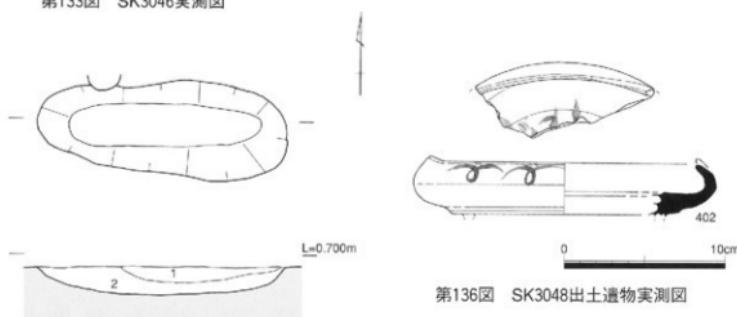
出土遺物（第140図）

406は鉄製の釘である。断面形状は丸形である。407は粘板岩を素材とした石製の櫛である。



第133図 SK3046実測図

第134図 SK3046出土遺物実測図

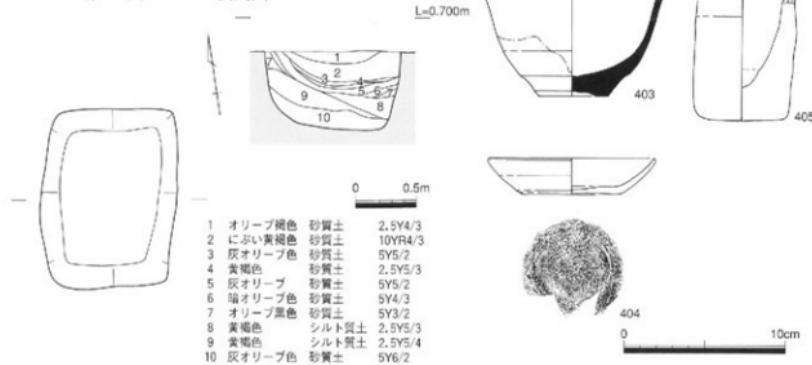


第135図 SK3048実測図

L=0.700m

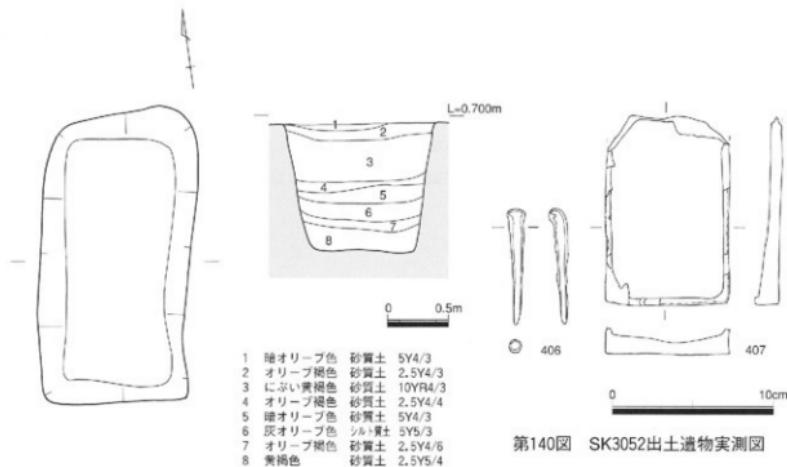
第135図 SK3048実測図

第136図 SK3048出土遺物実測図

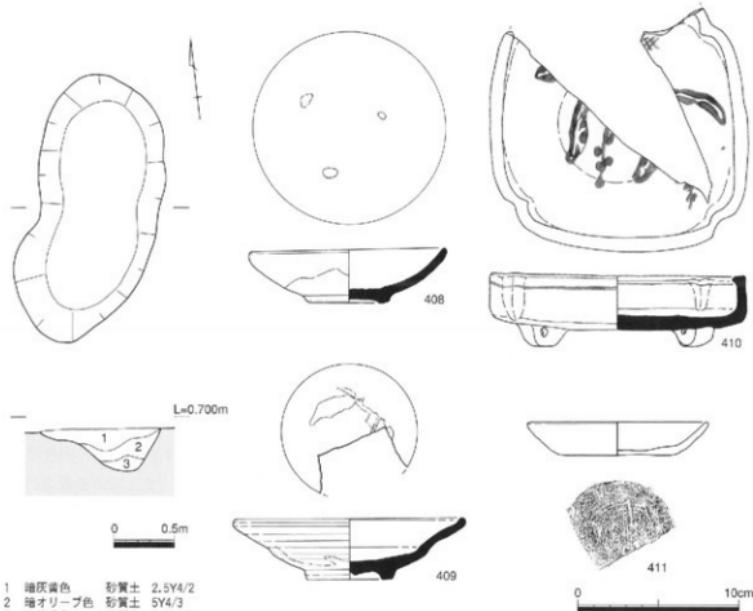


第137図 SK3051実測図

第138図 SK3051出土遺物実測図



第139図 SK3052実測図



第141図 SK3054実測図

第140図 SK3052出土遺物実測図

土坑 54 (SK3054) (第141図)

1区のH-8グリッドから検出された、南北方向の長軸を持つ長さ約2.1m、幅1m、深さ0.4mの不整指円形の土坑である。遺構の底面は東壁側が西壁よりも一段低く掘り込まれている。

出土遺物 (第142図)

408は肥前系の陶器碗である。409は肥前系の陶器製溝縁皿である。内面見込部には砂目痕が残され、高台部分は無釉である。410は瀬戸美濃系の志野の四方隅切足付陶器鉢である。411は口縁部に煤が付着した土師質の灯明皿である。

土坑 59 (SK3059) (第143図)

1区のJ-4グリッドから検出された直径約0.7mの大きさのはば円形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ0.1mの遺構の埋土中には炭化物と焼土粒を少量ずつ含んだ砂質土が堆積している。

出土遺物 (第144図)

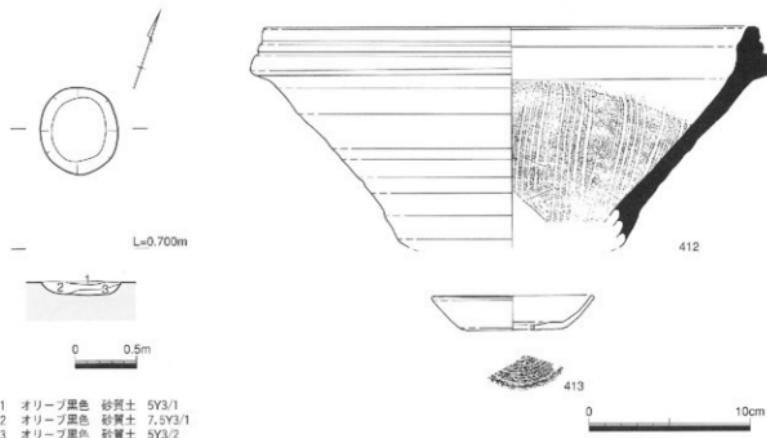
412は備前系の陶器製擂鉢である。口縁上端と外面鉢部には窯着痕が残されている。内面には7条1単位の瘤目がつけられている。室町から桃山時代のものである。413は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。

土坑 66 (SK3066) (第145図)

1区のK・L-4・5グリッドにまたがって検出された、長軸を南北方向にとる長さ約2.9m、幅2.6mの大きさの隅丸方形の土坑である。皿状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構内には、部分的に多くの炭化物や焼土粒を含んだ縮まりの強い砂質土が堆積している。遺構からは陶磁器や土師器・木製品など多数の遺物が出土していることから施業土坑と考えられる。

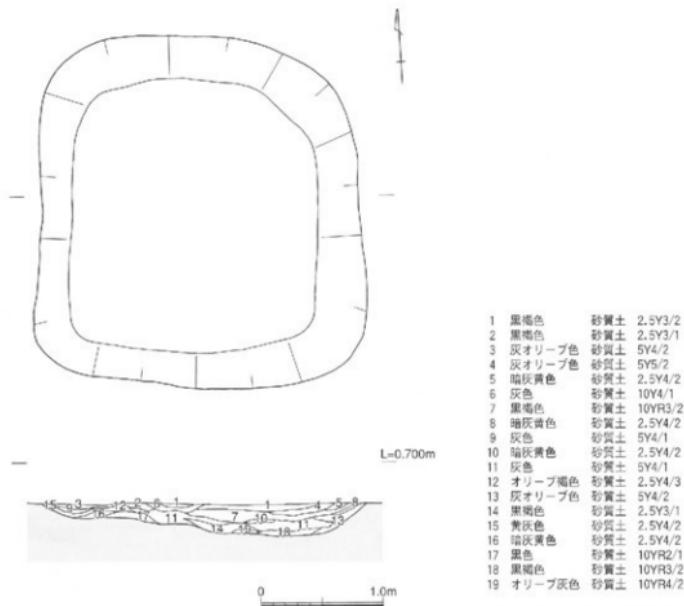
出土遺物 (第146~148図)

414は肥前系の磁器皿である。口縁端部には口錫装飾が施され、体部内面は染付により團線が引かれている。見込部は蛇ノ目釉剥ぎが施され、高台内には砂目痕が残されている。415は高台畳付部分を除き全面に灰釉が施された肥前系の陶器碗である。416は肥前系の陶器製小皿である。体部内面には鉄絵が描かれ、見込部には胎土目痕が5か所残されている。417は肥前系の陶器皿である。体部は外面下半部を除き灰釉が施され、内面見込部には砂目痕が4カ所残されている。418・419は肥前系の端反の陶器皿である。体部は外面上半部と内面全体に灰釉がかけられ、見込部には胎土目痕が残されている。420は肥前系の陶器碗である。体部は外面下半部を除き灰釉がかけられ、見込部には胎土目痕が4カ所残されている。421は肥前系の陶器皿である。体部は外面下半部と内面全体に灰釉がかけられ、見込部には目痕が残されている。422は肥前系の陶器皿である。体部は外面下半部を除き灰釉が施されている。内面見込部には胎土目痕が4カ所残され、口縁部には煤が付着している。423は志野織部の向付である。内渦する体部は内外面に鉄絵が描かれている。424は肥前唐津の絵皿である。425は瀬戸美濃系の志野向付である。口縁端部を外面に折返し、体部外面には貼付により3つの描座を施している。内面は長石釉と鉄絵により文が描かれている。426は底部に半環足が貼付けられた瀬戸美濃系の志野向付である。内面には長石釉と鉄絵により草が描かれている。427は底部に半環足が貼付された瀬戸美濃系の青織部の向付である。外側は銅緑釉と鉄絵により木賊文が、また内面には銅緑釉の漬かけにより籠目文が描かれている。428は瀬戸美濃系の志野向付である。輪縁成形後、型打によって入隅四方形に整えられた角

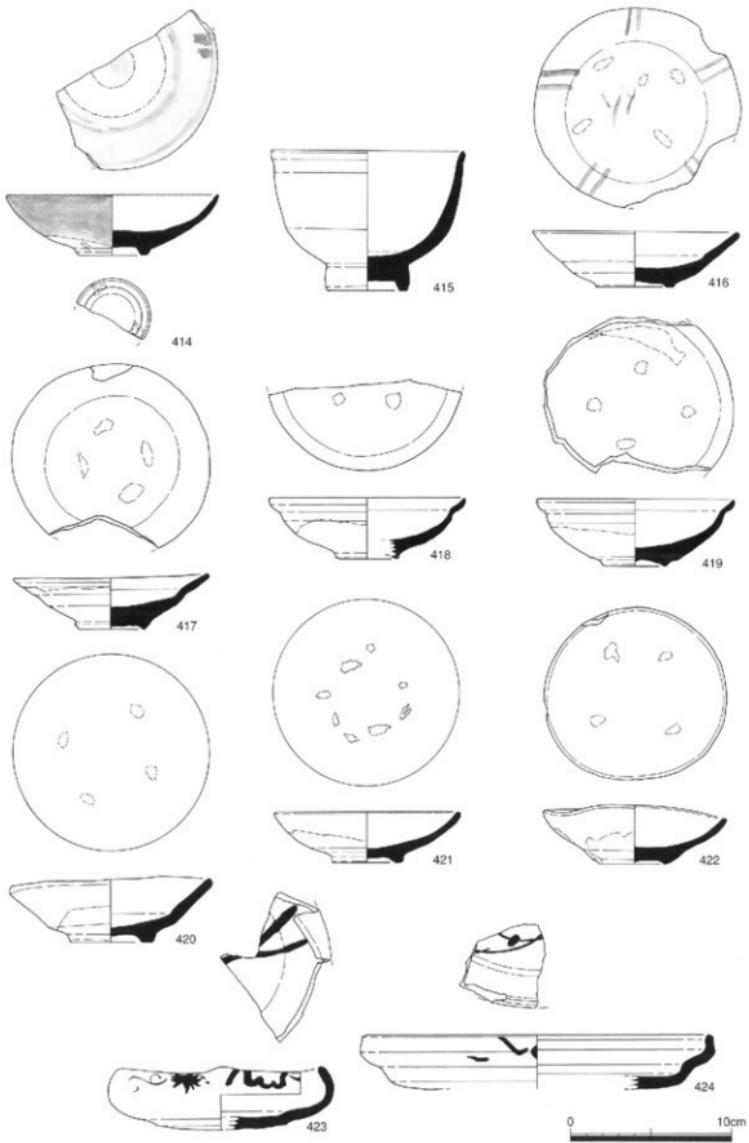


第143図 SK3059実測図

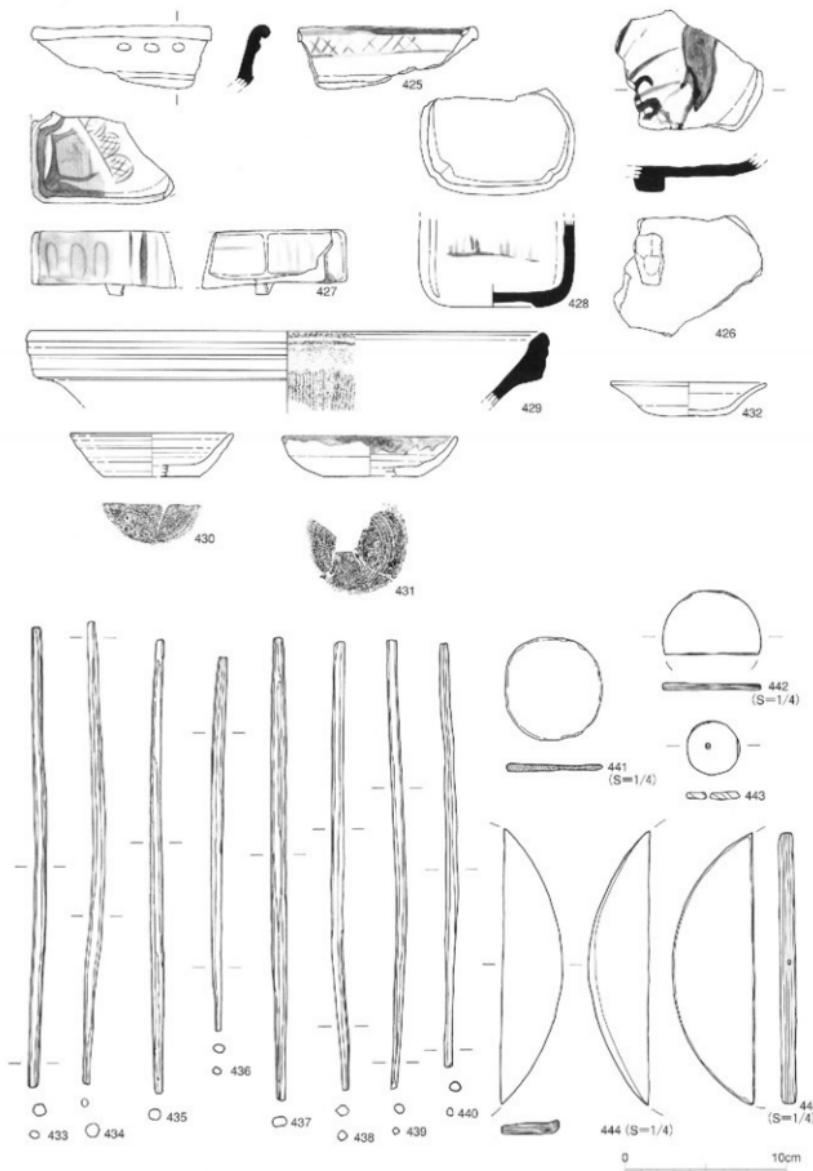
第144図 SK3059出土遺物実測図



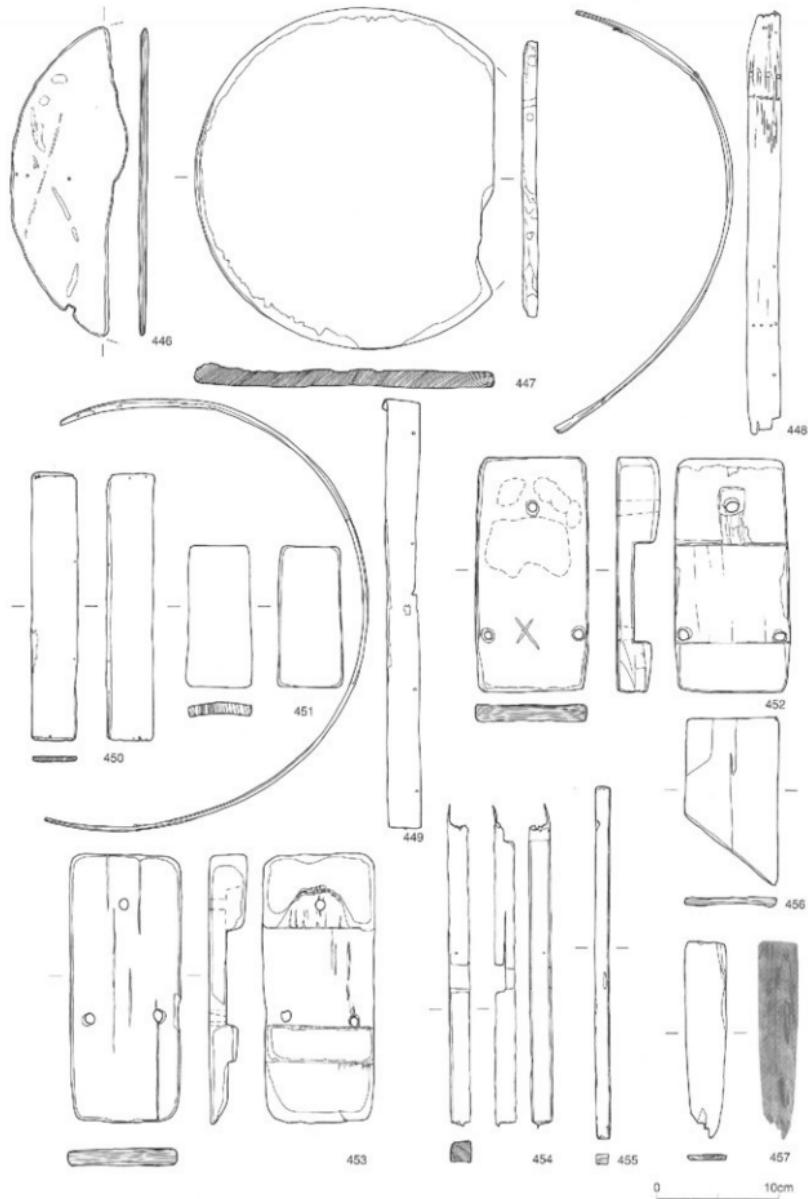
第145図 SK3066実測図



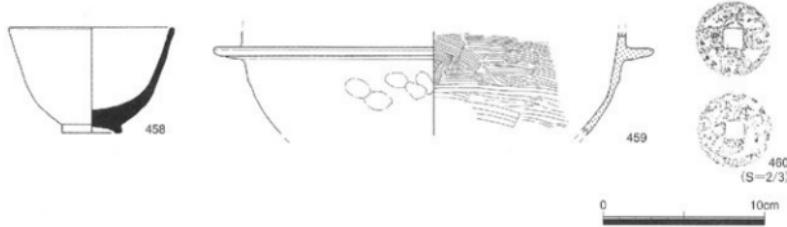
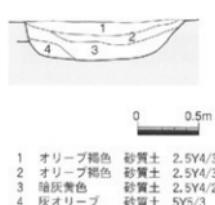
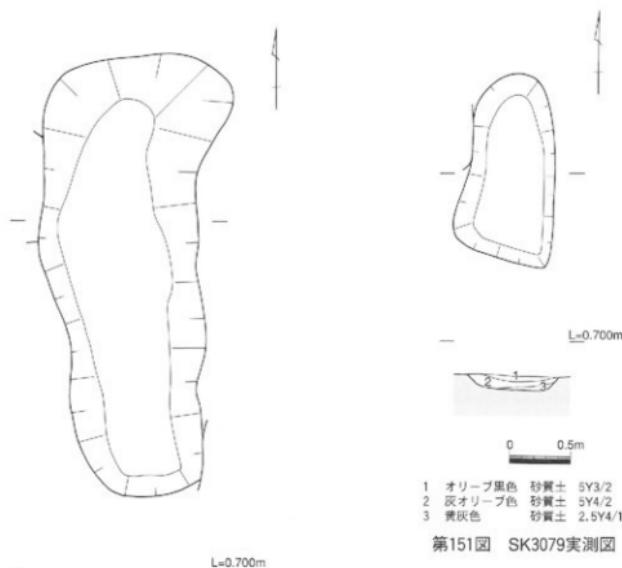
第146図 SK3066出土遺物実測図(1)



第147図 SK3066出土遺物実測図 (2)



第148図 SK3066出土遺物実測図 (3)



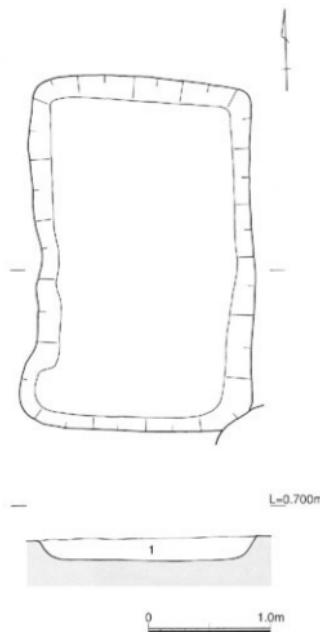
向付で、高台は削込高台である。体部は全面に長石釉がかけられ鉄絵によって草文様が描かれている。429は内面に12条1単位の擂目が付けられた堺明石系の陶器製擂鉢である。430は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。431は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。432は土師質の皿である。底部の切り離しには回転ヘラ切り技法が使用されている。433～440は木製の箸である。441は木製の容器蓋又は底板である。442は木製の容器蓋、又は底板である。443は木製の容器蓋で、穿孔が1カ所に見える。444は木製の容器蓋又は底板である。445は木製の容器蓋又は底板である。側面には接ぎ合わせの埋釘穴が1カ所あけられている。446は木製の容器蓋である。穿孔が3カ所に見える。447は木製の曲物の底板である。側面に接ぎ合わせの埋釘穴が2カ所あけられている。448は木製の曲物である。接合のための金属製留め具と木皮留めの穿孔がある。449は木製の曲物である。接合のため金属製留め具が3カ所に、木皮留めの穿孔が6カ所にある。450は木製の容器側板である。表面には黒漆が塗られている。451は用途不明の板状加工木片である。452は木製の削り下駄である。表面には足形の溝みと「×」印が刻書されているのが見える。453は木製の削り下駄である。454は木製の建築部材で、釘穴が3カ所に確認できる。455は用途不明の断面角形の棒状加工木片である。456は用途不明の板状の加工木片である。457は木筒である。墨書が片面に見える。

土坑 78 (SK3078) (第149図)

1区のI-6・7グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約3.5m、幅1.3mの大きさの不整楕円形の遺構である。断面がU字状に掘り込まれた遺構内には、焼土粒や炭化物を少量含んだ締まりの強い砂質土が堆積している。

出土遺物 (第150図)

458は肥前系の陶器碗である。高台部分以外は内外面とも灰釉がかけられている。459は瓦質の釜である。外面は指オサエ、内面は指オサエの後ハケ目調整が加えられている。460は洪武通宝である。重量は2.55gを測る。



第153図 SK3094実測図



第154図 SK3094出土遺物実測図

土坑 79 (SK3079) (第151図)

1区のL-7グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.6m、幅0.7mの大きさの不整枠円形の土坑である。皿状の断面を持つ遺構の掘り込みは浅く最も深いところでもわずか0.2m足らずしかない。

出土遺物 (第152図)

461は瀬戸美濃系の志野の向付である。内面見込部には目痕が残され、鉄絵によって渦と区画が描かれている。

土坑 94 (SK3094) (第153図)

1区のM-5グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ2.9m、幅1.8mの大きさの長方形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構の埋土からは陶磁器や瓦、木などの破片が多く出土していることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第154図)

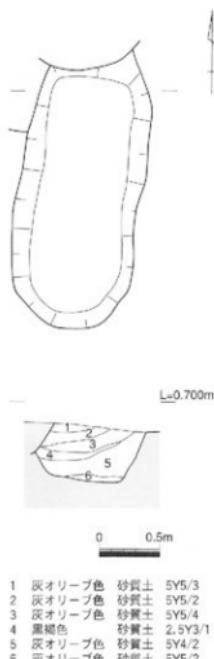
462は口銷装飾が施された肥前系の白磁碗である。463は肥前系の磁器の蓋である。外青磁で、高台外底部は二重方形枠内に「福」の変形字が染付により書き込まれている。464は外面に染付により紅葉が描かれた肥前系の磁器製大鉢である。465は肥前系の筒型磁器碗である。外青磁で口縁部内面には四方博文が描かれ、見込部は二重圓線内にコンニャク印判で五弁花文が押されている。466は肥前系の磁器碗である。外青磁で内面見込部には二重圓線と五弁花文が描かれ、高台外底部には二重方形枠内に「福」の変形字が染付により書き込まれている。467は肥前系の白磁の仏飯器である。468は肥前系の陶胎染付碗である。全面に釉がかけられ、体部外面には花卉文が描かれている。469は瀬戸美濃系の陶器製茶碗である。口縁部外面と内面全面には鉄釉がかけられ、体部外面には鉛目文様が描かれている。470は肥前系の陶器蓋である。471は備前の陶器製灯明受皿である。472は堺明石系の陶器製擂鉢である。内面に8条1単位の擂目がつけられている。473は瀬戸美濃系の陶器鉢である。外面には鉄釉がかけられているが、内面は無釉である。474は全面に指頭によるナデ調整が加えられた上師質の筒型容器である。

土坑101 (SK3101) (第155図)

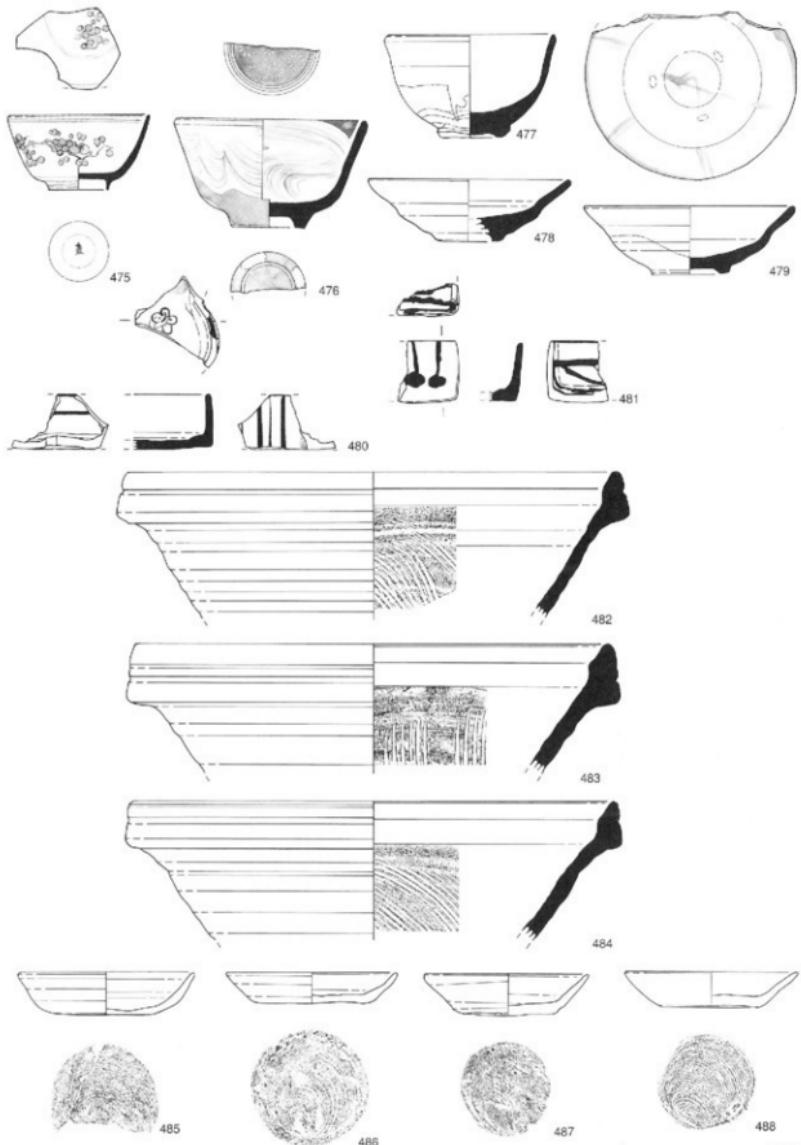
1区のN-6グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長楕円形の土坑である。遺構の北側の一部が他の遺構と切り合っているため正確な大きさは不明だが、残された部分は長さ約2.1m、幅1.0m、深さ0.5mを測る。遺構内には灰オーリーブ色を基調とする砂質土が堆積している。

出土遺物 (第156・157図)

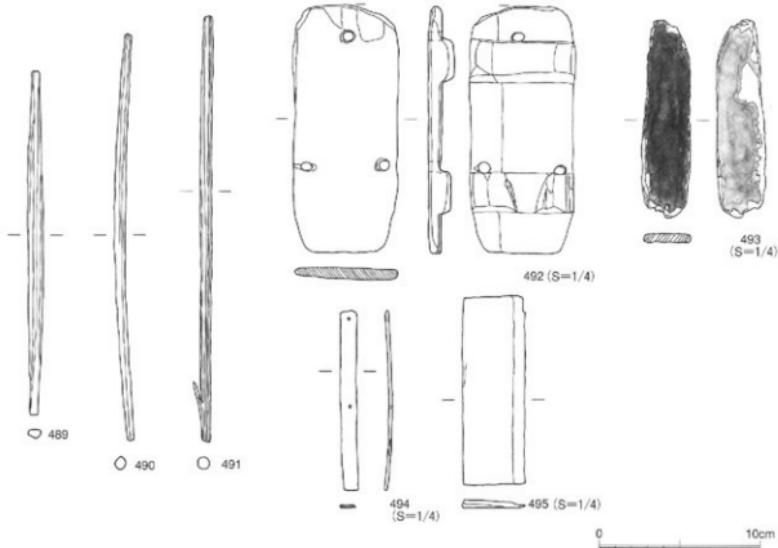
475は肥前系の磁器碗である。体部外面と内面見込部には染付により梅の文様が描かれ、高台外底部には「青」に似通った銘が書き込まれている。476は肥前系の三島手唐津の陶器碗である。体部外面は灰釉と白泥による櫛刷毛目、内面は象嵌による文様がつけられている。高台疊付部分には砂目痕が残さ



第155図 SK3101実測図



第156図 SK3101出土遺物実測図(1)

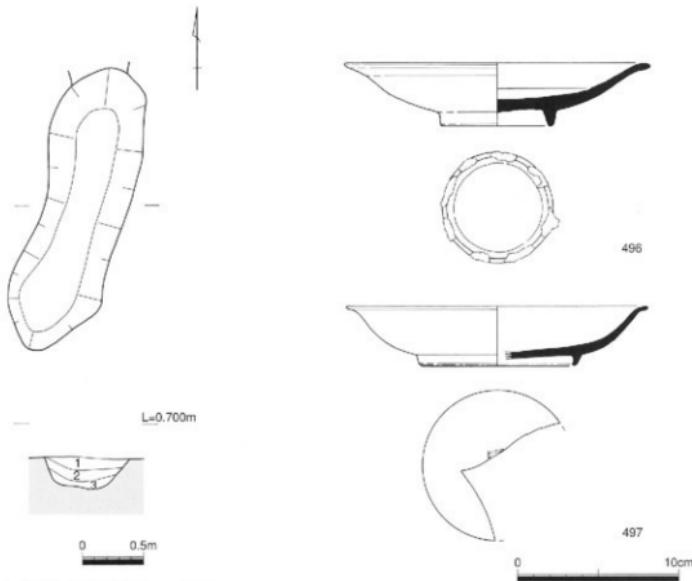


第157図 SK3101出土遺物実測図(2)

れている。477は灰釉がかけられた肥前系の陶器碗である。体部の外面下半部は露胎のまま残されている。478は肥前系の陶器皿である。内面には灰釉が施されているが外面は露胎のまま残されている。内面見込部には砂目痕が残されている。479は鉄絵による文様が描かれた肥前系の陶器皿である。体部は外面下半部が露胎のまま残され、内面見込部には胎土目痕が3カ所見える。480は瀬戸美濃系の織部の向付である。内外面には鉄絵により文様が描かれ、内面見込部には重ね焼きの痕が残されている。481は内外面に鉄絵による文様が描かれた瀬戸美濃系の志野織部の向付である。482は備前系の陶器製捕鉢である。内面に9条1単位の描目が付けられている。483は口径286mmを測る堺明石系の陶器製捕鉢である。内面には6条1単位の描目が残されている。484は備前系の陶器製捕鉢である。485・486はいずれも底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。口縁部には煤が付着している。487は底部に回転糸切り痕が残された土師質の皿である。488は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。口縁部には煤が付着している。489～491は木製の箸である。492は木製の連歛下駄である。493は板状の加工木片で表面には黒、裏面には赤漆が塗られている。494は細長い板状の加工木片である。穿孔が2カ所に見える。495は用途不明の加工木片である。

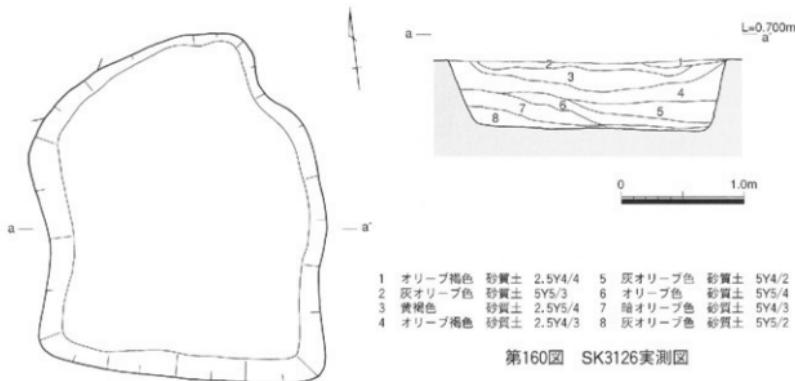
土坑104 (SK3104) (第158図)

1区のM-6・7グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.4m、幅0.7m、深さ0.3mの大きさの長楕円形の土坑である。断面がU字型に掘り込まれた遺構内にはオリーブ色を基調とする砂質土とシルト質土が堆積している。

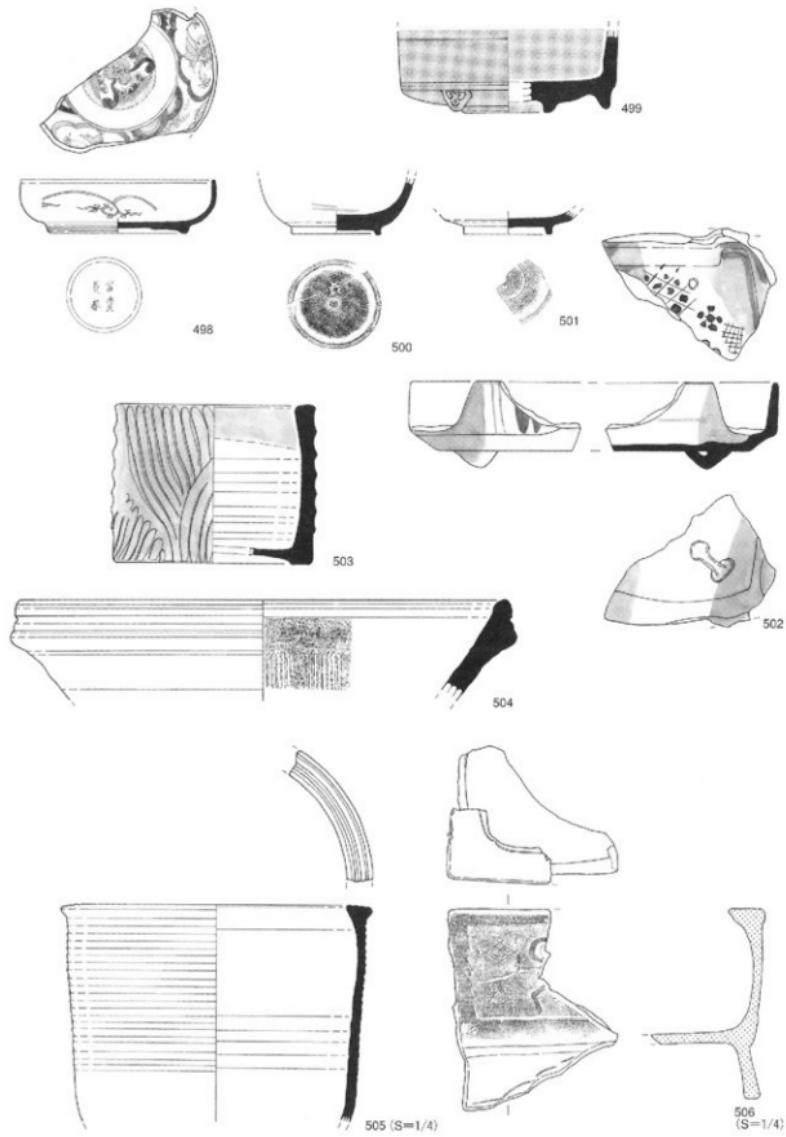


第158図 SK3104実測図

第159図 SK3104出土遺物実測図



第160図 SK3126実測図



第161図 SK3126出土遺物実測図

出土遺物（第159図）

496は口径186mmを測る肥前系の白磁皿である。高台畳付部分には砂目痕が残されている。497は肥前系の磁器皿である。高台外底面には染付による方形枠が若干見える。

土坑126（SK3126）（第160図）

1区のM・N-9グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.9m、幅2.3mの大きさの不整形な形の土坑である。深さ約0.5mの遺構は断面が逆台形状に掘り込まれている。

出土遺物（第161図）

498は肥前系の染付磁器皿である。蛇ノ目凹型高台で高台外底部には「富貴長春」の銘がある。体部外面は唐草文様、内面は意絵に牡丹と唐草、見込部は松が描かれている。499は底部に三足が貼付けられた肥前系の青磁鉢である。外面には圈線が陰刻されている。高台畳付部分は露胎のまま残され砂目痕が見られる。500は肥前系の京風唐津碗である。全面に灰釉がかけられているが高台部分だけは露胎のまま残され、高台外底面は円刻され周辺に「武」の刻印が捺されている。501は肥前系の陶器碗である。高台外底部にうたれた内刻内には「清水」の刻印がある。502は瀬戸美濃系の青磁部の向付である。503は陶器製の火入れである。504は堺明石系の陶器製擂鉢である。内面には8条1単位の描目が付けられている。505は備前の陶器壺である。506は瓦質の焜炉である。体部側面の方形枠内には「泉・古木」、菱形枠内には桐図の刻印がうたれている。

土坑140（SK3140）（第162図）

2区のA-9グリッドから検出された主軸を東西方向にとる長さ約0.9m、幅0.7mの大きさの不整楕円形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.1mの遺構内には微量の炭化物や焼土粒に混じって礫や瓦片が含まれている。

出土遺物（第163図）

507は肥前系の磁器製筒茶碗である。外面には格子文、内面には四方擗文がそれぞれ染付により描かれている。508は肥前系の磁器製筒茶碗である。外面は七宝と唐草文様が染付で描かれ、内面はコンニャク印判による五弁花文が押されている。

土坑141（SK3141）（第164図）

2区のB-10グリッドから検出された長軸を東西方向にとる土坑である。遺構の東側を削平されているため全体の大きさは不明だが、残された部分は東西約1.8m、南北1.5m、深さ0.2mを測り、不整椭円形の遺構の埋土中には炭化物やブロック状の焼土に混じて礫や瓦片が含まれている。

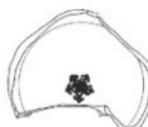
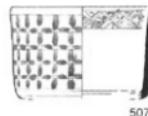
出土遺物（第165図）

509は外面に山水が描かれた肥前系の陶胎染付碗で、高台畳付部分は露胎のまま残されている。510は肥前唐津の陶器碗である。鉄釉と白泥による刷毛目装飾が施され、高台畳付部分には砂が付着している。511は寛永通宝（新）である。重量は2.65gである。

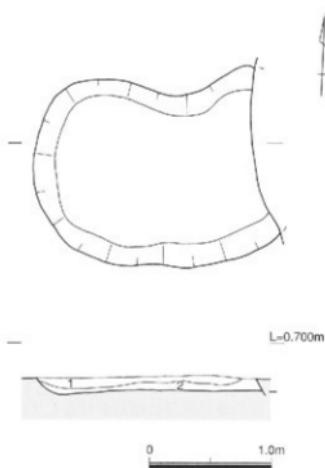


1 黄灰色 砂質土 2.5Y4/1
2 雖灰黃色 シルト質土 2.5Y4/2

第162図 SK3140実測図

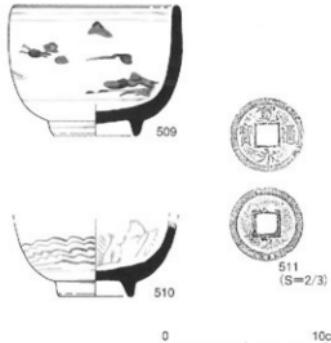


第163図 SK3140出土遺物実測図

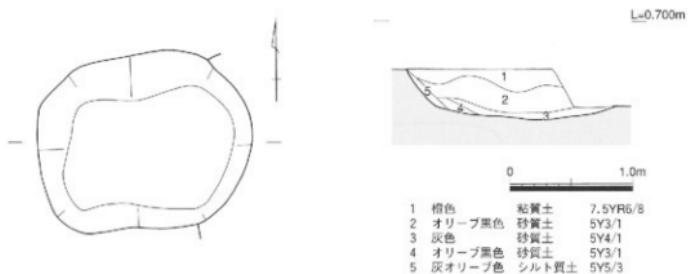


1 雖灰黃色 砂質土 2.5Y5/2 2 雖灰黃色 砂質土 2.5Y4/2

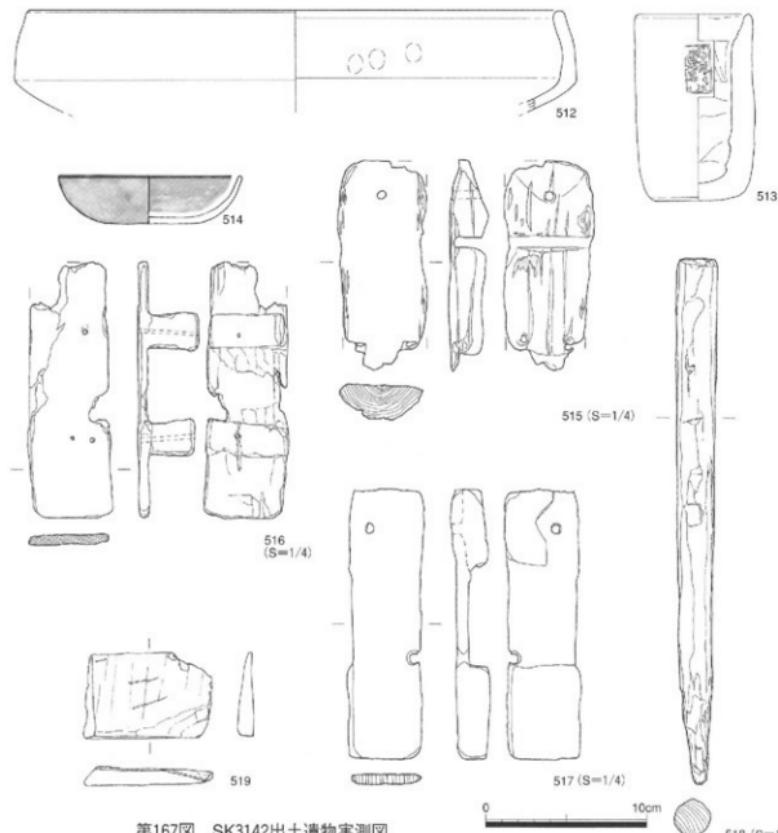
第164図 SK3141実測図



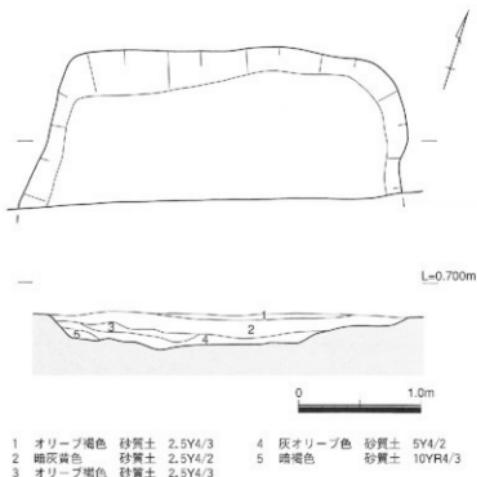
第165図 SK3141出土遺物実測図



第166図 SK3142実測図



第167図 SK3142出土遺物実測図



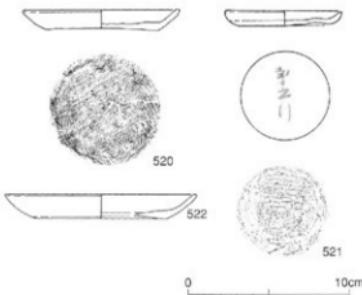
第168図 SK3144実測図

土坑142（SK3142）（第166図）

2区のB-13・14グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる楕円形の形と考えられる土坑である。東側の上部を大きく削平されているため正確な大きさは不明であるが、残された部分は長さ約1.8m、幅1.4m、深さ0.4mを測り、5層に分かれる遺構内の埋土には塊状の炭化物の他に陶磁器片や礫、木片などが多く含まれている。廃棄土坑であろう。

出土遺物（第167図）

512は型作り成形によって製作された関西系の土師質の焼壺である。外面には煤が付着している。19C前半のものである。513は堀廬の焼塩壺である。輪積み成形によって製作された体部には「天下一堀・・・」の刻印が残されている。1654年から1682年までのものである。内面は2次焼成特有のピンク色に変化している。514は木製の漆碗で全面に茶漆が塗装されているが、口縁端部には黒漆が塗られている。515は木製の差歛下駄である。長さ177mmを測り、全面に漆塗りの痕跡が見える。棕櫚の鼻緒も残存する。516は木製の連歛下駄である。長さ210mmを



第169図 SK3144出土遺物実測図

測り、釘穴が3カ所に見える。517は木製の例り下駄で、長さ221mmを測る。518は木製の枕である。長さ429mmを測る。519は石製の砥石である。6面全面に使用痕が見られる。

土坑144（SK3144）（第168図）

2区のB-15グリッドから検出された土坑である。遺構の南側を大きく削平されているため正確な形や大きさは不明だが、残された部分は東西約3.1m、南北1.2mを測る。皿状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構の底面には不規則な凹凸がみられる。

出土遺物（第169図）

520は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。口縁部に煤が付着している。521は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の皿である。底部には糸切りの痕跡の他に板目痕と墨書きがみられる。522は土師質の皿である。底部には回転糸切り痕が残されている。

土坑153（SK3153）（第170図）

2区のC-13・14、D-14グリッドにまたがって検出された直系約2.9mの大きさの不整円形の遺構である。皿状に掘り込まれた深さ約0.4mの遺構の底面近くからはブロック状の炭化物や焼土に混じって陶磁器や瓦の破片が多く出土している。

出土遺物（第171図）

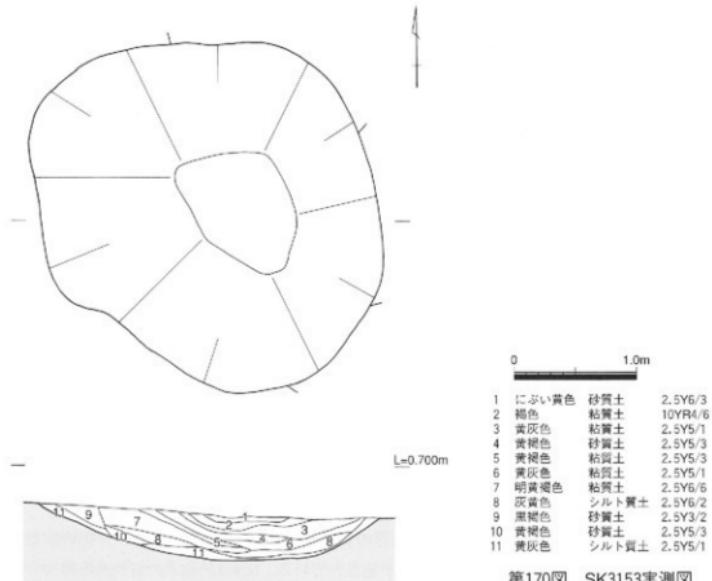
523は底部に足が3カ所貼付けられた肥前系の青磁皿である。体部は内面にヘラ彫の陰刻草花文様が描かれ、見込部の蛇ノ口袖剥ぎ痕には鉄漿が施されている。524は肥前系の京焼風陶器碗である。外面には鉄絵により山水文が描かれ、高台外底面には円刻と「木下弥」の押印がある。全面に貫入がみられる。525・526は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の小皿である。527は三体の猿の土人形である。型作り貼合せで製作され、全面に墨書きが付着している。

土坑162（SK3162）（第172図）

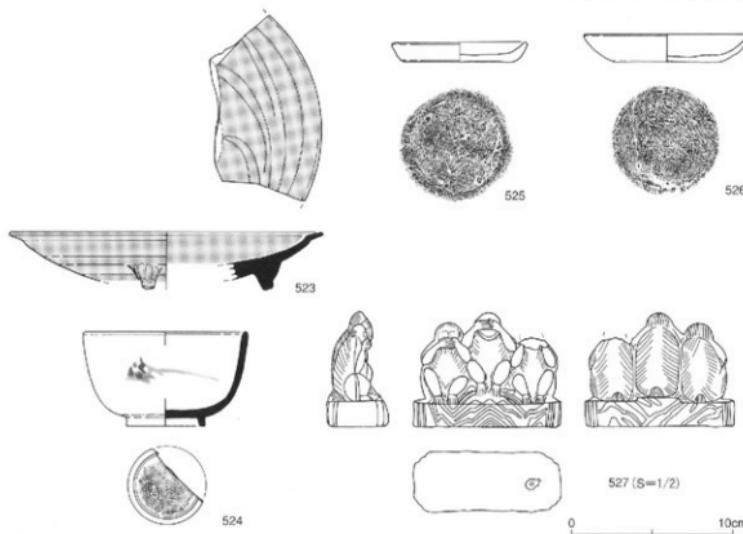
2区のD-14グリッドから検出された上坑である。遺構の北側を大きく削平されているため、正確な形や大きさは不明だが、長さ約1.9m、幅1.5mを測る遺構の残存部分から推定すると、本来は長さが3mを超える不整椭円形の遺構であったと考えられる。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.9mの遺構の埋土中に炭化物や焼土粒が含まれ、底近くでは木片なども混じっている。

出土遺物（第173図）

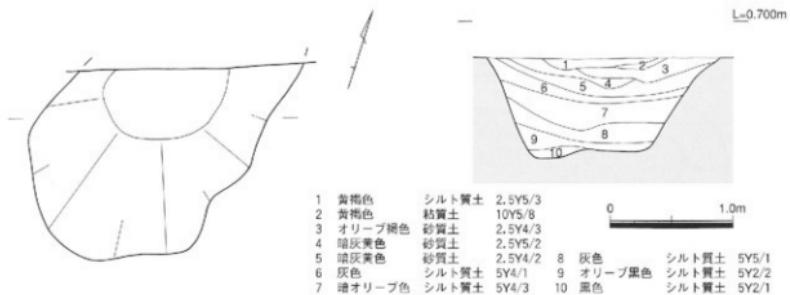
528は肥前系の磁器皿である。体部内面には染付により花卉が描かれている。529は京信楽系の陶器碗である。全体に灰釉がかけられているが、底部だけは露胎のまま残されている。530は肥前唐津の陶器皿である。全面に灰釉がかけられているが高台周辺だけは露胎のまま残されている。内面見込部には砂目痕が3カ所認められる。531は口径243mmを測り、鉄釉がかけられた関西系の陶器甕である。532は土師質の皿である。底部の切り離しには回転糸切り技法が使用されている。533は土師質皿である。534は輪積み成形で製作された土師質の焼塩甕である。内面には布目痕が残されている。535は凝灰岩を素材にした砥石である。



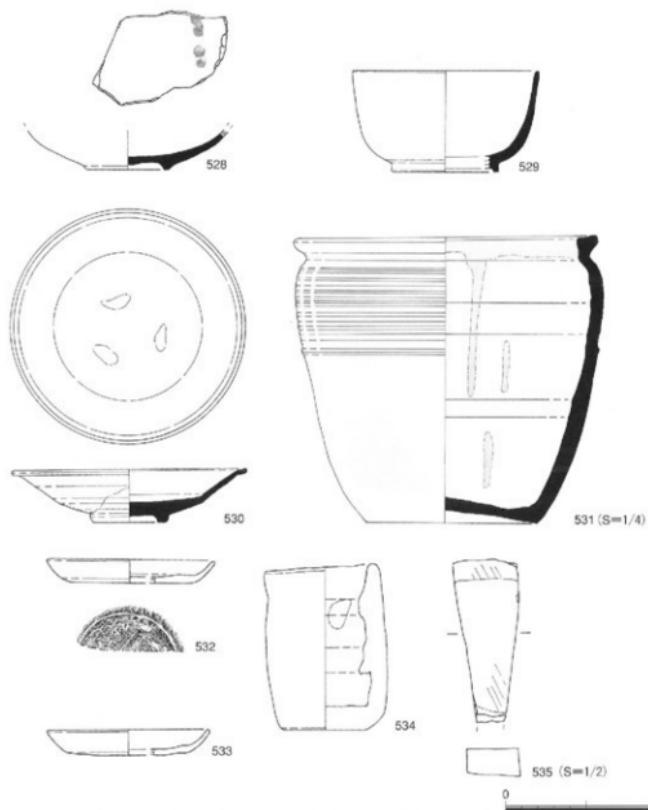
第170図 SK3153実測図



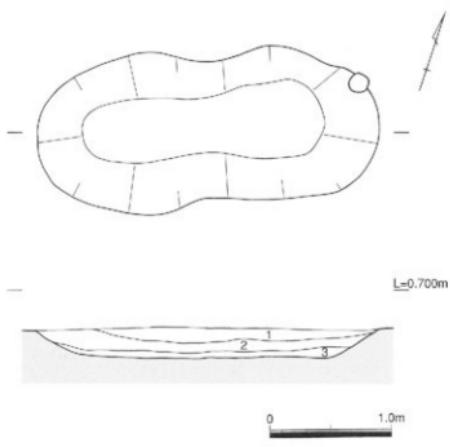
第171図 SK3153出土遺物実測図



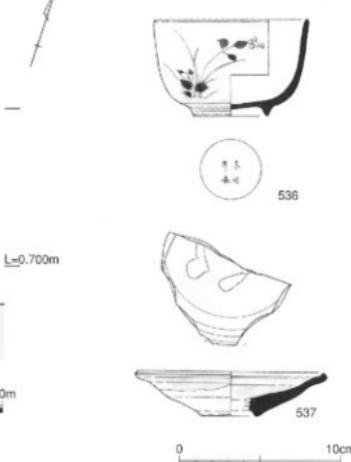
第172図 SK3162実測図



第173図 SK3162出土遺物実測図



第174図 SK3164実測図



第175図 SK3164出土遺物実測図

土坑164（SK3164）（第174図）

2区のD・E-15グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約2.8m、幅1.4mの大きさの不整楕円形の土坑である。畝状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構内には、焼土粒や炭化物を含んだオリーブ色砂質土が堆積している。

出土遺物（第175図）

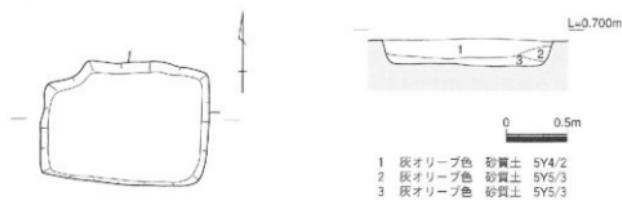
536は肥前系の磁器碗である。外面には染付により秋草が描かれ、高台外底面には「太明年製」の銘がある。17C後期から18Cのものである。537は肥前唐津の溝縁皿である。体部外面上半部と内面全体に鉄釉が施され、内面見込部には砂目痕が残されている。また、高台部分には砂が付着している。

土坑184（SK3184）（第176図）

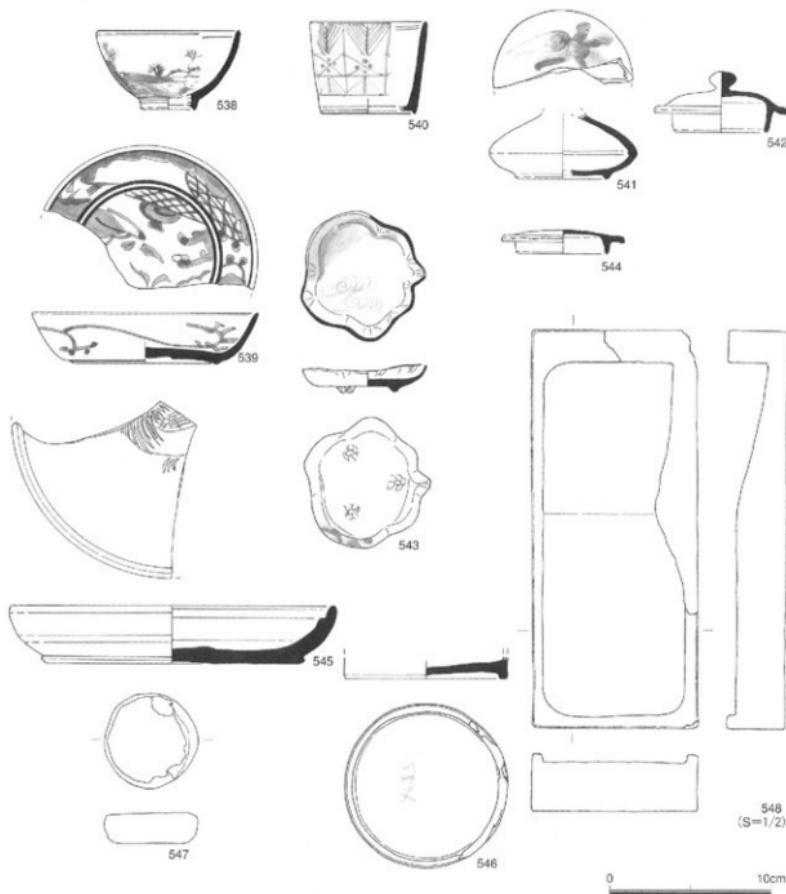
3区のJ-14グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.4m、幅1mの大きさの不整形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内の灰オーリーブ色の砂質土中からは陶磁器や瓦片が多く出土している。廃棄土坑であろう。

出土遺物（第177図）

538は瀬戸美濃系の磁器碗である。外面には岩山と松が染付によって描かれている。539は肥前系の磁器皿である。蛇目型高台で、外面は唐草文、内面は風景が染付によって描かれている。540は瀬戸美濃系の磁器製猪口である。541は瀬戸美濃系の磁器製油壺である。型作成型で製作され、体部上下と高台を貼付けている。体部には染付により大根が描かれている。542は磁器の蓋である。頂部には摘みが貼付けられ、内面は無釉である。543は瀬戸美濃系の陶器皿である。口縁には口銷装飾、内面には染



第176図 SK3184実測図



第177図 SK3184出土遺物実測図

付による溝を描き、半身に銅縁袖が施されている。型打成形で製作され、底部には3つの小さい足が貼付けられている。544は京信楽系の陶器製の合子蓋である。外面には灰釉がかけられている。545は外外面に火拂痕が残された備前の陶器皿である。546は陶器製の筒型容器である。高台部のみ残存していることから加工円盤の可能性がある。高台外底面には墨書で「玄口」とある。547は瓦質の加工円盤である。548は凝灰岩を素材にした石製の硯である。

土坑197（SK3197）（第178図）

3区のK-16・17グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.7m、幅0.6mの大きさの長楕円形の土坑である。逆台形状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構内には瓦片や礫が多量に混じった緑まりの良い暗灰黄色の粘土土が堆積している。

出土遺物（第179図）

549は土師質の涼炉である。体部外面には円刻内に「あこと」の刻印が捺されている。

土坑229（SK3229）（第180図）

3区のM・L-14グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約3.3m、幅3.0mの大きさの楕円形の土坑である。しかし、遺構の平面の大きさに対して逆台形状に掘り込まれた遺構はわずか0.2mたらずの深さしかない。

出土遺物（第181図）

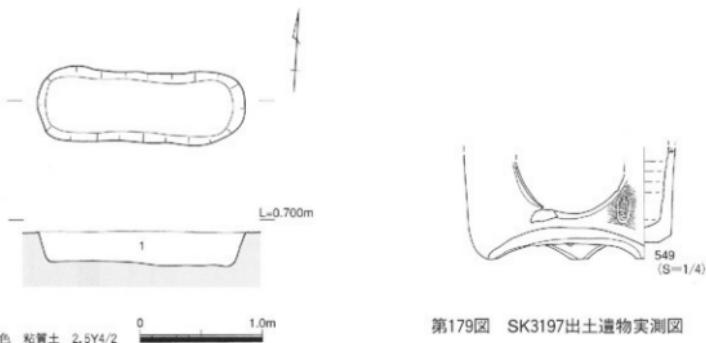
550は木製の曲物の底板である。側面に接ぎ合わせの埋釘穴が2カ所に見える。551は木製の連歛下駄である。552は木製の草履下駄である。553は加工木である。曲物の側板かと思われる。方形枠内に「□川」の焼き印が見える。554・555は加工木片である。554は中央に角形のはぞ穴が開いている。556・557は木筒である。557は片面に墨書が見られる。558は木筒か。559～563も木筒である。560は文字不明である。562は片側に等間隔に3カ所の釘穴が見え、「岩山所」の墨書が記入されている。荷札か鑑札と思われる。563は墨書が両面に見え、釘穴が1カ所にある。

土坑231（SK3231）（第182図）

3区のM-13グリッドから検出され、長軸を南北方向にとる長さ約2.4m、幅2.1mの大きさの不整楕円形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構内に堆積した灰色または灰オリーブ色の砂質土には少量の炭化物や焼土粒とともに礫や瓦片が含まれている。

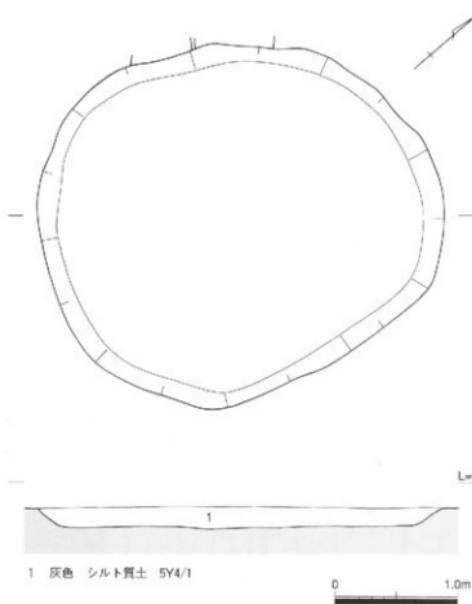
出土遺物（第183図）

564は瀬戸美濃系の陶器製天目茶碗である。ほぼ全面に鉄釉がかけられているが、高台部分は露胎のまま残されている。565は肥前系の陶器製溝縁皿である。内外面とも全面に灰釉がかけられているが削り出しの三日月高台部分だけは露胎のまま残されている。また、内面見込部には砂目痕が4カ所残されている。566は削り出し高台を持つ肥前系の陶器皿である。内面には鉄釉がかけられている。567は底部に砂目痕が3ヶ所残された肥前系の陶器製小鉢である。568は口径107mmを測る土師質の皿である。底部の切り離しには回転糸切り技法が使用されている。569は用途不明の鉄製品である。570は銅鏡の和同開弥である。重量は3.64gを測る。

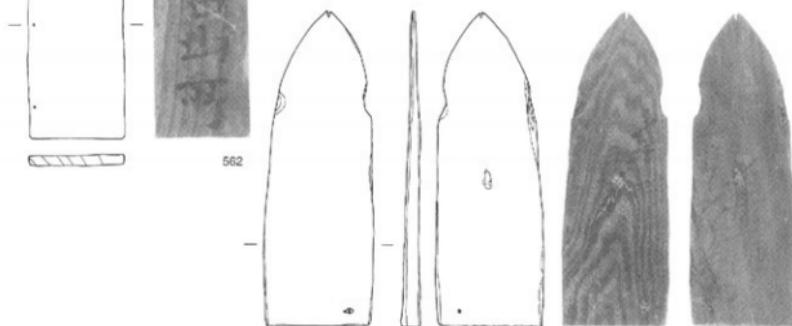
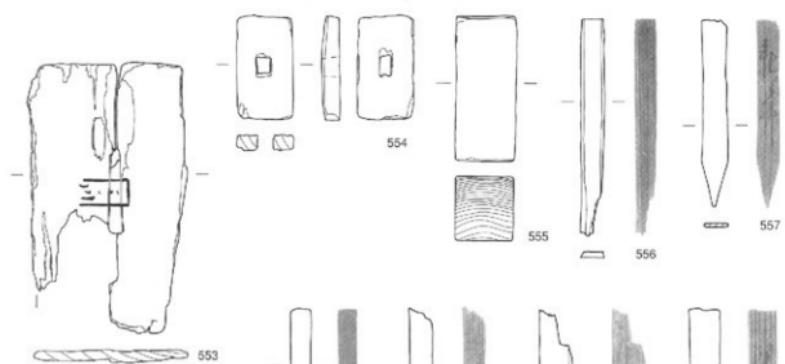
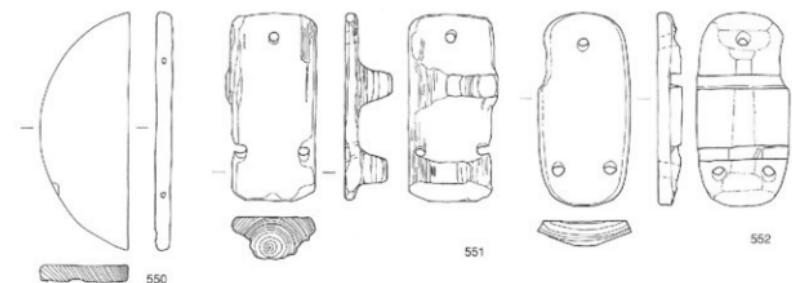


第178図 SK3197実測図

第179図 SK3197出土遺物実測図

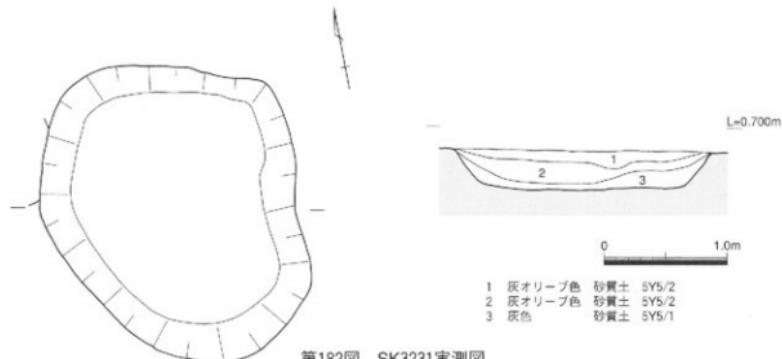


第180図 SK3229実測図

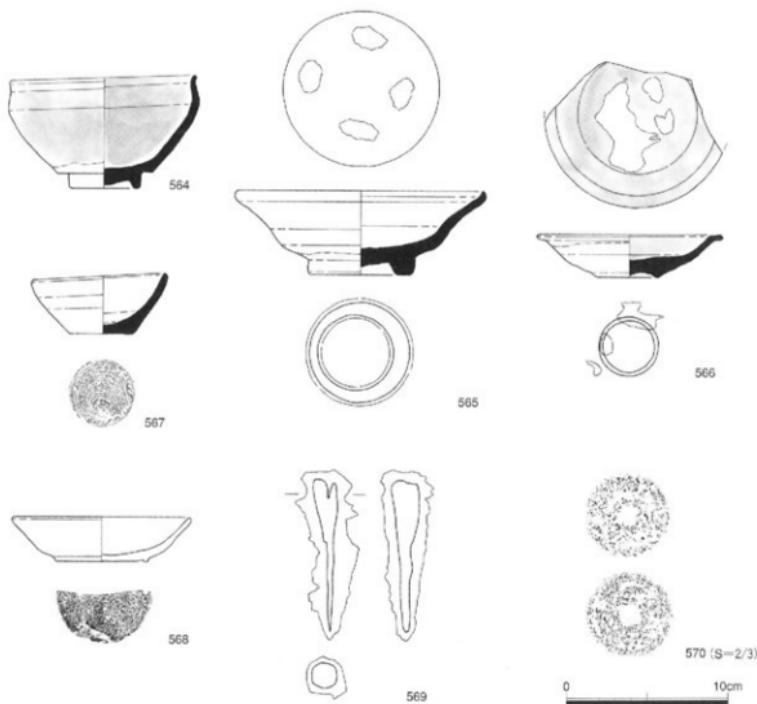


0 10cm

第181図 SK3229出土遺物実測図



第182図 SK3231実測図



第183図 SK3231出土遺物実測図

土坑237 (SK3237) (第184図)

3区のM-15グリッドから検出された深さ約0.4mの遺構である。遺構の東西をそれぞれ他の遺構に切られているため正確な形や大きさは不明だが、残された部分から推定すると長さ2m、幅1.5m前後の大きさの不整椭円形の形をした遺構であったと思われる。

出土遺物 (第185図)

571は肥前系の陶器製溝線皿である。全体に灰釉がかけられているが底部だけは露胎のまま残され、内面見込部には砂目痕が見える。572は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。

土坑254 (SK3254) (第186図)

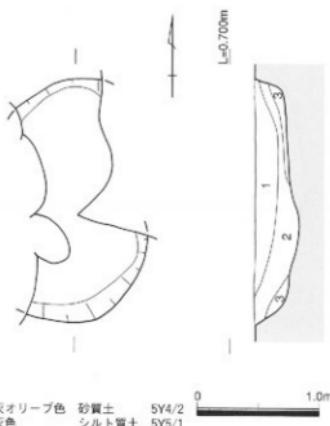
3区のN-12・13グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.4m、幅1.6mの大きさの不整椭円形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.4mの遺構内には微量の炭化物と焼土粒を含んだ砂質土が堆積している。遺構から多量の瓦片が出土していることから、廐棄土坑と考えられる。

出土遺物 (第187図)

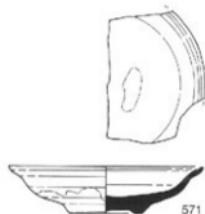
573は口錫装飾が施された肥前系の輪花型打成形の磁器皿である。体部外面は唐草、内面は青海波紋が染付により描かれ、見込み部にも五弁花文が残されている。高台外底面の二重圈線内には変形字が書き込まれている。574は子抱き座像をかたどった陶器製の人形である。575・576は瓦当部に丸ノ中連珠三巴の紋が配された軒丸瓦である。576には釘穴が2カ所見える。577は粘板岩製の硯である。

土坑267 (SK3267) (第188図)

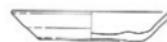
3区のM-15グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約0.7m、幅0.5mの大きさの楕円形の土坑である。断面がU字型に掘り込まれた深さ約0.4mの遺構内には炭化物や焼土粒、礫を含んだ縮まり・粘性共に強いシルト質土が堆積している。



第184図 SK3237実測図



571

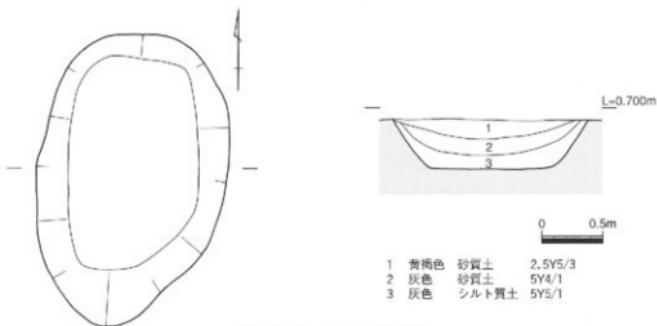


第185図 SK3237出土遺物実測図

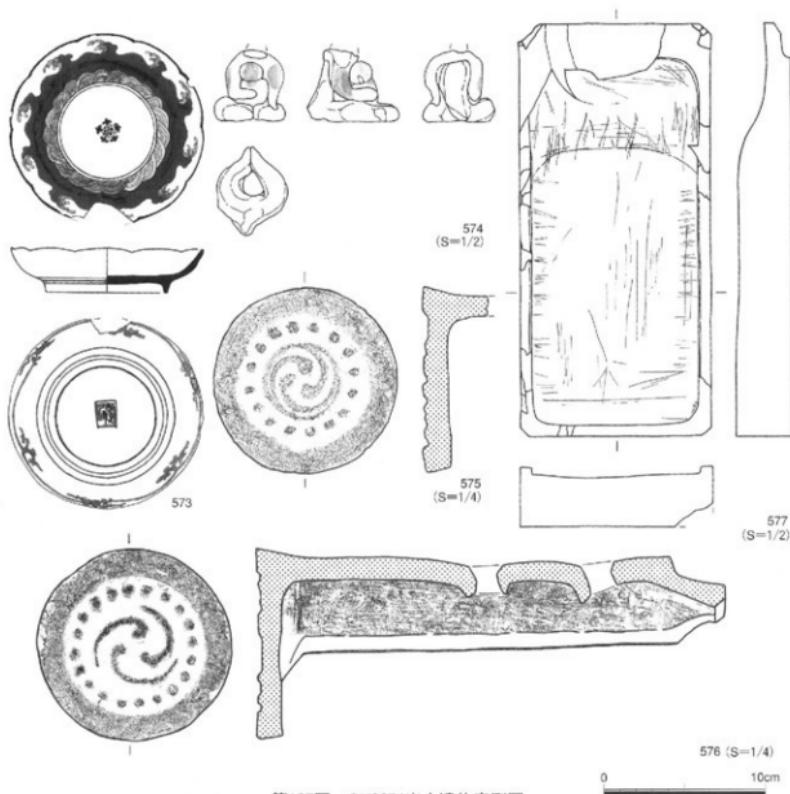


572





第186図 SK3254実測図



第187図 SK3254出土遺物実測図

出土遺物（第189図）

578は肥前唐津の陶器皿である。内面には鉄絵が描かれ、見込部と高台疊付け部分には砂目痕が残されている。

土坑271（SK3271）（第190図）

3区のM・N-16・17グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.2m、幅1.0mの大きさの方形の土坑である。深さ約0.2mの道構は断面が逆台形状に掘り込まれている。

出土遺物（第191図）

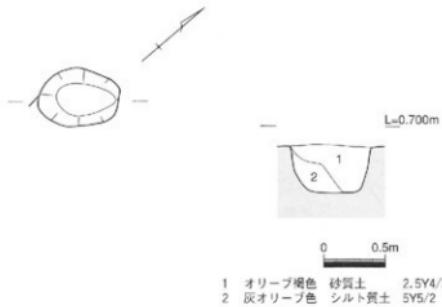
579は肥前系の染付磁器皿である。体部外面には唐草文、内面には墨弾きによる半花文が描かれ、内面見込部にもにコンニャク印判による五弁花文が押されている。高台外底面には鉢が書き込まれている。

土坑275（SK3275）（第192図）

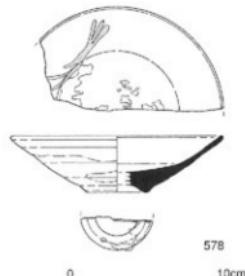
3区のM-17グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ2.3m、幅2.1mの大きさの方形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.4mの道構内には、陶磁器片と共に多量の瓦片が投棄されていたことから、瓦の廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第193・194図）

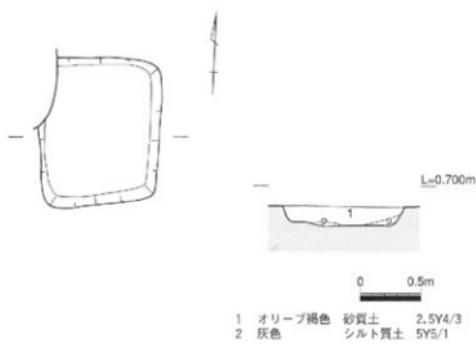
580は磁器の端反碗である。高台疊付部分は釉剥ぎが施され、外面には色絵により宝が描かれている。581は内面見込部に蛇ノ目釉剥ぎが施された肥前系の磁器製端反碗である。体部外面には二重格子、内面には格子がそれぞれ染付によって描かれている。582は口縁部が端反る瀬戸美濃系の染付磁器碗である。体部外面には草花、内面には連弧文、内面見込み部には草が描かれている。高台外底面には鉢が書き込まれている。583は瀬戸美濃系の磁器皿である。内外面には染付により文様が描かれている。584は型打成形で製作された肥前系の磁器皿である。口縁端部には口銷装饰が施され、体部内面には染付により蔓草が描かれている。585は瀬戸美濃系の磁器蓋である。外面には梅花と宝、内面には輪繋ぎが染付により描かれ、内面見込部には「寿」の鉢が書き込まれている。586は肥前系の白磁の合子の身である。外底部に墨書が残されている。587は瀬戸美濃系の陶器製蓋である。高台部分を除き全体に灰釉がかけられ外面には鉄絵により草が描かれている。588は内面見込部に蛇ノ目釉剥ぎが施された肥前系の陶器鉢である。口縁部外面と体部内面にはそれぞれ白泥、鉄釉がかけられている。589は外面に柿釉がかけられた陶器の蓋である。590は鉄釉がかけられ飛泡装饰が施された陶器製の土瓶の蓋である。頂部の摘みは貼付けられている。591は内面全体に鉄釉がかけられた陶器製の蓋である。592は京信楽系の陶器製灯明器台である。施釉部には貫入がはいり、口縁部には煤が付着している。593は京信楽系の陶器製灯明受皿である。外面は露胎のままだが、内面には透明釉がかけられ貫入が入っている。594は外面に鉄釉がかけられた陶器蓋である。外面にはボタン状と細い線状の貼付突帯がつけられている。595は瀬戸美濃系の陶器鉢である。高台部分は露胎のままで内面見込部には砂目痕が残されている。外底面には墨書が認められる。596は備前産の陶器製擂鉢である。内面には10条1単位の擂目がつけられている。597は在地産の大谷焼と思われる陶器製擂鉢である。にぶい赤褐色の胎土を持ち鉄釉がかけられている。内面には9条1単位の擂目が付けられている。598は陶器製徳利である。外面は穿孔が認められる底部を除き鉄釉がかけられている。599は在地産（大谷焼）の陶器鉢である。底部外面を除き鉄釉がかけられ、



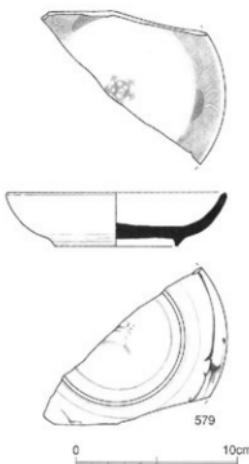
第188図 SK3267実測図



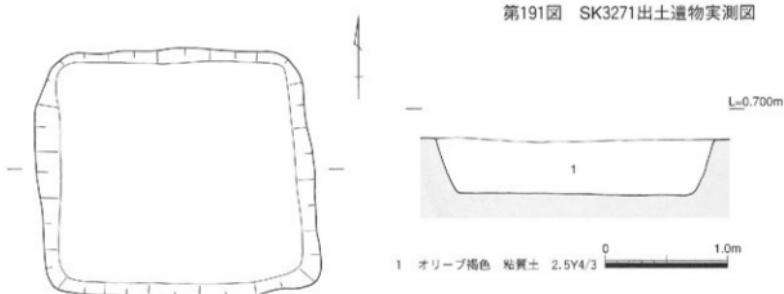
第189図 SK3267出土遺物実測図



第190図 SK3271実測図



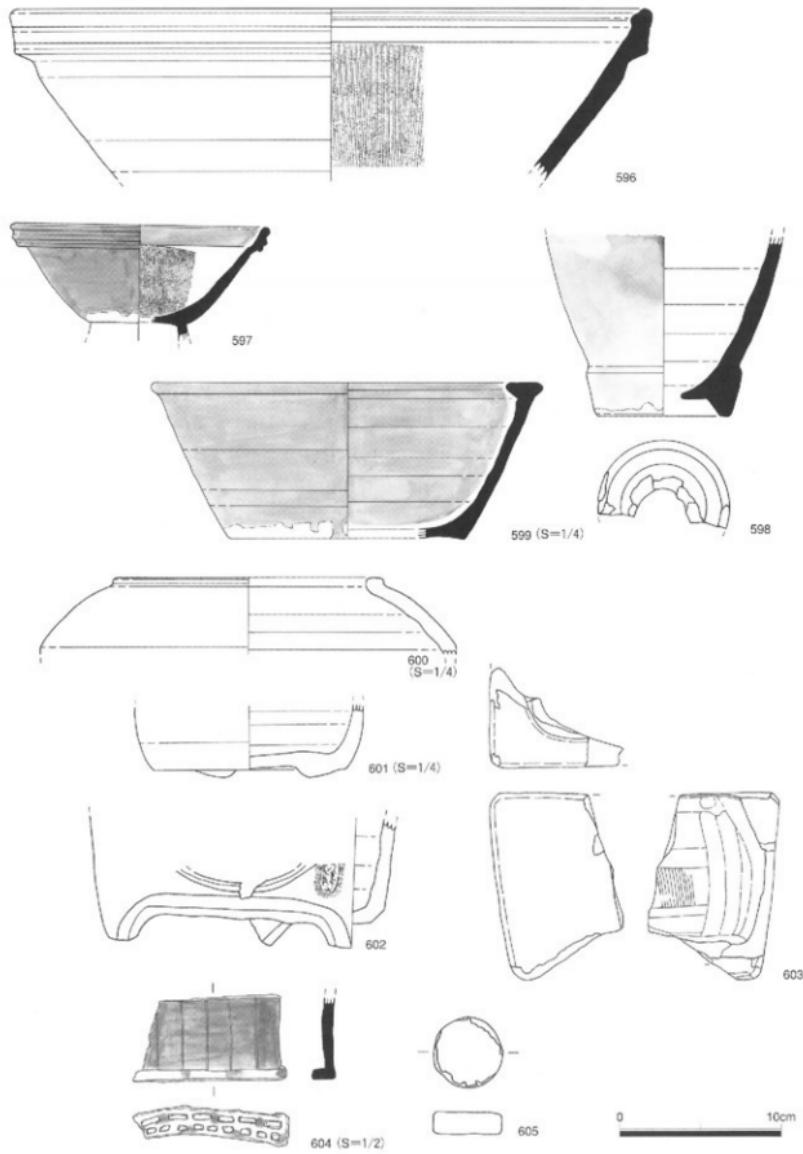
第191図 SK3271出土遺物実測図



第192図 SK3275実測図



第193図 SK3275出土遺物実測図(1)



第194図 SK3275出土遺物実測図 (2)

口縁部には砂目痕が残されている。600は土師質の火消し壺と思われる。601は土師質の堤炉である。602は土師質の涼鉢である。体部外面には刻印がうたれ、内面見込部には砂目痕が見える。603は瓦質の火鉢である。方形型作り成形で製作され外面にはミガキが施されている。604は柿釉、緑釉、銅錫釉による彩色が加えられた陶器製の箱庭道具の橋である。605は瓦質の加工円盤である。

土坑282 (SK3282) (第195図)

4区のD-19グリッドから検出された長軸を北東から南西方向に持つ長さ約1.8m、幅1.3mの大きさの形が不整形な土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内には微量の炭化物や焼土粒に混じって陶磁器や瓦の破片が検出されている。

出土遺物 (第196図)

606は肥前系の陶器碗である。内外面とも鉄釉と白泥による刷毛目装飾が施され、高台盛付部分は露胎のまま残されている。607は肥前燒津の陶器製大皿である。内面には白泥と灰釉による刷毛目装飾が施され、見込部には砂目痕が残されている。608は外面に自然釉が付着した陶器の壺である。609・610は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師器皿である。611は口径978mmを測る土師質の椀である。底部は剥離しているが、内外面には指オサエ痕が多く残され煤が付着している。612は上師質の熔熔である。関西系で接合痕が残されている。

土坑283 (SK3283) (第197図)

4区のD-18グリッドから検出された長軸を北東から南西方向に持つ長さ約1.5m、幅1.1mの大きさの不整形円形の土坑である。深さ約0.2mの遺構の埋土中からは微量の炭化物や焼土粒に混じて瓦片が検出されている。

出土遺物 (第198図)

613は肥前系の染付磁器皿である。体部外面には唐草、内面には墨書き線文が描かれ、内面見込部にはコンニャク印判により五弁花文が押されている。

土坑286 (SK3286) (第199図)

4区のD-18グリッドから検出された直径約0.7mの大きさの円形の土坑である。皿状に掘り込まれた深さ約0.1mの遺構の埋土中には炭化物や焼土粒とともに疊や瓦片が含まれている。

出土遺物 (第200図)

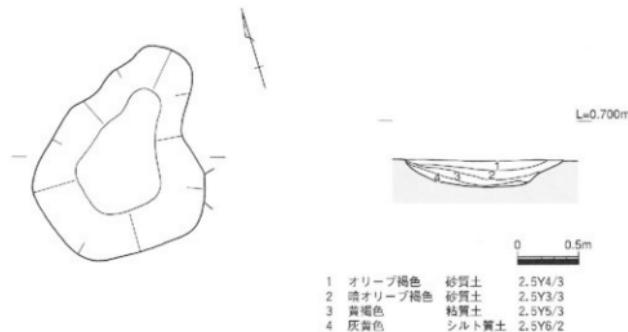
614は粘板岩製の硯である。

土坑289 (SK3289) (第201図)

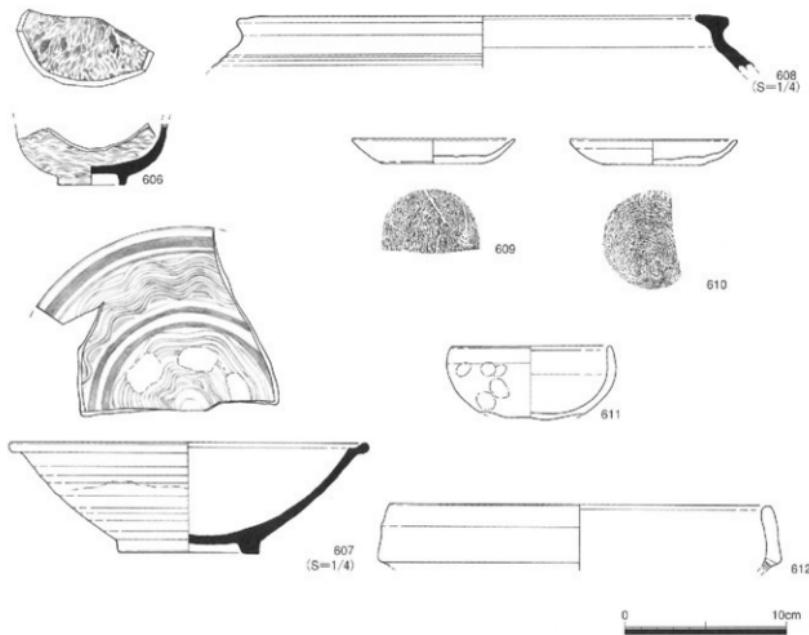
4区のD-18グリッドから検出された直径約0.9mの大きさの不整形圓形の土坑である。断面がU字状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構の埋土中にはブロック状の焼土粒と炭化物が含まれている。

出土遺物 (第202図)

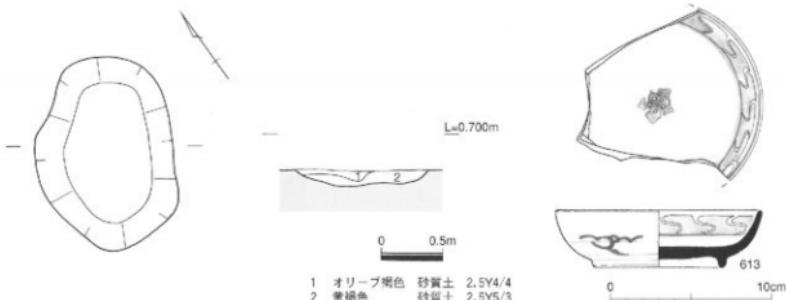
615は木製の連座下駄である。



第195図 SK3282実測図

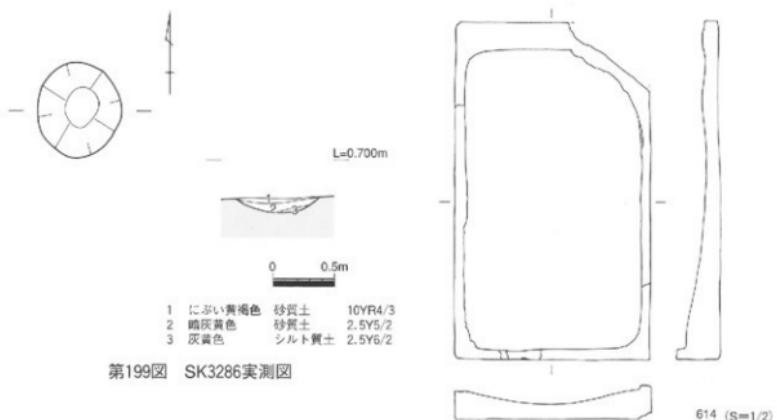


第196図 SK3282出土遺物実測図



第197図 SK3283実測図

第198図 SK3283出土遺物実測図



第199図 SK3286実測図

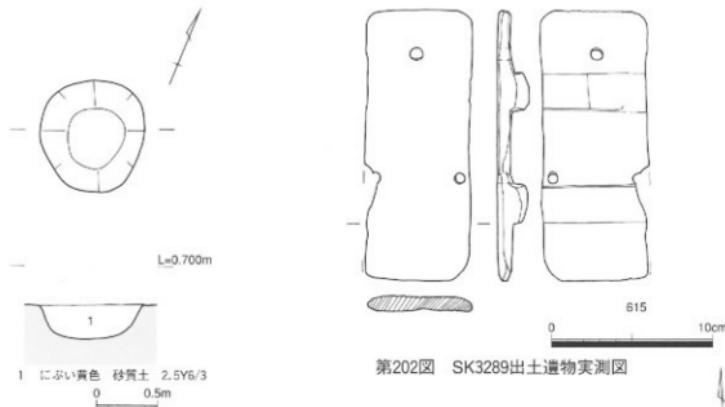
第200図 SK3286出土遺物実測図

土坑 SK3297（第203図）

4区のF-19グリッドから検出された長軸を北西から南東方向にとる長さ約1.8m、幅0.9mの大きさの不整楕円形の土坑である。深さ0.6mを測る遺構の埋土中には少量の炭化物、焼土粒とともに陶磁器片や礫などが含まれている。

出土遺物（第204図）

616は土師質の灯明皿である。内外面ともに煤が付着しているが、特に内面はタール状の濃い煤が部分的に認められる。617は土師質の灯明皿である。口縁には煤が付着し、底部には回転糸切り痕が残されている。618は口径98mmを測る土師質の皿である。底部には回転糸切り痕が残されている。

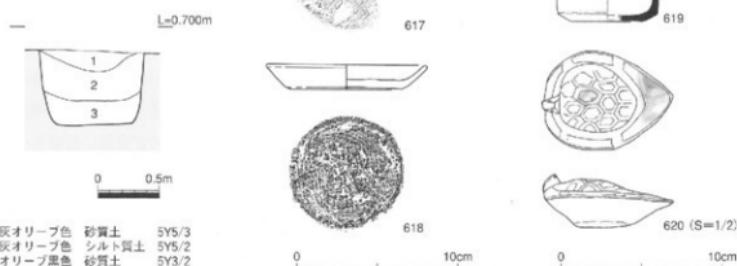


第201図 SK3289実測図

第202図 SK3289出土遺物実測図



第205図 SK3301実測図



第203図 SK3297実測図

第204図 SK3297出土遺物実測図

第206図 SK3301出土遺物実測図

土坑301（SK3301）（第205図）

4区のF・G-19グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.1m、幅1mの大きさの不整円形の土坑である。皿状の断面を持つ深さ約0.2m足らずの遺構の中からは炭化物や焼土粒とともに陶磁器や瓦片、礫が多く検出されている。

出土遺物（第206図）

619は京信楽系の陶器製の合子の身である。全面に灰釉がかけられているが底部だけは露胎のまま残されている。内外面に貫入が多く見える。620は亀をかたどった陶器製の人形である。部分的に綠釉がかけられている。

井戸

井戸 2（SE3002）（第207図）

1区のG・H-6グリッドにまたがって検出された直径約2m、深さ0.9m以上の不整円形の掘り込みのほぼ中央に井戸枠と考えられる円形に組まれた板材が検出された。板材の腐食が進んでいるため断定は出来ないが、他の井戸と同じく木桶を使用した円形桶側式の構造を持つ井戸と考えられる。

出土遺物（第208図）

621は肥前伊万里の磁器碗である。外面には色絵で梅が描かれている。622は瀬戸美濃系の志野の皿である。内面には鉄絵と長石釉で文様が描かれている。623は木製の容器蓋である。624は井戸の木枠である。

井戸 3（SE3003）（第209図）

1区のG・H-8グリッドにまたがって検出された直径約3mの大きさのほぼ円形の掘り込みを持つ遺構である。遺構検出面から約1.1m掘り下げた、掘り込みの中央部からやや西よりの位置で井戸枠に使用された木桶が検出されている。木桶の内部には玉砂利が敷き詰められ、上部の井戸の堆土と考えられる土層の堆積の中には多量の焼土が混入している。調査を途中で断念したため下部の状況は不明であるが、他の井戸と同じく円形桶側式の構造を持つと考えられる。

出土遺物（第210図）

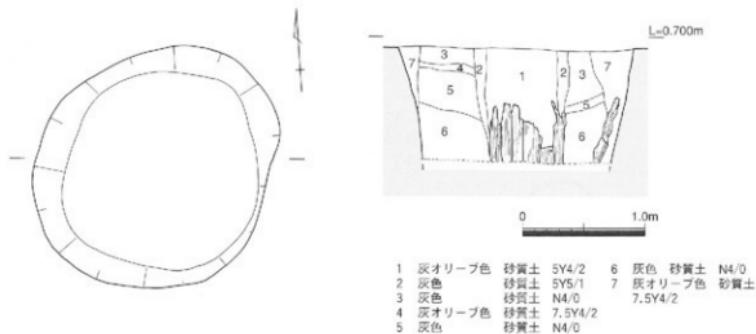
625は京信楽系の陶器碗である。体部外面には灰釉がかけられ染付により山水文が描かれている。626は寛永通宝（古）である。重量は3.36gある。

井戸 4（SE3004）（第211図）

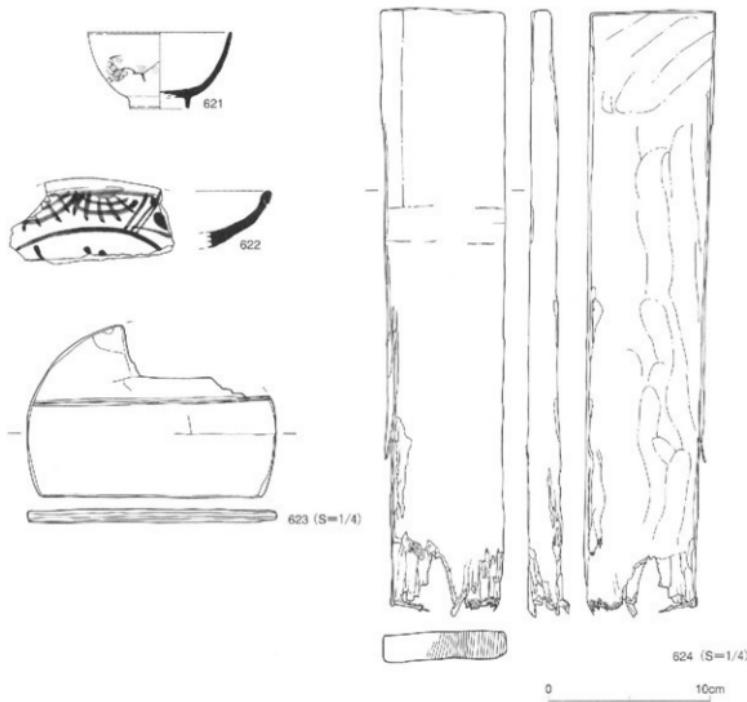
1区のK-3・4グリッドから検出された、直径約1.5mの不整円形の浅い掘り込みの中が、長さ約1.2m、幅1m、深さ0.9mにわたって桶円形に掘り込まれ、底から井戸枠と考えられる木桶が検出されたことから円形桶側式の構造を持つと考えられる。井戸内部には大型の片岩や瓦片が多量に投棄されていた。

出土遺物（第212図）

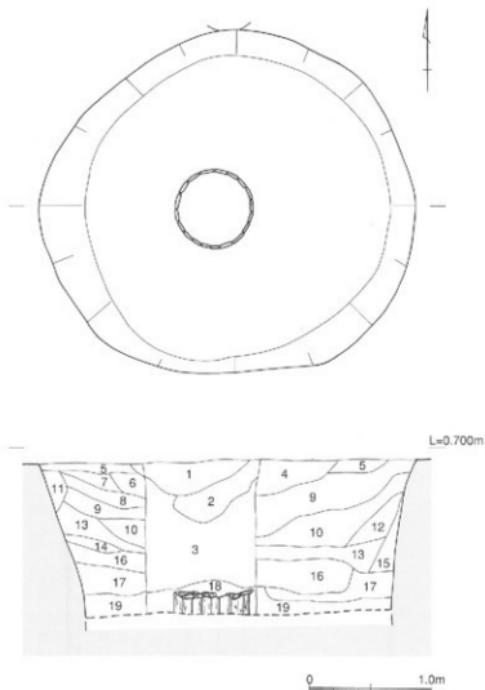
627は体部外面に草文が描かれた肥前の陶胎染付碗である。628は外面に白泥と透明釉による刷毛目装飾が施された肥前系の陶器製香炉である。内面と高台部分は露胎のまま残されている。629は内面に12条1単位の描目がつけられた肥前産の陶器製捕鉢である。630・631は木製の容器蓋又は底板である。632は木製の角形差歎下駄である。棕櫚の鼻緒も残存する。633・634は用途不明の加工木片である。



第207図 SE3002実測図



第208図 SE3002出土遺物実測図



1	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2	11	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2
2	にぶい赤褐色	砂質土	5YR4/3	12	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
3	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2	13	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
4	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2	14	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
5	鷺オリーブ色	砂質土	5Y4/3	15	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
6	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2	16	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
7	鷺オリーブ色	砂質土	5Y4/3	17	灰色	砂質土	7.5Y4/1
8	鷺オリーブ色	砂質土	5Y4/3	18	灰色	砂質土	7.5Y4/1
9	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2	19	灰色	砂質土	7.5Y4/1
10	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2				

第209図 SE3003実測図



第210図 SE3003出土遺物実測図

柱穴

柱穴 37 (SP3037)

I区中央部やや南東よりE・F-8グリッドに位置する直徑0.4mを測る円形遺構である。内部には大きな礎石が見える。

出土遺物 (第213図)

635は石臼(搗臼)である。石材は砂岩である。

柱穴 38 (SP3038)

1区のF-9グリッドで検出された直径0.55mの大きさのほぼ円形の遺構である。SK3020とSK3022の2つの遺構と重なりあっている。

出土遺物 (第213図)

636は肥前唐津の陶器皿である。口縁部外面と内面全体に灰釉がかけられ、内面見込部には胎土目痕が4カ所に見える。

柱穴 73 (SP3073)

1区のG-3・4グリッドにまたがって検出された直径0.6mの不整円形の柱穴である。深さ0.3mの遺構の埋土中には炭化物と焼土粒を少量含んだ砂質土が堆積している。

出土遺物 (第213図)

637は備前系の陶器製擂鉢である。口縁が楕円形で擂目単位は10条を測り、口縁上端と頭部に重ね焼の溶着痕が見られる。また、口縁部外面には「|」「井」が刻印されている。15C末から16C中頃のものである。

柱穴 79 (SP3079)

1区のG-8グリッドから検出された0.3mのほぼ円形の遺構である。約0.1mの深さしかない遺構の埋土には焼土が多量に混入している。

出土遺物 (第213図)

638は肥前唐津の陶器製天日茶碗である。橙色の胎土で、外面の下半部が露胎のまま残されている以外、全体に灰釉がかけられ内面には自然釉も付着している。639は堅く焼き締められ塗土が施された備前の陶器製灯明皿である。

柱穴 85 (SP3085)

1区のG-4グリッドで検出された直径約0.2mの大きさの円形の遺構である。深さ0.1mの浅い遺構の埋土には炭化物や焼土粒を多く含む砂質土が堆積している。

出土遺物 (第213図)

640は肥前系の磁器製溝縁碗である。体部外面には葡萄文と2本の圓線、高台には圓線がそれぞれ染付で描かれている。高台疊付け部分は無釉で砂目痕が残されている。

柱穴344 (SP3344)

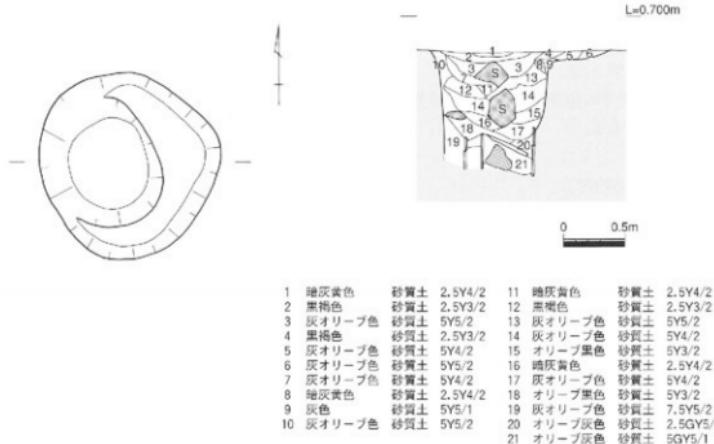
3区のJ-K-13グリッドにまたがって検出された直径約0.5m、深さ0.2mの大きさの円形の遺構である。遺構の埋土中には炭化物や細かな上器片を含んだ砂質土が堆積している。

出土遺物 (第213図)

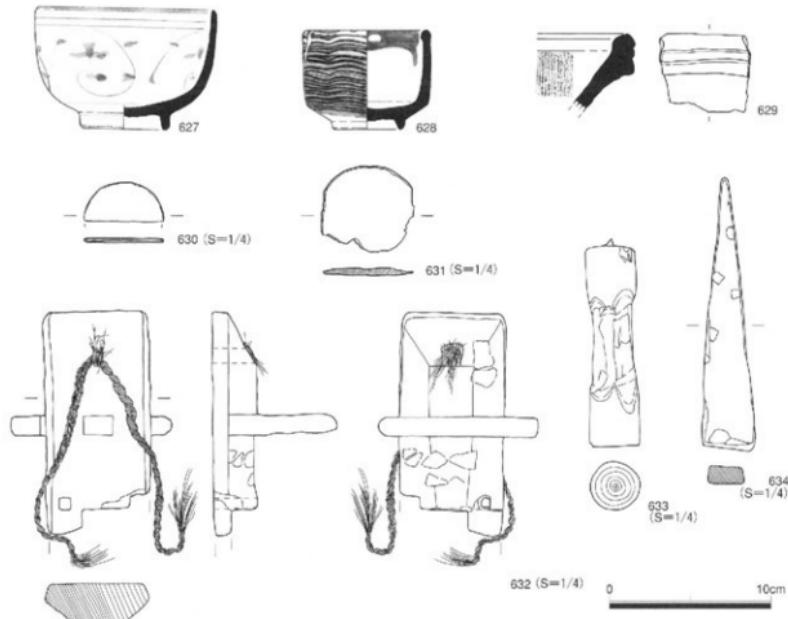
641は体部内面に染付により圓線と流水が描かれた肥前系の磁器製小皿である。高台疊付け部分は露胎のまま残されている。

柱穴378 (SP3378)

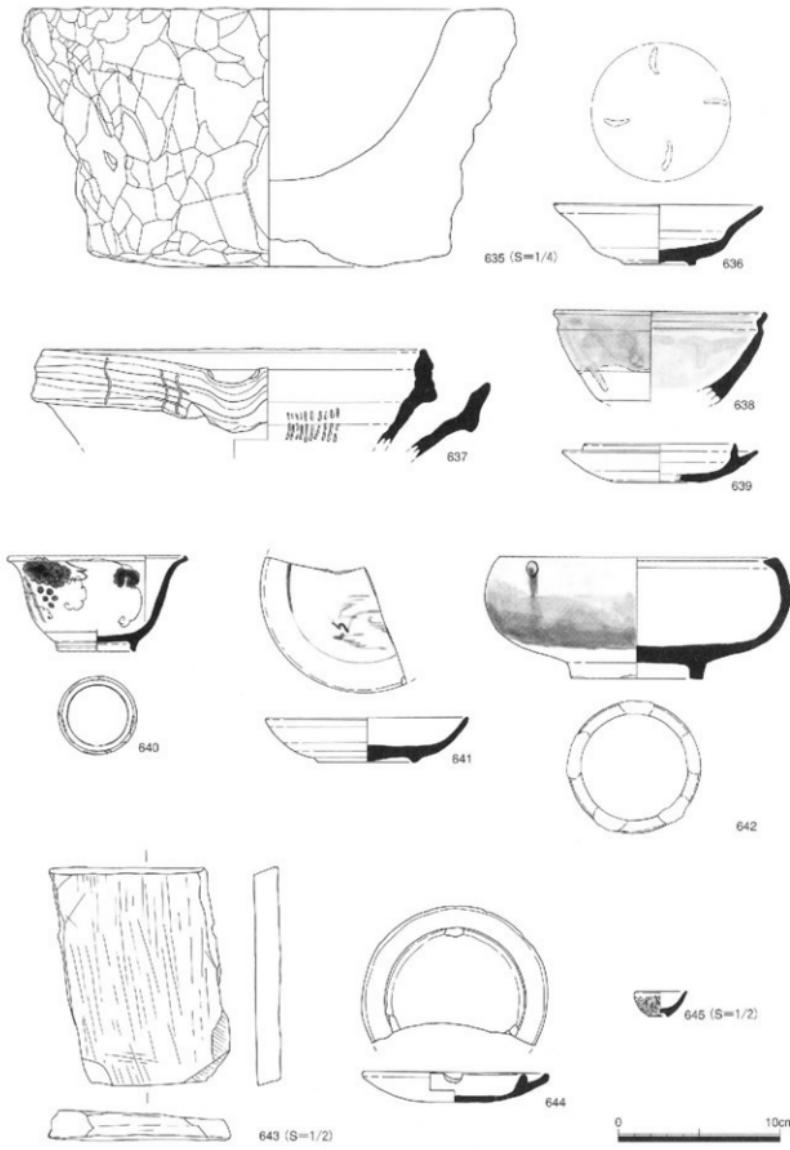
3区のJ-14グリッドから検出された長軸の方向を東西に持つ長さ約0.5m、幅0.3mの大きさの楕円形の遺構である。深さが0.1m足らずの遺構内には炭化物や焼土粒、礫を含んだ緻まり粘性共に強い砂質土が堆積している。



第211図 SE3004実測図



第212図 SE3004出土遺物実測図



第213図 SP 出土遺物実測図

出土遺物（第213図）

642は肥前系の陶器鉢である。口縁部外面に粘土貼付により擂座が設けられて、内面見込部と高台疊付部分には砂目痕が見える。

柱穴475（SP3475）

3区のL-16グリッドから検出された長軸の方向を東西に持つ長さ約0.4m、幅0.2m、深さ0.2mの大きさの箱円形の遺構である。遺構内には少量の焼土粒や炭化物の他に礫や瓦片などを含む縛まり、粘性とも強い砂質土が堆積している。

出土遺物（第213図）

643は粘板岩製の砥石である。

柱穴561（SP3561）

4区のF-8グリッドから検出された直径約0.5mの大きさの円形の遺構である。深さ約0.2mの遺構の埋土中には粒子の細かい炭化物や焼土粒とともに小礫や瓦片を含む縛まりの強い砂質土が堆積している。

出土遺物（第213図）

644は備前系の陶器製灯明受け皿である。塗土の痕跡が見られ、内外面には煤が付着している。

柱穴585（SP3585）

4区のH-20グリッドから検出された直径約0.3mの大きさの円形の遺構である。深さ約0.2mの遺構の埋土中には粒子の細かな炭化物や焼土粒とともに小礫や瓦片を含む縛まりのある砂質土が堆積している。

出土遺物（第213図）

645は肥前系の磁器製紅皿である。外面には壓押により連弁がつけられ釉がかけられている。高台疊付け部分は露胎のまま残されている。

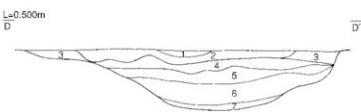
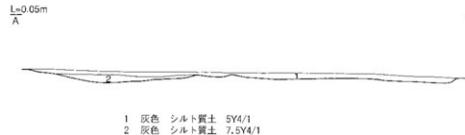
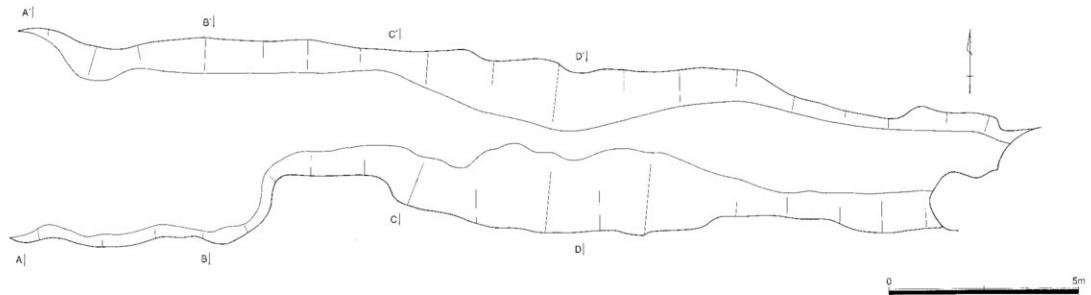
不明遺構

不明遺構 1（SX3001）（第214図）

1区から3区の南壁に沿って検出された東西方向の遺構である。遺構の長さは約30m余り、幅は最も広いところでは5m程あるが、平面は不整形である。遺構の深さは中央の最も深いところで約0.7mほどあるが、両端に向かうほど徐々に浅くなっている。東側は端近くでも約0.3m近い深さがあるが、西側では底面が徐々に持ち上がってそのまま収束している。遺構内にはグライ化した粘土質の土壤が堆積し、陶器類を中心とする遺物のなかには、漆器をはじめとする多くの木製品が含まれていることから當時滞水状態にあったものと思われる。遺構の西端はわずかではあるが北からのる溝SD3005と接している。

出土遺物（第215～224図）

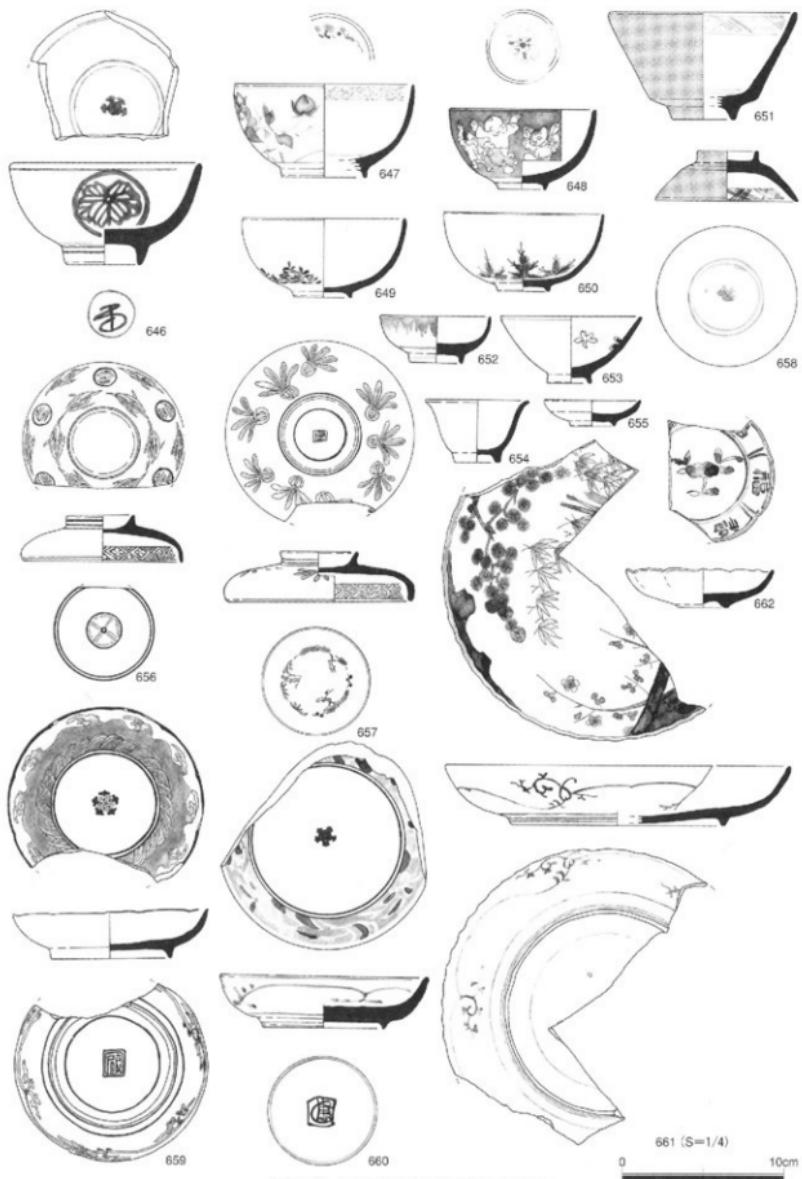
646は肥前系の染付磁器碗である。体部外面には丸の中桐文がコンニャク印判で押され、高台外底面の團線内には変形文字が書き込まれている。また、内面見込部の二重團線内にはコンニャク印判で五弁花文が押されている。647は肥前系の磁器碗である。外面には牡丹花文、内面には四方桙文がそれぞれ染付により描かれている。648は肥前系の色絵磁器碗である。外面には唐子、内面見込部の二重團線内には花弁が描かれている。1780から1810年のものである。649は磁器碗である。650は体部外面に若松文



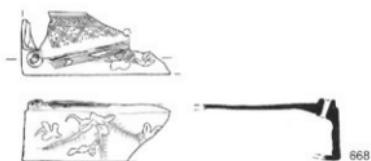
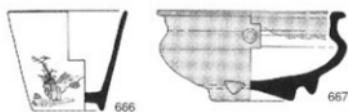
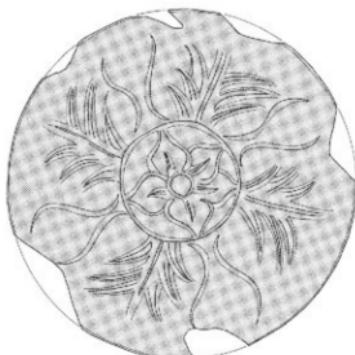
第214図 SX3001実測図



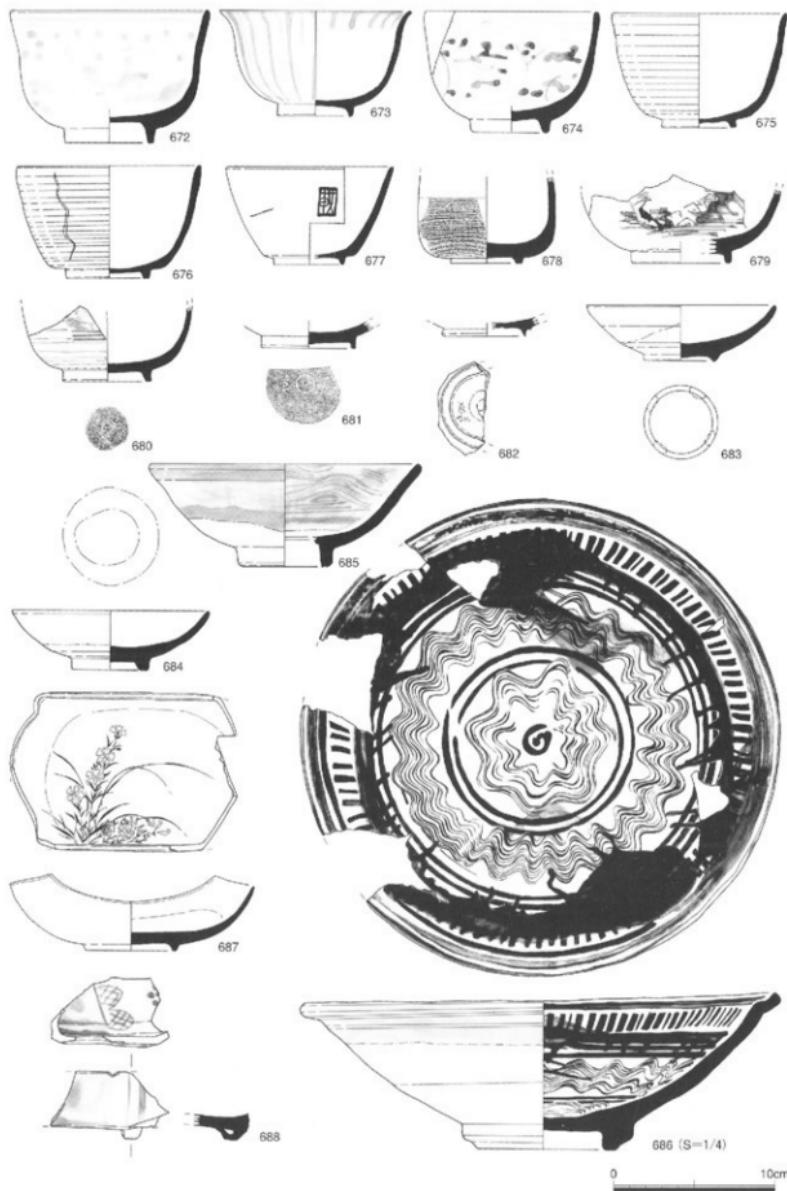
が描かれた肥前系の染付磁器碗である。651は肥前系の外青磁の中碗である。体部内面は四方櫛文、内面見込部には二重圓線が染付で描かれた18C中葉から末のくらわんか茶碗である。652は口徑67mmを測る肥前系の磁器製の小杯である。体部外面には染付により雨降り文が描かれている。653は肥前系の色絵の磁器小碗である。内面には赤と白の小さな花が交互に描かれている。654は口縁部が端反る口徑63mmを測る肥前系の磁器製小杯である。高台足付け部分は釉が剥ぎとられ砂が付着している。655は口徑60mmを測る肥前系の白磁の紅皿である。656は肥前系の染付磁器碗の蓋である。外面には寿字雲運散らし文、内面の口縁部には四方櫛、見込部の二重圓線内には丁字花文が描かれている。657は肥前系の染付磁器碗の蓋で、外面には羽根、内面の口縁部には四方櫛文、見込部の二重圓線内には松竹梅が描かれている。また高台外底面の二重方形枠内には変形字が書き込まれている。658は肥前波佐見の磁器製小碗の蓋である。青磁染付で口縁部内面に四方櫛文が描かれ、内面見込部の二重圓線内にはコンニャク印判による五弁花文が押されている。659は肥前系の染付磁器皿である。型打ち併用の輪花形で、口縁端部には口銷が施されている。体部外面は唐草文、内面は波文、内面見込部は五弁花文が描かれている。また高台外底面の二重圓線内には変形字の銘が書き込まれている。1670年代から17C初頭のものである。660は肥前系の染付磁器皿で、体部外面には唐草文、内面の口縁部付近には草花文が描かれている。また、内面見込部にもコンニャク印判により五弁花文が押され、高台外底面には変形字の銘が書き込まれている。661は型打ち併用で製作された肥前系の輪花形の磁器製大皿である。体部外面には唐草文、内面には松竹梅文がそれぞれ染付で描かれている。高台足付部分には釉剥ぎと砂付着痕が見られ高台外底面にはハリ支えの痕が見られる。17C後半から18C初頭のものである。662は肥前系の染付磁器小皿である。型打ち併用の輪花形で口縁部内面には区画内に「福」の文字が書き込まれ、見込部の圓線内には花卉が描かれている。窯ノ辻窯で作られた初期伊万里で1630から40年のものである。663は肥前系の染付磁器皿である。芙蓉手で草花が描かれている。有山のヨーロッパ向け製品で1660から80年のものである。664は肥前系の磁器皿で、内面には山水（鉄絵）が描かれている。高台は高く外底面には蛇ノ目釉剥ぎが施されている。665は口径286mmを測る肥前系の青磁大鉢である。高台足付部分のみ露胎で、内面には大振りの花びらと葉がヘラ彫りされている。666は肥前系の磁器製猪口である。口縁端部には口銷が施され、外面には染付で山水が描かれている。667は肥前系の三足の青磁香炉である。底部外底面は無釉で重ね焼きの痕が見られる。668は模型で貼合せ成形で製作された肥前系の磁器製色絵水滴である。上面の色絵は金彩も残り華やかであるが、側面は赤彩以外は退色している。669は肥前系の磁器製小瓶である。板作りによる貼合せによって製作され六角の台形をしている。外面には染付により松竹梅文と唐草文が描かれている。漆継ぎ痕がある。670は肥前系の磁器製油壺である。胴丸形で全体に貫人が入り染付によって蔓草文が描かれている。17C後半のものである。671は肥前系の磁器製小瓶である。らっきょう形で蛸唐草文が染付によって描かれている。672は肥前の陶胎染付碗である。全面に貫人が入っている。673は瀬戸美濃系の陶器碗である。外面と内面上部には呉須と鉄釉による麦藁手が描かれている。674は肥前系の陶器碗である。外面は呉須染付の唐草文で全面に貫人が見られる。675は瀬戸美濃系の陶器碗である。外面は常線を陰刻後、釉がかけられているが、底部は露胎のままである。676は瀬戸美濃系の陶器碗である。外面には帶線と縱方向の波線が數本等間隔に陰刻され、その上から釉がかけられている。高台部分は露胎で外底面には刻印がうたれている。677は外面に上絵による彩色が施された京信楽系の陶器碗である。底部外面以外は釉がかけられ全体に貫人が入っている。678は瀬戸美濃系の陶器製鍍茶碗である。黒釉釉がかけられ、回転施文が施されている。679は京信楽系の陶器碗である。



第215図 SX3001出土遺物実測図(1)

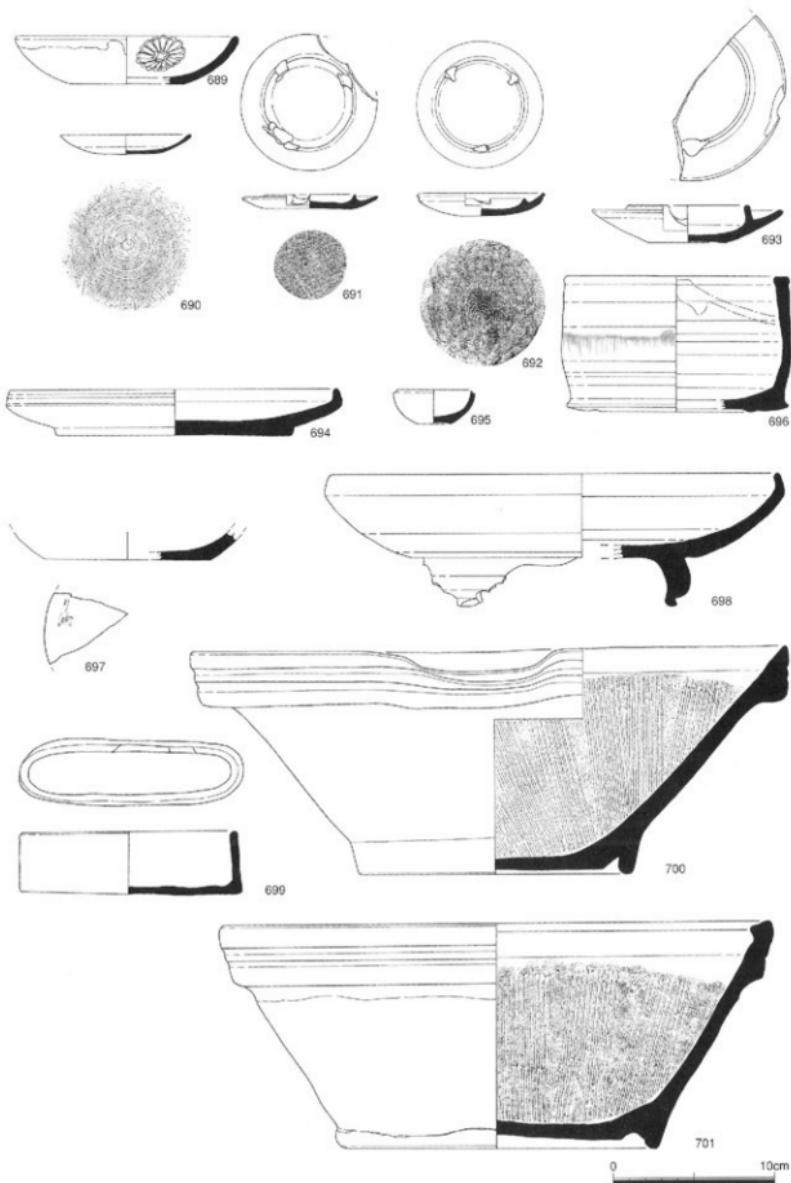


第216図 SX3001出土遺物実測図 (2)

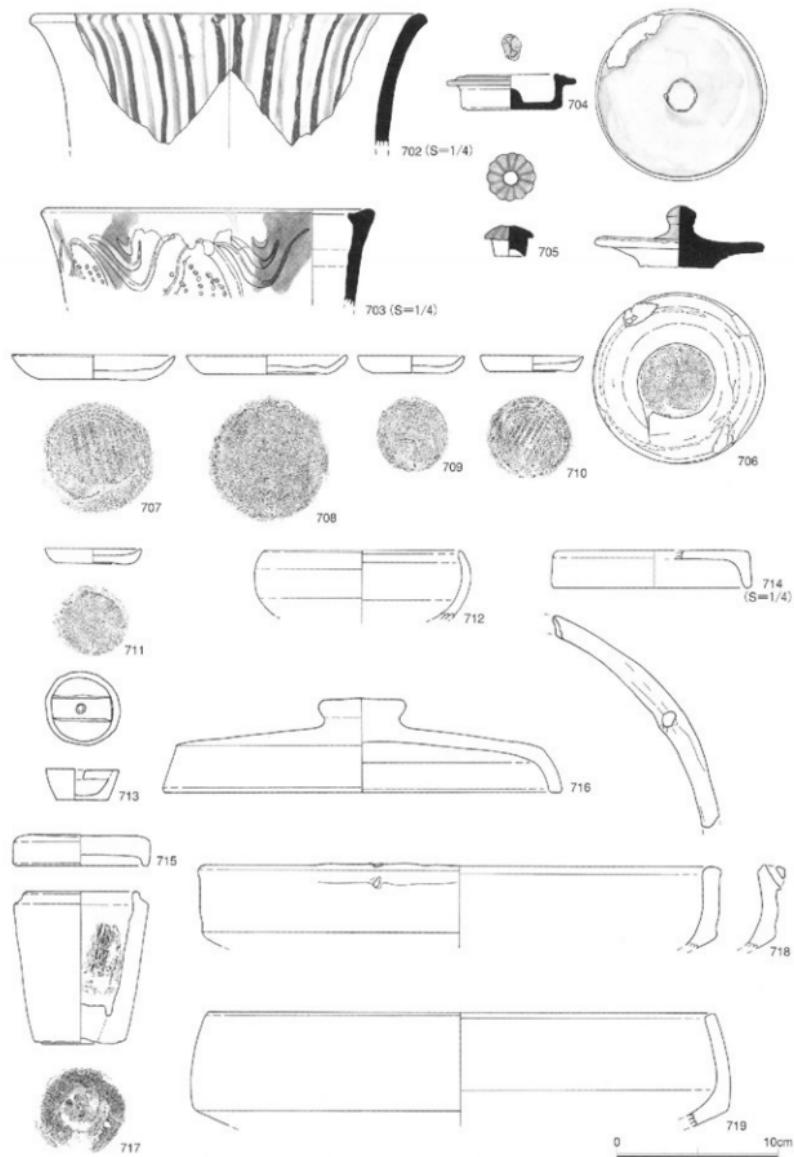


第217図 SX3001出土遺物実測図 (3)

外面には呉須により山水が描かれ、高台部分は露胎のまま残されている。680は肥前系の陶器碗である。京焼風の作りで外面には山水が描かれ、高台外底面には円に「新」の印刻がうたれている。681は肥前系の京焼風陶器碗である。高台部分は露胎で、外底面には円刻と「清水」の刻印がうたれている。682は京信楽系の陶器碗である。内面は底部の一部に釉がかけられているが、外面は露胎のまま残されている。高台外底面には墨書があるが、内容は不明である。683は肥前系の陶器皿である。高台部分は削り出し高台で足付には胎土目痕が4カ所残されている。底部外面以外は全面に釉がかけられている。684は内面に蛇ノ目釉剥ぎが施された肥前系の陶器皿である。青緑釉がかけられ、見込部と高台足付部分には砂が付着している。685は肥前系の陶器鉢である。内面には鉄釉と白泥により刷毛目文様が描かれ、見込部には蛇ノ目釉剥ぎが施されている。底部外面は無釉で高台には砂が付着している。686は肥前唐津の陶器製大鉢である。内面は白泥による刷毛目装飾が行われ、その上から鉄釉と銅緑釉の二彩が流しがけられている。687は輦轆と型作りの併用で製作された京信楽系の陶器皿である。内面には呉須と鉄釉により草花が描かれている。また、高台部分は露胎のまま残され、内面見込部には目痕が三点残されている。688は瀬戸美濃系の陶器製向鉢である。銅緑釉、鉄釉、長石釉で装飾された青織部で、底部には半環足が貼り付けられている。689は京信楽系の陶器製灯明皿である。口縁部外面と内面全体に灰釉がかけられ、内面には菊文が貼付けられている。690は備前系の陶器製灯明皿である。内面には朱泥が施され、口縁部は全体に灯芯油痕が顯著に残されている。691は全面に朱泥が施された備前系の陶器製灯明受皿である。692は朱泥が全面に塗られた備前系の陶器製灯明受皿である。693は京信楽系の陶器製灯明受皿である。内面全体は灰釉が施されているが外面は露胎のまま残されている。694は備前の陶器鉢である。全体がよく焼き締められており、火燐がある。全面に朱泥が施されている。695は口径46mmを測る陶器製の合子の身である。灰釉がかけられ貫入が見える。696は瀬戸美濃系の陶器製灰落としてある。口縁部には敲打痕があり、内面見込部には重ね焼きの痕跡が見られる。697は緻密な淡黄色の胎土と灰釉が施された京信楽系と思われる陶器である。底部のみの小片のため器種は不明である。外面底部に墨書き「り油」と書かれている。698は外面に塗土が施された備前系の陶器の足付中鉢である。699は瀬戸美濃系の陶器製盤である。外面には表裏文様が残るが退色が激しく不明である。700は高台と片口を有する備前系の陶器製擂鉢である。内面には8条1単位の擂目が付けられているが、見込部にもクロスの擂目が見られる。外面には重ね焼きの熔着痕が残されている。701は堺明石系の擂鉢である。底面には貼付けによる高台が残され、内面には10条1単位の擂目が付けられているが、見込み部にもクロスの擂目が見られる。702は呉須と鉄絵による麦菴手が内外面に描かれた瀬戸美濃系の陶器鉢である。703は瀬戸美濃系の灰釉流水文水差である。外面には除刻により流水文が描かれ、灰釉のほかに綠釉もかけられている。704は関西系の陶器蓋である。内面には鉄釉がかけられているが外面は露胎のままである。705は型作りにより製作された陶器蓋である。本体は菊花形で、上面には綠釉がかけられている。706は陶器製の蓋である。天井部には摘みが貼付けられ、鉄釉がかけられている。口縁部内面には重ね焼きの痕跡が認められる。707は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の小皿である。底部は糸切りの後に板目による整形が行なわれている。708は上師質の灯明皿である。底部には回転糸切りの後にナデ調整が施されている。胎土には長石、砂岩、雲母が含まれ、口縁部には砂が付着している。709は上師質の楕小皿である。底部の切り離しには回転糸切り技法が使用され、灯心油痕が見られない。同様のはば完形の土師皿が27枚まとめて出土している。710は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の楕小皿である。底部は回転糸切りの後、板目による整形が行なわれている。灯

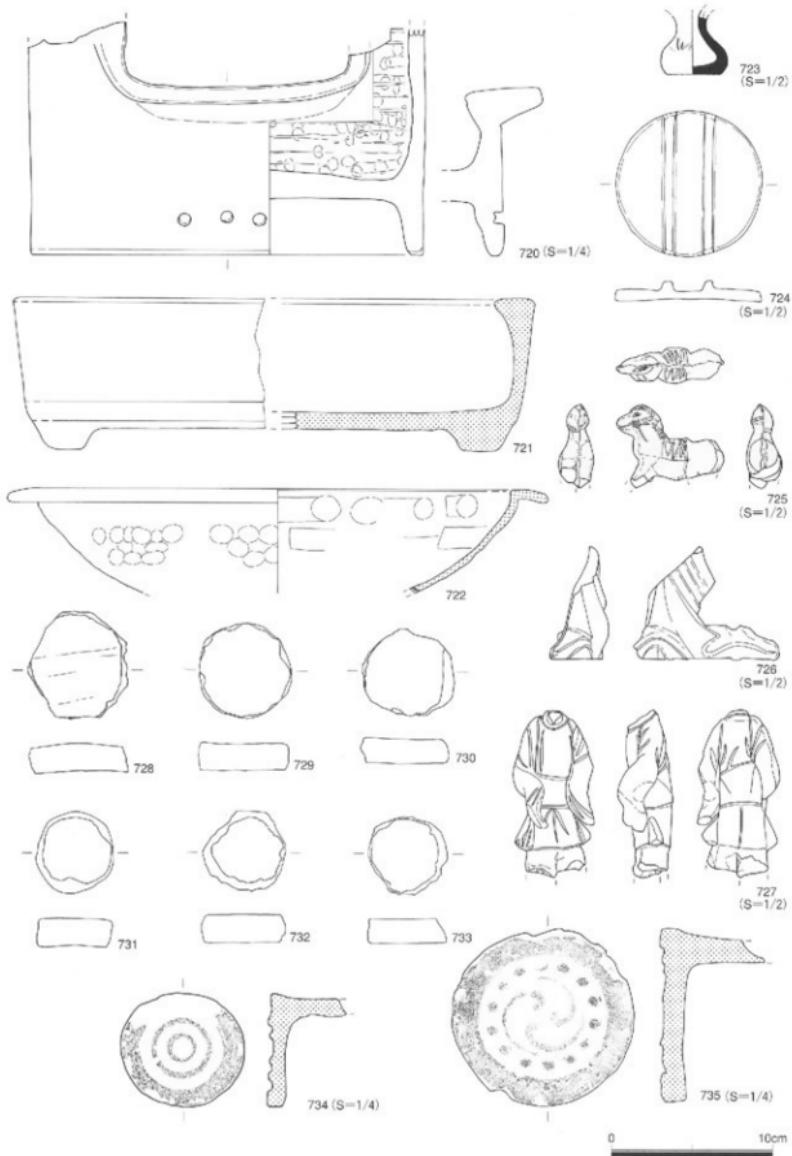


第218図 SX3001出土遺物実測図(4)

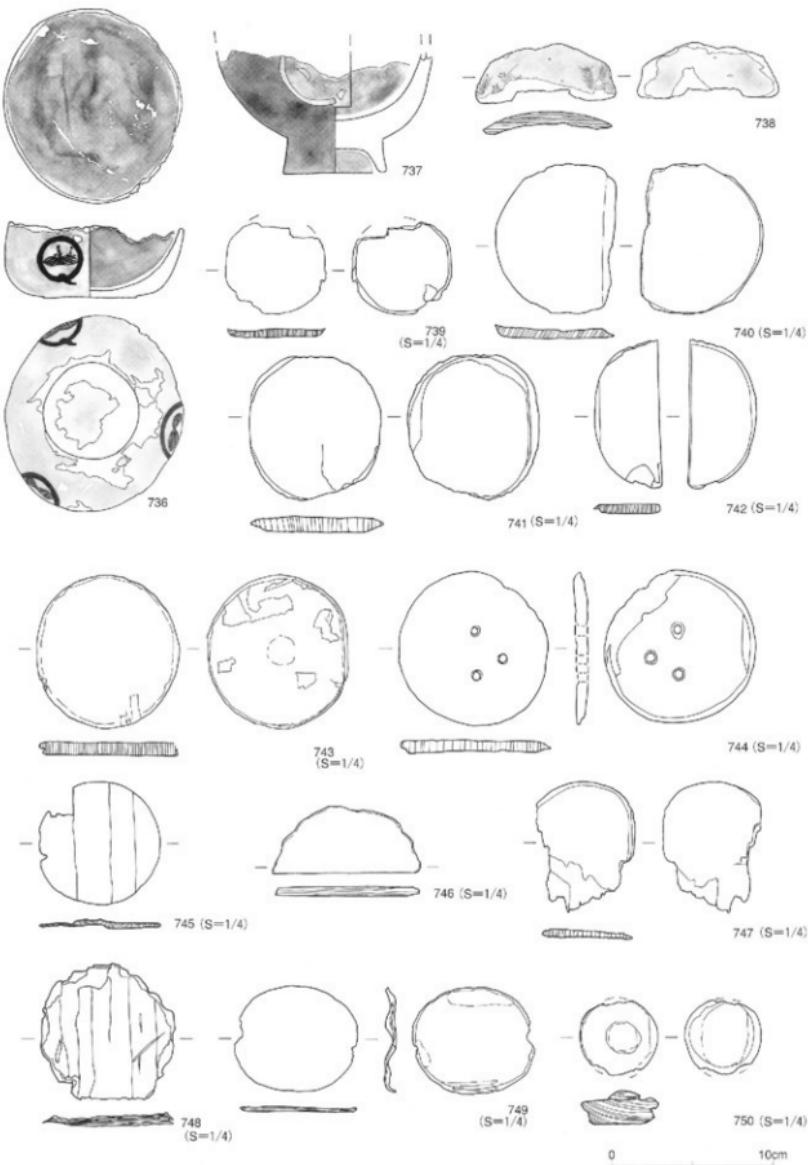


第219図 SX3001出土遺物実測図(5)

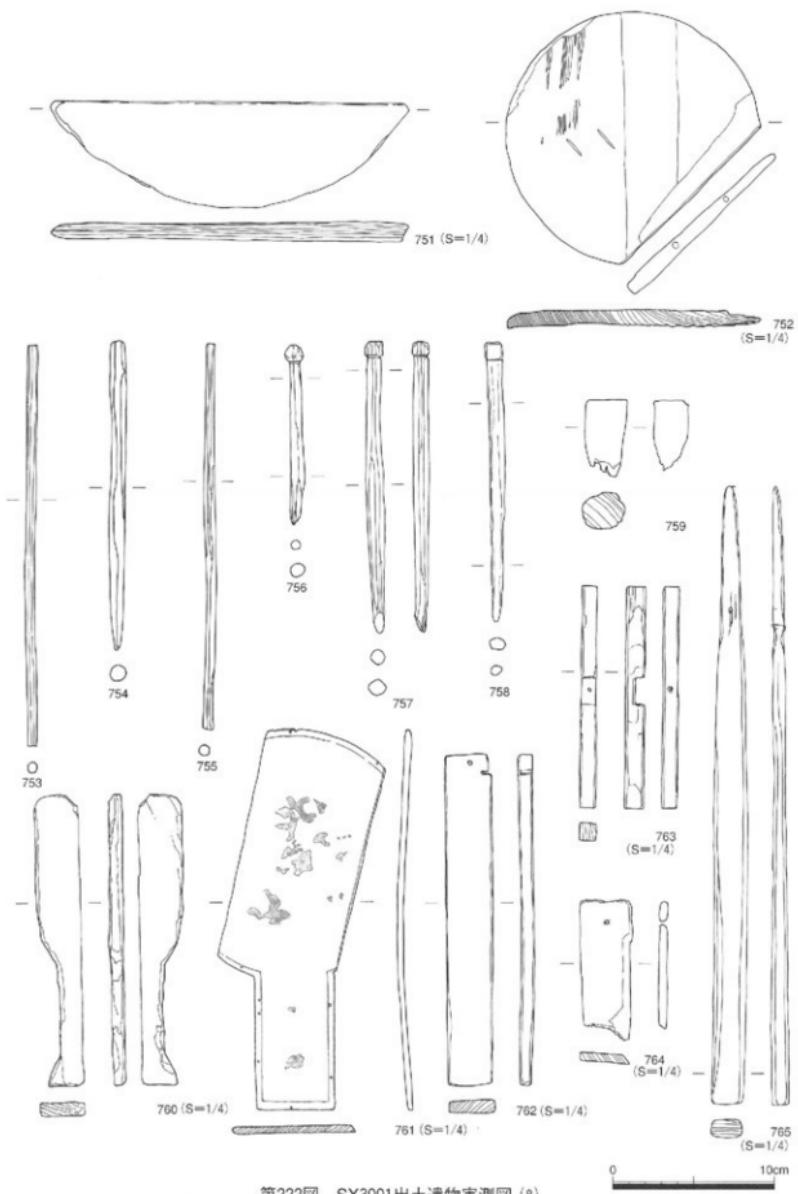
心油痕は見られない。711は底部に回転糸切り痕が残された土師質の極小皿である。灯芯油痕は見られない。同様のはぼ完形の上部皿が29枚まとめて出土している。712は土師質の椀である。底部内外面には煤の付着が顕著である。713は型作り成形で製作された土師質の秉燭である。上部には5mmの穴があけられ、煤が付着している。714は土師質の火消壺の蓋である。内面には煤が付着している。715は内面に布目痕が残された泉州系の土師質の焼塙壺の蓋である。16C中葉頃からのものである。716は土師質の火消壺の蓋である。型作りと回転台により製作され胎土はにぶい褐色で、貼付けによる摘みが設けられている。717は板作り成形により製作された土師質の焼塙壺である。内面には布目痕が残されている。718は型作り成形で製作された閩西系の土師質の焙烙である。口縁部が内傾し、口縁端部には外面に向けて貫通する穴が設けられているが、穴が使用された痕跡は認められない。底部外面は全体に煤が付着している。719は型作り成形で製作された閩西系の土師質の焙烙である。口縁部が内傾し外面全体には煤が付着している。720は型作りで製作された土師質の風炉である。正面には底部に並んで3口穿孔がある。内面には煤が付着し指オサエ痕が多く残されている。721は方形の板作り貼合わせ成形で製作された瓦質の火鉢である。隅に半球状の脚が貼付けられている。722は瓦質の焙烙である。口縁部が外折れで外面に指オサエがある。外面上部に煤が付着している。723は外面に染付による草が描かれた陶器のミニチュア容器である。724は型作り成形で製作された土製のままごと道具の瓶蓋である。725は土製の馬の人形である。型作り貼合せで製作され全体が赤彩されている。726は土製の人形である。型作り成形で製作され、内面には雲母がたくさん付着している。727は陶器製の人形である。墨又は煤が付着している。728は壺の破片を再加工したと思われる陶器製加工円盤である。729~733は瓦片を再加工した加工円盤である。734は瓦当部に丸ノ中二ツ輪の紋が配された軒丸瓦である。735は瓦当部に丸ノ中連珠三巴の紋が配された軒丸瓦である。736は木製の漆椀である。高台部は欠損しているが、外面は黒漆で3方向に文が描かれ、内面は赤漆で塗り分けられている。737は高台が高い木製の腰丸椀である。内外面とも赤漆が塗られ、外面には黒漆による文が3方向に描かれている。738は木製の椀の一部である。内外面には赤漆が塗られ、外面には黒漆により松文様が描かれている。739~750は木製の曲物の蓋である。739は長径82mmを測る。740は長径135mmを測る。741は長径119mmを測る。742は長径122mmを測る。743は柵目取りで、長径124mmを測る。744は長径126mmを測る。中央部3ヶ所に長径7mmの穿孔がある。745は長径100mmを測る。746は長径120mmを測る。747は長径107mmを測る。748は長径110mmを測る。749は長径100mmを測る。外周には1mm弱の段がついている。750は長径62mmを測る。上面中央には摘みと思われる突起が見える。751は直径292mmを測る木製の桶である。752は直径208mmを測る木製の曲物の蓋である。把手痕と側面に接ぎ合わせの埋釘穴が2カ所に見える。753~758は木製の箸である。751は長径188mmを測る。756は長径160mmを測る。757は長さ177mmを測る。片側先端が鋭角に切断されている。759は直径26mmを測る木製の栓である。760は全長238mmを測る木製の箆である。761は木製の箆箱である。表面には黒漆が付着し、周囲には釘穴が見えている。762は木製の建具の部材であろうか。釘穴が1カ所に見えている。763は建具部材である。中央部に釘穴が1カ所ある。764は不明加工木片である。1カ所に穿孔があけられている。765は長径506mmを測る木製の柄杓の柄である。穿孔が1カ所に見られる。766は全長214mmを測る角形の木製の差歎下駄である。表面には黒漆塗り痕が見られ、表面には丸の中「京」の焼印がある。767は全長207mmを測る角形の木製の差歎下駄である。棕櫚の鼻緒が残存している。768は全長206mmを測る角形の木製の差歎下駄である。769は全長212mmを測る角形の木製差歎下駄である。770は全長218mmを測る角形の木製の割り下駄である。771は全長234mmを測る角形の木製の連歎下



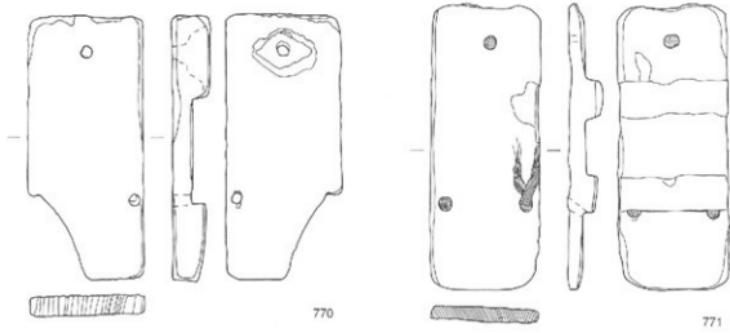
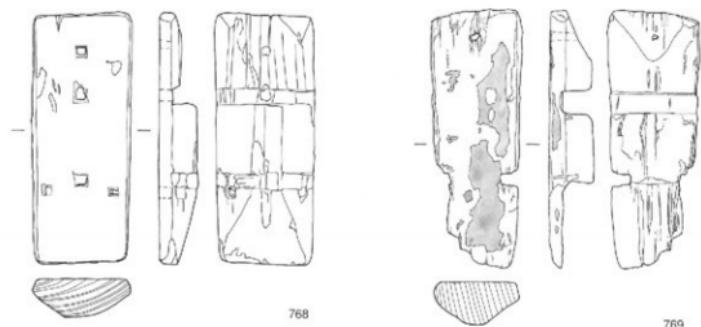
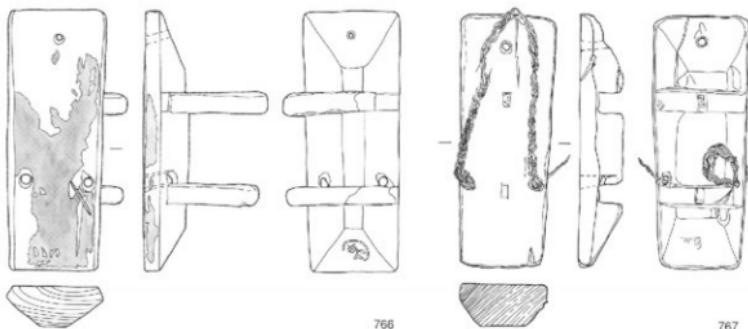
第220図 SX3001出土遺物実測図 (6)



第221図 SX3001出土遺物実測図 (7)

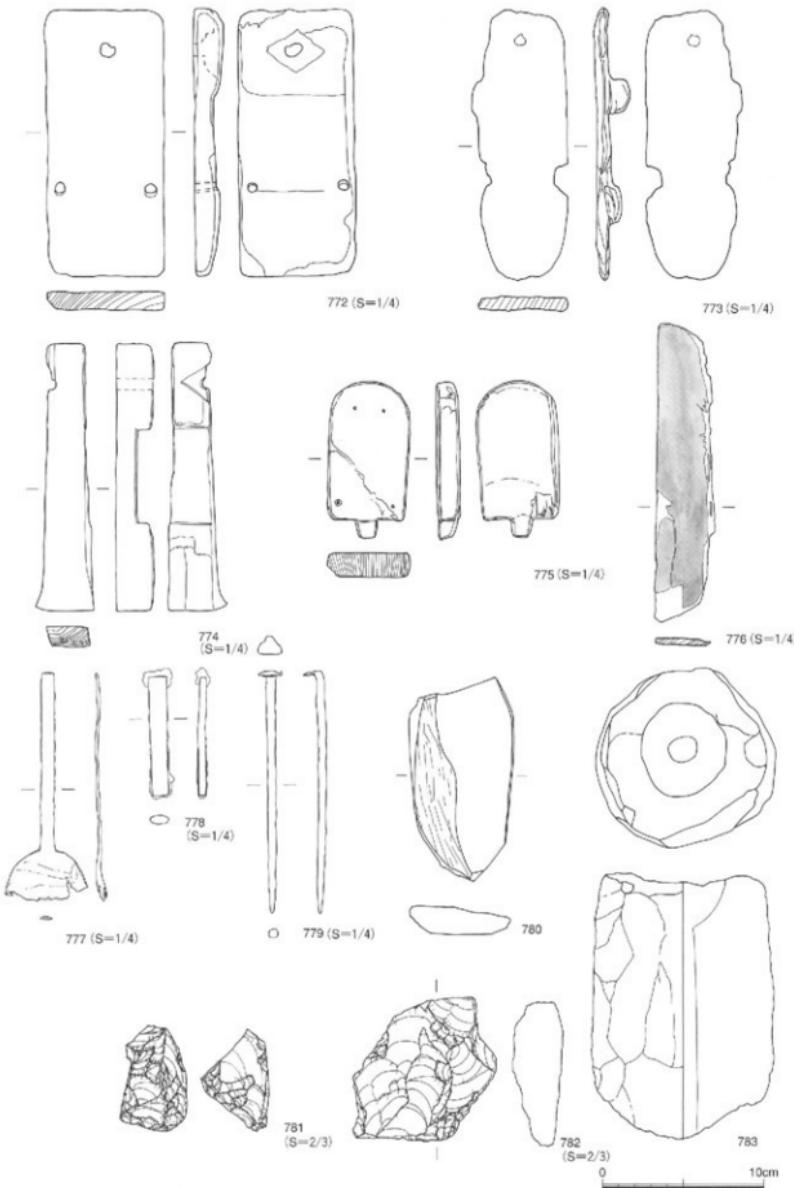


第222図 SX3001出土遺物実測図(8)



0 10cm

第223図 SX3001出土遺物実測図(9)



第224図 SX3001出土遺物実測図 (10)

駄である。棕櫚の葉緒が残存している。772は全長218mmを測る角形の木製の削り下駄である。773は長径222mmを測る木製の連齒下駄である。774は長径219mmを測る角形の木製の削り下駄である。775は加工木片である。片側中央に1本ほぞがあり表面には4カ所に釘穴が認められる。776は全面に墨漆が塗布された加工木片である。777は銅製の杓子である。778は用途不明の銅製品である。779は鉄製の釘である。断面形状は方形を呈している。780は素材に泥岩(流紋岩)を使用した石製の砥石である。781・782はチャートを使用した火打ち石である。783は長径163mm、幅110mm、重さ1490gの円筒形をした石製の錘である。

不明遺構 2 (SX3002) (第225図)

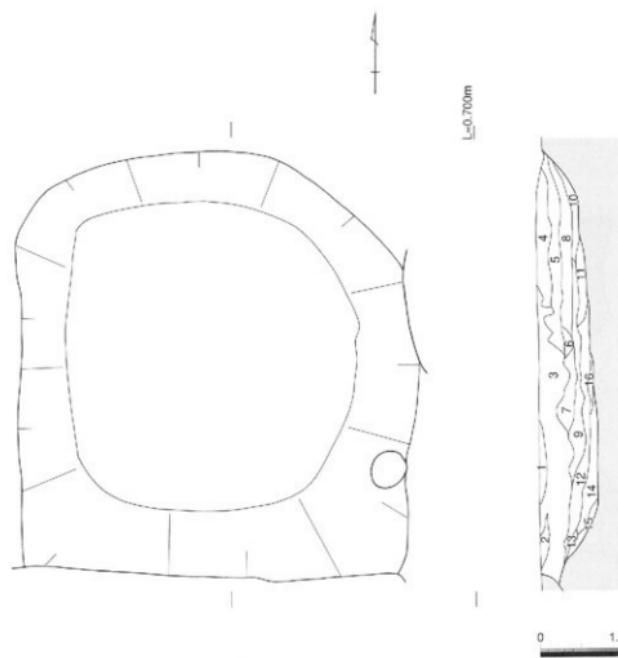
1区のC・D-7・8グリッドにまたがって検出された長さ約5.3m、幅4.9m、深さ0.9mの大きさの遺構である。南側の一帯をSX3001によって切られているため正確な大きさは不明だが、本来は長さ6mを越える不整積円形のプランを持つ遺構であったと考えられる。遺構の埋土中には炭化物や木片を含んだ砂質土が堆積している。遺構の大きさに対して遺物の出土量は少ないが、出土遺物のなかには下駄などの木製品が含まれている。

出土遺物 (第226・227図)

784は肥前系の芙蓉手の磁器製染付大皿である。草花文様が描かれている。1660年から70年のものである。785は染付による草花が描かれた中国漳州窯の青花磁器大皿である。高台脛付近には、粗い砂粒が多量に付着している。1590年から1630年のものである。786は肥前系の青磁香炉である。三足鼎形で高台外底面には蛇ノ目釉剥ぎが施され鉄錆が塗られている。内面全面は無釉だが酸化して赤色されたようになっている。787は肥前系の陶器皿である。全体に縁釉がかけられているが、底部外面は露胎のまま残され、内面見込部には蛇ノ目釉剥ぎが行われている。17C後半から18C前半のものである。788は瀬戸・美濃系の陶器製向付である。型作り成形によって製作された平向付で底部には半環足が貼付けられている。銅線釉の漬かけが行われているが、かけ残された窓には梅花文や木賊文が鉄絵で描かれ、長石釉が施されている。789は備前の陶器製擂鉢である。堅く焼き縮められ、内面には10条1単位の太い擂目が付けられている。16C頃のものである。790・791は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。いずれも口縁部全体に灯心油痕が顯著に残されている。792は内湾形の土師質鉢である。底部外面には煤が付着し、加熱による剥離が数カ所に見られる。793は木製の曲物の蓋である。柾目取りされ長径116mmの大きさを持つ。794は長さ214mmを測る角形の木製連齒下駄である。795は長さ215mmを測る木製連齒下駄である。底面後部の摩耗が激しい。796は長さ174mmを測る木製の連齒下駄である。797は木製の柄の一部と思われる。798は加工木片である。799は鉄製の釘である。断面の形状は長方形である。800は銅錢の寛永通宝(古)である。801は砂岩製の砥石である。擦り面は4面に亘っている。

不明遺構 4 (SX3004) (第228図)

1区のJ-4・5グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.6m、幅2mの大きさの形が不整形な遺構である。皿状に掘り込まれた深さ約0.2m足らずの遺構には締まりの強い砂質土が堆積している。



1 灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3	8 灰色	シルト質土	7.5Y5/1
2 オリーブ褐色	砂質土	2.5Y4/4	9 墓灰紫色	シルト質土	2.5Y3/2
3 黄褐色	砂質土	2.5Y5/4	10 黄褐色	シルト質土	2.5Y5/3
4 灰オリーブ色	シルト質土	7.5Y5/2	11 灰オリーブ色	砂質土	7.5Y4/2
5 灰色	砂質土	7.5Y4/1	12 灰色	粘質土	10Y5/1
6 オリーブ灰色	シルト質土	10Y5/2	13 オリーブ灰色	砂質土	10Y4/2
7 灰オリーブ色	シルト質土	7.5Y5/2	14 灰色	砂質土	7.5Y4/1
15 灰オリーブ色	砂質土	7.5Y4/2			
16 オリーブ灰色	砂質土	10Y4/2			

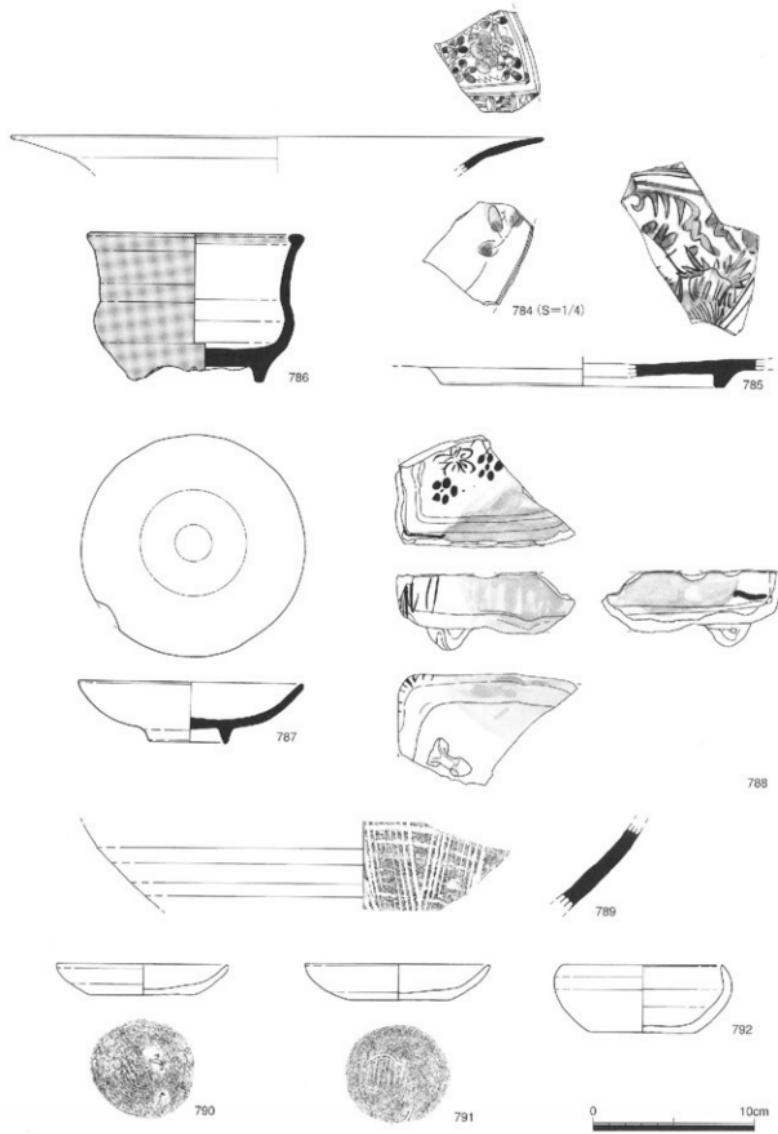
第225図 SX3002実測図

出土遺物（第229図）

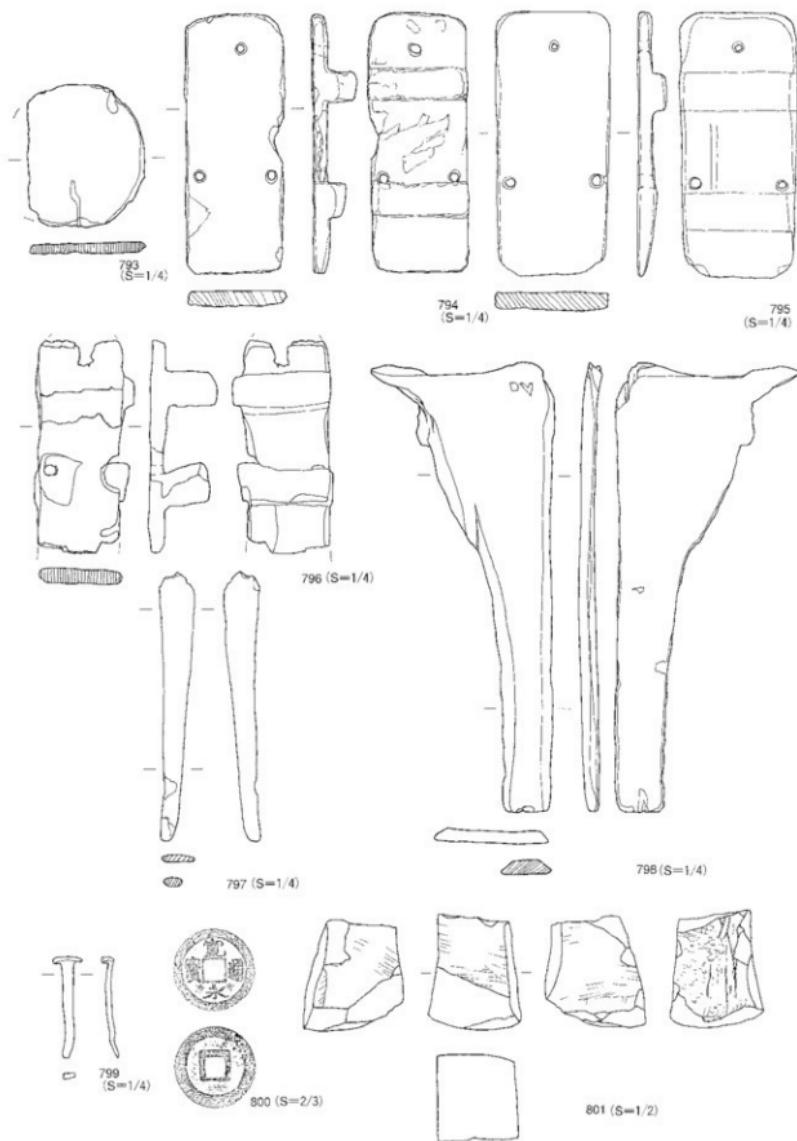
802は外面に草花文様が描かれた中国漳州窯の青花碗である。803はクリ底の底部を持つ肥前系の白磁猪口である。804は備前系の陶器製擂鉢である。内面には11条1単位の擂目が見られる。805は瓦当部に丸ノ中連珠三巴の紋が配された軒丸瓦である。

不明遺構 7 (SX3007) (第230図)

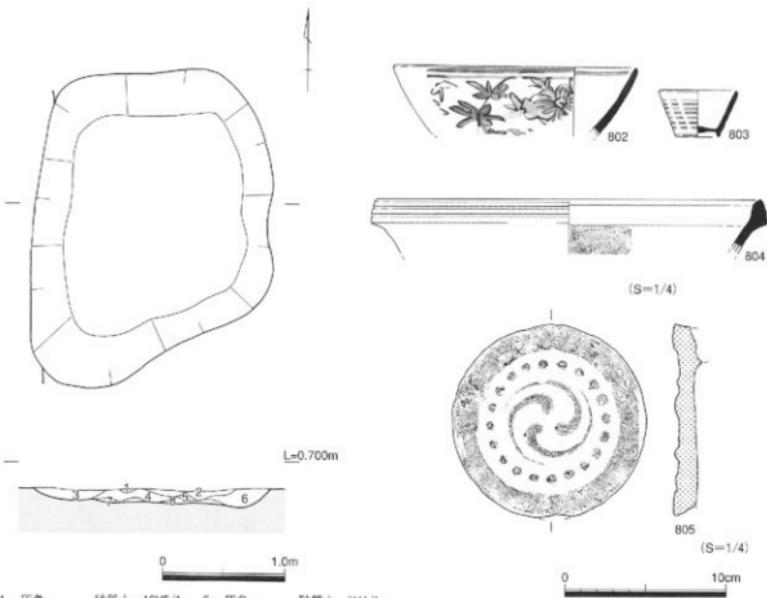
1区のK・L-7グリッドにまたがって検出された長さ約3.0m、幅0.9mの大きさの不整規円形の遺構である。皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内には炭化物や木片などを少量含んだ砂質土が堆積している。



第226図 SX3002出土遺物実測図 (1)



第227図 SX3002出土遺物実測図(2)



第228図 SX3004実測図

出土遺物（第231図）

806は肥前系の染付磁器碗である。筒型で外面には風景が描かれている。807は肥前系の陶器皿である。口縁端部を指すサエにより規則的に波状に変形させ、灰釉と鉄釉がかけ分けられている。高台部分は露胎のまま残されている。808は肥前系の陶器皿である。外面の下半部を除いて灰釉がかけられている。高台端部には砂目・胎土目痕が見える。809は内面に6条1単位の描目が付けられた備前系の陶器製鉢である。810は関西系の土師質の熔炉である。外面には煤が付着している。811は木製の漆椀である。内外面とも全体に赤漆が塗られ、外面には黒漆による文様が描かれている。高台内には穿孔がある。

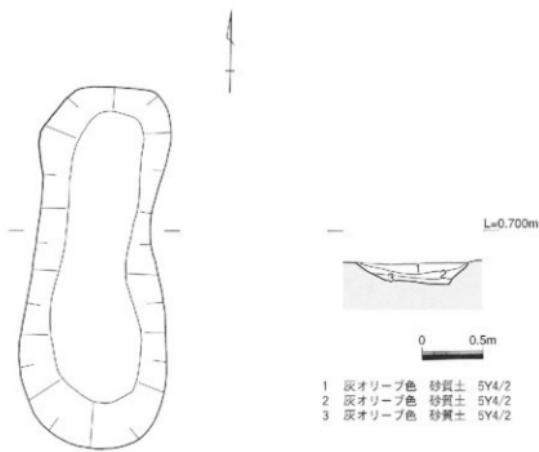
不明遺構 8 (SX3008) (第232図)

1区のL-4・5グリッドにまたがって検出された南北約3.2m、東西2.6mの大きさの不整形な形の遺構である。底面は凹凸が著しいが最も深いところでも約0.3mしかない。遺構内には少量の炭化物や焼土粒とともに瓦片や砾を含んだ砂質土が堆積している。

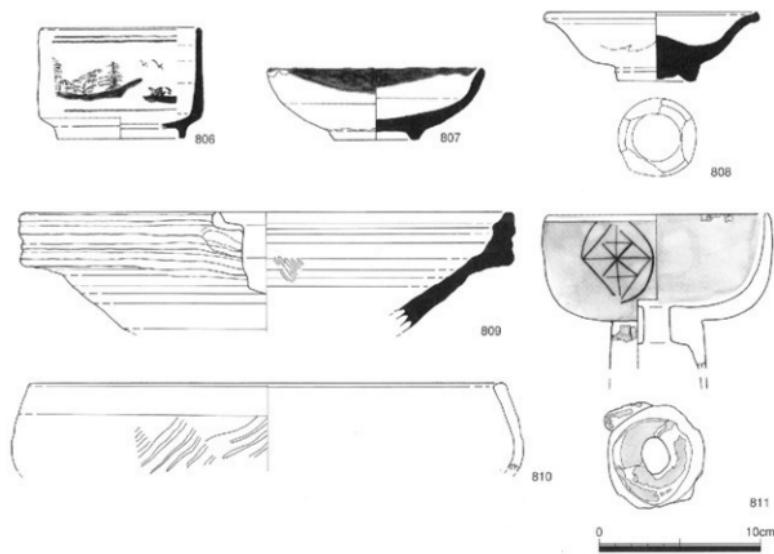
出土遺物（第233図）

812は青磁釉がかけられた肥前系の磁器鉢である。内面には草文がヘラ彫りにより陰刻されている。813は瀬戸美濃系の陶器製天日茶碗である。外面の下半部を除き全体に鉄釉がかけられている。814は肥

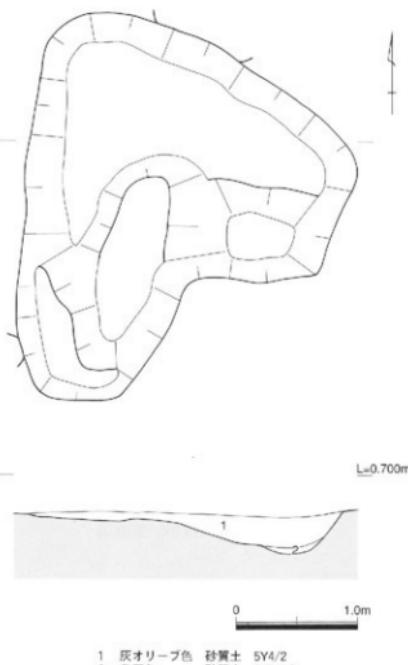
第229図 SX3004出土遺物実測図



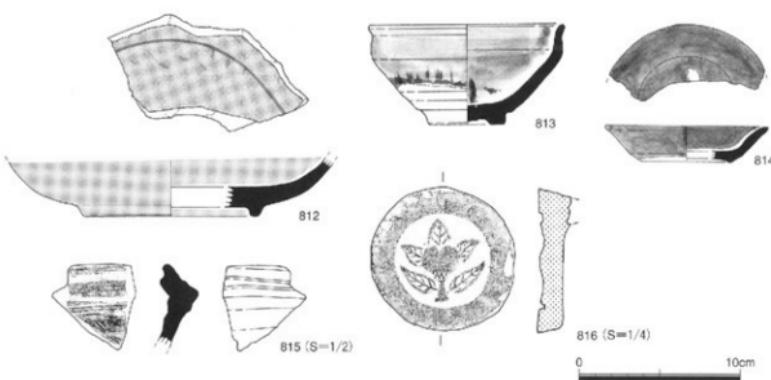
第230図 SX3007実測図



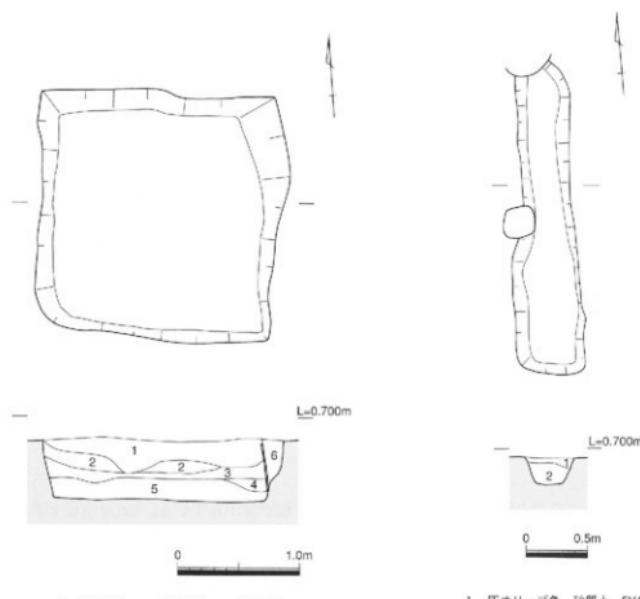
第231図 SX3007出土遺物実測図



第232図 SX3008実測図



第233図 SX3008出土遺物実測図

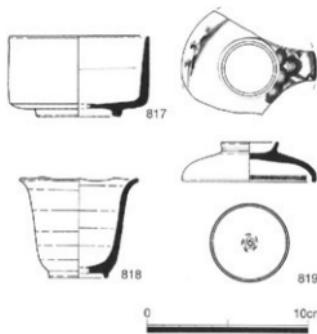


- 1 暗灰黃色 砂質土 2.5Y4/2
 2 灰オリーブ色 砂質土 5Y5/2
 3 黄褐色 砂質土 10YR5/6
 4 灰オリーブ色 砂質土 5Y5/3
 5 暗緑灰色 シルト質土 7.5G4/1
 6 灰オリーブ色 砂質土 5Y5/2

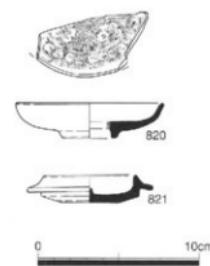
- 1 灰オリーブ色 砂質土 5Y4/2
 2 灰オリーブ色 砂質土 5Y5/3

第236図 SX3015実測図

第234図 SX3010実測図



第235図 SX3010出土遺物実測図



第237図 SX3015出土遺物実測図

前系の陶器皿である。内面見込部には胎土目痕が残されている。815は備前系の陶器製擂鉢である。816は瓦当部に丸の中横の紋が配された軒丸瓦である。

不明遺構 10 (SX3010) (第234図)

1区のM-3, N-2グリッドにまたがって検出された東西約2m, 南北2.1mのほぼ正方形に近い形の遺構である。深さ約0.5mの遺構は壁面を垂直に掘り込み、それから約0.2~0.4m内側に壁面に並行して杭列を巡らしたうえでさらに杭列に沿って板で開い、板と側壁との間に土を充填している。

出土遺物 (第235図)

817は肥前系の筒型磁器碗である。高台は露胎のまま残されている。818は肥前系の白磁鉢である。輪廻成形後、口縁部が規則的に指オサエされている。819は肥前系の染付磁器蓋である。

不明遺構 15 (SX3015) (第236図)

3区のK-14グリッドから検出され、長軸を南北方向にとる長さ約2.5m、幅0.4mの大きさの不整形な形の遺構である。断面がU字状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構の埋土には礫や瓦片が多く含まれている。

出土遺物 (第237図)

820は肥前系の三島手の陶器皿である。内面には渦と桜が描かれている。821は京信楽系の陶器製の土瓶の蓋である。頂部には摘みが貼付けられている。

不明遺構 16 (SX3016) (第238図)

3区のJ-11・12グリッドにまたがって検出された遺構である。遺構の南側が削半されているが、残された部分から推測すると一辺が約4.5m前後の大きさを持つ方形の遺構であったと考えられる。皿状に掘り込まれた深さ約0.5mのなだらかな壁面には部分的に狭いテラス状の段が設けられ石垣が積まれていた痕跡が残されている。遺構内からは陶磁器と木製品が多量に出土していることから、遺構の埋没する過程では遺物の発掘場所として使用されたものと考えられるが本来の目的は石垣などの存在から池またはそれに類似する性格の遺構として作られた可能性が高い。

出土遺物 (第239~245図)

822は肥前系の青磁碗である。内面見込部に引かれた二重圓線内には秋草の文様が描かれ、高台内には銘が認められる。823は肥前系の磁器碗である。外面には染付により桐の文が描かれ、高台外底面には「年製」の書き込みが残されている。824は肥前系の磁器碗である。外面には染付により丸の中に巴文と寿の変形文字が一段で交互に描かれている。825は肥前系の白磁の小碗である。削段形をしている。826は肥前系の染付磁器皿である。体部外面は草、内面は松波、内面見込部には五弁花文が描かれている。また、高台部分には圓線が引かれている。827は肥前系の染付磁器皿である。内面は文が描かれ、見込部には蛇ノ目釉剥ぎが施されている。高台部分は露胎である。828・829は肥前系の染付磁器皿である。体部は内面に草文が描かれ、見込部には蛇ノ目釉剥ぎが行われている。外面は高台部分が露胎のまま残されている。830は肥前系の染付磁器鉢である。体部外面は朝顔、内面は花と山、内面見込部には花が描かれている。また、高台外底面の圓線内の丸の中には「青」の変形字が書き込まれている。831は肥前有田の柿右衛門の染付磁器鉢である。外面には草花と牡丹、内面には草花がそれぞれ描かれ、